
アイアリス～黒馬島奇談～

Michel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイアリス〜黒馬島奇談〜

【Nコード】

N4246G

【作者名】

Michael

【あらすじ】

崩壊した故郷ガルフ島を出たゴットフリー、ジャン、タルク、ミッシェの4人は伝説の島、レインボーヘブンを探すため、新たな航海の旅に出る。旅の途中の海に、突然現れた黒馬島。寂れたこの島で、彼らを待ち受けていたのは、黒馬島の神剣、やみばとう“闇馬刀”と、御神体の黒馬、そして、美しい双子の姉弟、あまき天喜と伐折羅だった。アイアリスシリーズ、第2弾。

1 プローグ 黒い大地（前書き）

* * *

この小説は、「アイアリス 虹と闇の伝説」の続編です。

「アイアリス 虹と闇の伝説」の粗筋は、後書きをご覧ください。

1・プロローグ 黒い大地

プロローグ

レインボーヘブン、それはこの世の富をすべて集めた至福の島。だが、五百年もの昔、その島は突然、海に消えた。レインボーヘブンの守護神アイアリスは、その島を大地と六つの欠片に分け、そして封印したのだ。遙か未来、住民たちの子孫にレインボーヘブンを返す約束を残して。

レインボーヘブンの伝説にはこう記されている。

・レインボーヘブンは再び蘇る。その欠片たちが力を取り戻し、その血を受継いだ住民たちが、その地を訪れた時に……また蘇る。

* * *

1・黒い大地

やわらかな風が東から吹いていた。

朝の陽光に照らされた一隻の船。その船首で、ゴットフリーは海を眺めていた。

波の間に目新しい魚の群れが飛びはねる度、銀の鱗が反射鏡のようにきらめいて見える。ゴットフリーの鋼のように黒い髪が、それに合わせるかのように紅く輝く。そう、この男の髪は陽光にさらされると、紅に色を変える。

そのせい、二十歳そこそこの若さにもかかわらず、ゴットフリーの周りには何か抗いがたい大気のようなものが取巻いていた。

ほんの少し前まで、彼はこの海の遙か西、ガルフ島の警護隊隊長

として島の権力を欲しいがままにしてきたのだ。

だが、船首で海を眺めるその表情は硬く、精彩を放つとはいいい難いものだった。

ガルフ島を出航して一ヶ月……あの日食が起こるその前に、俺がこの見知らぬ海にいる事を誰が想像しただろう？崩壊……ガルフ島は、崩壊したのだ。わずかに残る大地を残して。

ゴットフリーは目前に広がる東の空に目をやった。晩夏から初秋へ向かおうとしている、澄んだ青い空。だが、目を凝らして見つめていると、その灰色の瞳の中には、鮮やかな七色の光が滲むように浮かび上がってくる。

虹の道標

至福の島、レインボーヘブンへの道標。この虹の終わる場所にレインボーヘブンがあるという。

だが、それは、強い海風にあおられた波しぶきを避け目を閉じた瞬間、彼の視界から消えてしまった。

ゴットフリーは、不思議な感覚に二、三度目を瞬たかせた。だが、もう、虹の道標は現れてはこなかった。

「虹を眺めていたのか？」

後ろから声をかけられて、ゴットフリーは、惘然とした表情で振り返った。小麦色の髪、とび色の瞳。彼とはまるで対照的な人なつこい笑顔の少年がそこにいた。

「いや……今はもう見えない」

「ふうん、そんなものなのか。タルクなんて、虹って雨上がりに見えるあれか？なんてとぼけた事をいってやがるし」

少年の名はジャン・アスラン。

「お前は……」

と、言いかけてゴットフリーは言葉を飲みこむように黙りこんだ。

「心配しなくても僕には見えているから。たとえ、夜の闇の中でも」

「夜でも、あの虹が見えるというのか？」

「だって、お前が生きている限りあれは輝き続けると、女神アイアリスは言ったじゃないか」

ジャンの言葉にゴットフリーは、思わず眉をしかめた。

あの女……レインボーヘブンの守護神アイアリスは言った。俺にレインボーヘブンの王になれと

「誰が心配などするか」

「そっか？なら、いいけど」

また海風が強く吹きつけてきた。船が大きく揺れた時、ジャンは立っているのに耐えきれず、隣にいるゴットフリーの腕にふらりとつかまった。

「おい？何だ？」

ゴットフリーは、いぶかしげにジャンを見遣った。見かけは十五〜六歳の少年でも、ジャンには強靱な力が宿っている。自らをレインボーヘブンの大地、アイアリスに隠された欠片　しかも、その礎なのと言うジャン。そのジャンが船の揺れごときに足をとられるものだろうか。

だが、ジャンは彼の腕をつかんだまま、崩れた態勢をもとどおりにすることができなかった。

「ジャン？」

ゴットフリーは、とまどいながら両の手でジャンの体をぐいと引き起こそうとした。ところが

こいつ、体が熱い

ジャンはゴットフリーの腕につかまっただまま、激しく息をきらしはじめた。耐えきれず、その場にがくと膝をつく。

「ジャン！」

「黒馬島が……近づいてくる」

「何だつて？ジャン、何を言っている？」

「黒馬島に……行って」

だが、ジャンは次の言葉を言い終わらないうちにゴットフリーの腕の中に倒れこみ、それきり意識を失ってしまった。

その時、二人の上に黒い影が覆い被さってきた。船の速度にあわすようにゆっくりと上空から伸びてくる巨大な影法師。ゴットフリーは、ジャンを抱えたまま啞然と空を仰ぎ見た。

黒い地層……船の上に突然現れた、こぼれおちそうな断崖の屋根。その表面には砂岩と泥岩の筋が波のように続いている。だが、礫も砂もすべてが炭化した鉱物であるかのように光を吸収し、その地を黒に染めていた。

黒い大地……まさか、これが黒馬島？！いたい、どこから沸いて出た？海には島など一つだって見えなかったぞ！

そして、船は吸い込まれるように、断崖の下に広がる入り江の奥へと入り込んでいった。

* * *

「おい、こいつ、本当に大丈夫なのか？」
がっしりとした体を小さく折り曲げて、タルクは、ベッドに横たわったジャンの顔を覗きこんだ。どうもかなり熱があるらしい。

「ミツシエ、こいつは一体、どうなっちゃったんだ？ガルフ島を出る時は、小憎らしいほど元気だったのに」

タルクは、腑におちない様子でベッドの傍らにいる少女、ミツシエの顔を見た。

「ジャンは、本当にお人好し……ガルフ島に力を与えすぎたのよ。もつと残しておけば良かった……自分の為に」

ミツシエは独り言のようにつぶやいた。そして、くすりと笑った。

「笑っている場合か？偶然だが船は入り江に入っちゃった。島には医者くらいいるだろう？なら、早く医者に診せた方がいい！絶対に！」

「怒鳴らないでよ。船を下りれば、いいだけの話。海にいちや、ジャンの力だってもどってこない」

ミツシエは不満そうに目元にかかった銀の巻毛をかきあげた。銀といっても髪はぼさぼさでお世辞にも美しいとはいえない。この少女はジャンより少し年下に見えた。だが、女の子にしては、身なりに気を使う事もなく、顔も服装も薄汚れていた。ただ、その瞳は澄みきった青。それだけが妙に人の心をひきつけた。

「……で、俺たちにどうしろというんだ？」

後ろから聞こえてきた声に振りむき、ミツシエは、かすかに眉をひそめる。

それは、船首から下に降りてきたゴットフリーだった。

「こいつは、倒れる前に黒馬島へ行けと言った。この黒い大地が黒馬島なのか？そこにいたい何かがあるんだ？」

「黒馬島にはジャンの友達がいる」

「友達、こいつに？」

「そう……前に会ったのは確か」

ミッシェは、小声でぼつりとつぶやいた。

「そう、前に会ったのは……百年前だったかな」

1・プロローグ 黒い大地（後書き）

* * *

【アイアリス 虹と闇の伝説 粗筋】

レインボーヘブン、それは豊穡の女神アイアリスに庇護された至福の島。だが、その島は、突然、海に消えた。

アイアリスはその島を七つの欠片に分け、封印した。そして、その住民たちを海へ逃がしたのだ。

レインボーヘブンの伝説にはこう記されている。

・レインボーヘブンは再び蘇る。その欠片たちが力を取り戻し、その血を受継いだ住民たちが、その地を訪れた時に、また蘇る。

* * *

舞台は、五百年後に移る。場所は、大海の孤島、ガルフ島。この島は島主リリアと、その息子、残酷無比と恐れられる、ガルフ島警護隊長ゴットフリーによって治められていた。

だが、ガルフ島は活火山である火の玉の噴火のおそれと、不自然な地盤沈下のためにやがては、海に沈む運命の島だった。

ゴットフリーは、第二の故郷を蘇るレインボーヘブンに求めている。そして、自らがレインボーヘブンの欠片、“大地”だと称する少年、ジャンとレインボーヘブンへの真の道標を探して、邪気、海の鬼灯つみのほおずきが集結する日食の日に、火の玉山に登る。

レインボーヘブンの真の道標。それは、日食の終わった空に鮮やかに映し出された“虹の道標”

その虹の終わる場所にレインボーヘブンがあるという。

だが、ジャンがレインボーヘブンの伝説の偽りに気付いた時、ガルフ島は火の玉の大噴火と、もう一つのレインボーヘブンの欠片、紺碧の海であるBWの怒りに飲み込まれ崩壊する。

ジャンの力で、わずかばかりの大地を残したガルフ島に現れた、女神アイアリスはゴットフリーに啓示を与えた。

“お前は、私が選んだレインボーヘブンの王。だが、本性は悪。お前は一つ間違えば、レインボーヘブンを恐怖の島に変える闇の王になる。だから、善であるレインボーヘブンの礎、大地であるジャンをつれて、至福の島を探さねばなりません”と。

ゴットフリーは、かつてのレインボーヘブンを襲撃した盗賊たちの末裔だった。

アイアリスは、盗賊たちを憎みながらも、新しく蘇るレインボーヘブンにその力を必要としてたのだ。

虹の道標に導かれ、ゴットフリー、ジャン、謎の少女ミツシエ、ゴットフリーの従臣タルクの四人はレインボーヘブンを探す航海へ出発するのだった。

2・黒馬島

黒馬島は、意外にも緑の平原だった。

海へせり出している黒土とは裏腹に、その入り江から続く低い丘には、芝のような丈の短い草が広範囲に続いていた。その丘の向こうからは、何やら甘い花の香が風にのって流れてくる。

なんだ、平和そうな島じゃないか。もっと怪しい土地を想像してたぜ。

ミツシエの後を追いながら、タルクはほっと息をついた。右の肩にはニメートルほどもありそうな長剣をかかえ、背にはジャンを背負っている。その重量はタルクにとっては気にするほどでもないらしい。ジャンは眠っているようだった。

「隊長、ミツシエはどこまで行く気ですかね？」

「さあな。ついてこいと言うから、そうしているだけだからな」

「隊長、俺はまだ、こいつらの事よくわからないんだ。そんなに信用しちまっていいんですか？」

「お前が、勝手に付いて来たんだ。今更何を言う」

薄く笑って、タルクの元に歩み寄る。長身であるにもかかわらず、巨漢のタルクの横ではゴットフリーは頭二つは小さく見えた。だが、いかつい顎鬚の口元を不安げにへの字に曲げたタルクの顔にはなんとなく愛嬌があった。

「まあ、あきらめろ。ここまで来て、一人で後戻りするわけにもゆかないだろう？」

「隊長――」

「情けない声を出すな。それと、俺を隊長と呼ぶのは、もう止めろ」
「そんな……隊長は隊長です！」

タルクの家はガルフ島でも、貧しい農家だった。そんな家の長男に生まれたのだ。働いても少しも楽にならない暮らしと、兄弟姉妹の世話に明け暮れる毎日に嫌気がさしたタルクは十八で家を飛び出した。

行くあてもなかったが、腕には覚えがあつた。そんな時、彼を受け入れてくれたのがガルフ島警護隊だった。

タルクがゴットフリーに初めて会ったのは、警護隊の認証式の日だった。自分より年下にもかかわらず、彼はすでに隊長と呼ばれていた。

どうせ、島主リリアの七光で奉りあげられた若造だろう。そう高をくくっていたタルクは、その姿を人目見るなり、目をみはった。灰色の瞳が自分の方へ向けられる度に、心の中を見透かされているような気がする。タルクは心臓の鼓動は高鳴った。

冷静だが、大胆。そして、的確

隊長の直属隊として、働くにつれ、ゴットフリーへの侮りの気持ち、それらの文字へと変わっていった。それ以来、タルクはゴットフリーを隊長と呼ぶことに違和感を抱いた事は一度もなかった。

「ここには、ガルフ島警護隊はないんだ。お前一人が俺を隊長と呼ぶのは何か変だ」

「でも、他にどう呼んだらいいんです？」

「ゴットフリーと」

「とんでもないっ！そんな事できません」

タルクは天変地異がきたように目を見開いた。ゴットフリーは、あきれたような顔をする。

「その敬語も止める。うつつうしい」

「そんな」

「敬称や敬語などというのは、集団の規律を守る為に使うものだ。年齢、階級、身分……、明確な上下関係を口頭で示す事で人は自分の位置を定め、そのように行動する」

「は？」

「だがな、ここには俺とお前とジャンとミッシェ、たった4人しかないんだ。こんな小さな集まりに階級も何もあつたものではない。そんなものはかえって邪魔だ。だから、もう、俺を隊長と呼ぶのは止める！敬語も使つな」

「でも……習慣になつちまつてるんですよ。それをいきなり変えろと言われても……」

心底困った顔をして、ゴットフリーを見つめる。

「それに隊長を隊長と呼ぶ事が、私にとっては安心なんです。心の支えというか……お守りのような物で」

タルクの言葉に今度はゴットフリーが解せない顔をする。
その時、タルクの背が小刻みに揺れた。

ジャン？

タルクは、不審げに背負つたジャンに目をやった。くくつと小さな声がする。

「お前、笑つてやがるな！」

「だって、お前らの話があんまり、面白いもんだから」

ジャンは、タルクの背から顔をあげると、にこと笑顔をみせた。
同時にミッシェを指差して言う。

「もう、降ろしてくれていいよ。ミッシェの所へ行くから」

ミッシェは、先に見える小高くなつた丘の大木の下でジャンたちを待っていた。

「お前、もう大丈夫なのか？」

「海にいるより、ずっといいよ」

だが、タルクの背から降りた時のジャンの足元はおぼつかない。ふらりと倒れそうになったその腕を後ろから捕まえたのは、ゴットフリーだった。

「いらぬ迷惑をかけるくらいなら、黙ってタルクに背負われてろ」

ジャンは笑う。

「ここは黒馬島だろう？だから、大丈夫。僕の事は気にしないで」

丘の上の大木の下に腰を下ろすと、ジャンはほっとしたように深く息を吸い込んだ。

「ぼくはここでちょっと、寝てるから、二人は島の見学にでも行つてろよ」

「寝てるって、こんな海風が吹きつけてくる場所ですか？冗談じゃない。必要なのは医者だろ、俺たちが探してやるから、お前、医者に行けよ」

「いいんだってば。夕方には船にもどるから」

ジャンは、二、三度タルクに向かって手を振ると、大木の根に頭を乗せごろんと横になった。本当にここで眠る気らしい。

「おい、お前！」

あわててジャンを起こそうとする、タルクを横にいたゴットフリーが手で制する。

「行こう、船には何もなければ。この島の様子も見ておきたいしな」

「でも……」

「あいつが寝たいというんだから、好きにさせろ」

ゴットフリーは、タルクの背を強い調子で押すと歩きだした。タルクは渋々それについて行く。だが、少し進んでゴットフリーは、

思い立ったように着ていた上着を脱ぎ、後戻りをする。

ジャンは、ばさりと上にかけられた布の感触に軽く目を開いた。

「それでも羽織ってる」

ゴットフリーは吐き捨てるように、そう言うところりと背を向けて歩きだした。

「心配してくれて、ありがとな」

ジャンはにこと笑って、その背に声をかけた。だが、ゴットフリーは、タルクをせかしながら振りかえりもせず行ってしまった。

* * *

「何だ、あの緑の平原は見せかけか……」

島の小道を歩きながら、タルクはつぶやいた。歩いてゆくにつれ、足元の柔らかい土の感触は消えうせた。そして、ごつごつとした岩のような地盤ばかりが目立ってきた。

「これは、溶岩だな。 度重なる火山噴火……溶岩が冷え、上に土が堆積し、また溶岩が流れ込む。その繰り返しが何年も続いてこの島を作ってきたのだろっ」

「しかし、隊長って、時々学者のような事を言いますね。 普段の姿からは想像もできない……」

タルクはそう言った後、あっと気まずそうに口に手をあてた。

いかん……隊長という言葉も敬語も使うと言われてたばかりだった。

ゴットフリーは、眉をしかめタルクを見据える。そして、恐縮し、怯えたようなその表情に苦笑する。

気まずいような空気に耐えかねて、タルクはぼそぼそと口を開いた。

「あの……すみません。俺はどうしても、できないんです。敬語を使うな。隊長というなといわれても……」

ゴットフリーは、わずかに俯き、薄い笑いを浮かべる。

「そうか……規律、礼儀、絶対の服従。それは俺が散々使ってきた言葉だ。いきなり総てを止めろといわれても困るのはお前か」

「隊長？」

「……だが、少しずつなら変えられるか？」

「それは……はあ、時間をいただければ、なんとか……」

「そうか、頼む」

ゴットフリーの言葉にタルクは思わず自分の耳を疑った。

た、頼む？隊長が俺に？そんな事一度だって言われた事がなかったぞ。それに、さっきジャンに上着をかけたあの態度……隊長は巷で噂されているほど冷酷ではない。それは重々承知はしていたが、こつも露に態度に示すなんて、これはどうした事だ？

タルクは信じられない気持ちでゴットフリーを見つめた。

変わってきている、この人は。あのジャンと出会ってから

その時、一羽の白い鳥が二人の頭をかすめて飛んでいった。ゴットフリーはなにげなく、その軌道へと目をやる。

白い鳥が飛んでいった先に、看板が見えた。

- 萬屋黒馬亭 -

「お誂え向きの店があるな。ちょっと、行ってみようじゃないか」
それは、古い石造りの商店だった。

3・萬屋黒馬亭 - 天喜（あまき）の白い鳥 - （1）

辺りには建物是一件も見当たらない。

《萬屋黒馬亭》

と書かれた木製の看板の文字は、部分的に脱色し剥げ落ちてしまっていた。所々欠け落ちた壁には、深い緑の蔦がびっしりと這い登り、それらは煉瓦を敷かれた暗紅色の屋根へと続いていた。

「随分、古い建物なのに、あのモダンな屋根はなんだか不釣り合いですね」

タルクの言葉にゴットフリーも同感だった。なぜなら、《萬屋黒馬亭》の煉瓦の屋根には普通の二倍はありそうな天窓があったのだ。

「おい、タルク、あれは一体どういう趣向だ？あの天窓の中には剣が据えられている」

「あ、本当だ。陽が眩しくて気付かなかった。でも……窓の飾りにしてもあんな所に剣を置くななんて……妙ですね」

ゴットフリーは、食い入るように天窓の剣を見つめた。そして、にやりと笑った。

おもしろい。ここにはきつと何かがある。

* * *

「いらつしやい。お待ちしておりました」

ゴットフリーとタルクが店の扉を開けたとたん、中から花の香がどつと流れ出てきた。

そして、沢山の花籠に囲まれ満遍の笑顔で二人を迎えたのは、少女、

あまき
天喜だった。

「何だ？ここは花屋だったのか？」

「違う、違う。ここは萬屋。でも、入口は私、天喜の花の店なの。お兄さんたちは、きっと恐ろしい武器が何かをお求めなのでしょう。でも、たまにはお花もよいものよ」

こぼれおちそうな笑顔で天喜は、二人を見やる。見たところはジャンと同じくらいだろう。蜜のような甘い声音、白桃の色合いをした頬。琥珀色の瞳。そして、自然に伸びた薄い褐色の巻毛が、その背中で揺れる度、辺りの空気を花の香に染めてゆく。

タルクは意味もなく赤面してしまった。

だが、可憐な微笑みの奥で天喜は見知らぬ客をしたたかに観察していた。

“こいつら、いったい何者？あの大男の剣の長さったら、どう？もう一人の方は……ちよつといい男ね。若く見えるけど、着ているものは上等。いずれにしたって、この島に観光客がくるわけだし、流れ者の武人つてところかしら”

「そこのお兄さん、きつとかわいい恋人がお帰りを待っているのですよ。いかがです？今の季節はコスモスが綺麗よ」

“どうせ客なんてほとんど来やしない。こいつらをうまく手玉にとつて、大枚はたかせてやるわ”

ゴットフリーは話しかけてきた天喜の口上にあからさまに嫌な顔をする。

「花には興味がない。恐ろしい武器つてやつには用があるがな」

「あーあ、つれないのね」

天喜は再び、華やかに笑った。

店の奥のカウンターでは、小太りで赤毛の中年男が天喜を見つめて、にやりとほくそえんでいた。どうも、この店の店主らしい。

「お兄さんって、海兵でしょ。きっと極悪な海賊たちを蹴散らして海の英雄ね。私ね、前からあこがれてたんだあ、そういう人に」
天喜が甘ったるい声を出す。だが、ゴットフリーは、軽蔑の色を露にして天喜を斜めに睨めつけた。

「……その小賢しい口を閉じる。下衆な笑顔も止める」

灰色の瞳が自分に向けられた時、天喜はひやりと背筋が寒くなった。

“怖い。心の奥をみすかされているようで……この人の瞳は、とても怖い”

天喜の心臓の鼓動がどくんどくと波打ち出した。体が震える。

無意識に零れだした大粒の涙が、白桃色の頬をつつと流れ落ちた。

「わ、わっ！泣くな。お嬢さん」

それを見て慌てたタルクは、天喜のそばに大急ぎで歩み寄る。

「隊長、ちょっとは気を使って下さいよ……隊長に睨まれたら大の男だって、びびっちゃまうっていうのに……」

「なら、お前が使ってやれ」

うるたえるタルクを尻目にして、ゴットフリーはぷいとそっぽを向いてしまった。

「隊長おー」

天喜はタルクの後ろに隠れるようにしてベソをかいている。その時、

チチ……チチチ……

店の天井から鳥の囀りが響いてきた。

ゴットフリーはその方向を見据え、目を細める。

天窓だ。剣が据えられた……天窓。あの剣は一体……そしてあの鳥は？

「ああ、あれは、私の白い鳥。そして、あの剣は黒馬島の宝剣、闇馬刀」
みばとう

天喜の顔にようやく笑みがもどった。

* * *

黒馬島の岬の近く、大木のある丘にジャンとミッシェはいた。さらさらと潮風が吹いてくる。

じゃあ……な。

ミッシェは足元にふわりと通り過ぎてゆく感触に小さく手を振った。

再び、ジャンに目を落そうとした時、ミッシェははっと、強張った顔をした。丘の向こうから、見知らぬ男がやってくる。何やら不審な雰囲気を感じて、ミッシェは思わず、大木の裏側に身を隠した。

痩せぎすで赤毛の中年男は、大木の下で眠っているジャンを見つけると、一瞬、驚いた顔をした。だが、次には狡猾な笑いを浮かべ、その元に歩み寄ってきた。

男はジャンの頬を軽く手のひらではたいてみる。だが、ジャンは死んだように動かない。

すると、次にはジャンの肩に両手をまわし、その体を起こしにかかった。

ジャンの体は、全く重力を無視していた。軽いのだ。まるで赤子

のように。

「すげえ！また、見つけちゃった。また、俺は見つけた！」

ミッシェはその様子を眺めながら、心臓の鼓動を一生懸命押さえようとしていた。大木の裏にいるミッシェと男の距離は手を伸ばせば届く程近い。

「また、埋めなくちゃ。また、埋めなくちゃ」

男は、ジャンをひよいと背負うと、意味不明な言葉をつぶやきながら元来た道を歩き出した。

ミッシェは困惑しながら、その後姿を目で追った。

つんと鼻を刺激する残り香がある。

これは、花の香り……この丘に来るときに潮風が運んでいた、花の香り。

* * *

萬屋黒馬亭で、ゴットフリーは解せない様子で、屋根に備え付けられた巨大な天窓に目をやった。

「闇馬刀？宝剣といったか。ということは、あの天窓はただの飾りではないな」

ゴットフリーは、つかつかと店の奥の天窓の下へ歩いて行く。だが、

「待ちなよ。兄さん、あれは売り物じゃねえ」

しゃがれたような声が、彼を制止した。

「お前は？」

「ここの店主のサムだ。剣が入りようなら、これなんかどうだい？この店自慢の一品だ。柄の装飾は象牙と金。この界限でも折り紙付の彫物師の作だ」

だが、ゴットフリーは気のない一瞥をサームに送る。

「装飾などは、問題外だ。何よりも俺が剣に求めるのは、その殺傷力だ」

サームの差し出した剣を目で拒絶すると、ゴットフリーは踵をかえして、天窓の下へ歩いていった。上を見上げ、にやりと笑う。

やはりな……

- 闇馬刀 -

刀身は鏡のように輝き、その切れ味の鋭さは疑う余地もない。天窓の剣はゴットフリーが求めた剣、まさに、そのものだった。

「俺は、あの剣が欲しい」

こともなげに言つてのける。

「と、とんでもない！ 闇馬刀はこの島の宝剣だ。それに、あの天窓は祭壇だ。あの剣は天窓から出すわけにはゆかない」

「祭壇？」

「黒馬島の闇馬刀は、光をもって神剣となり、闇にあつては魔剣となる。それ故、夜明けに東から差す陽光をもって剣を清め、日没まで光にさらす。その間、あの剣はまさに黒馬島の守り主となる。だが、闇は剣の魔性を呼び覚ます。日没とともに、天窓は閉めねばならない。闇馬刀に闇を見せてはならない。もし、そんな事が起こるうものなら……」

- 剣は、黒馬島に必ず仇をなす -

その時、天窓から入りこんでいた日の光が雲に遮られ、店の中が暗く翳った

「なるほど……天窓は東を向いているな。だが、それほどの宝剣なら、何故もつと然るべき場所に祭壇をつくらない？」

「さあな、うちの爺さんが、寺院から譲り受けたとは聞いているが……そこは燃えちまつたらしい。寺の坊主が一日だけ天窓を閉めるのを忘れたんだそうだ。その夜、火口から沸きあがってきた御神体……炎の馬に導かれるように西の山が火を噴いて」

「炎馬が火山を噴火させたというのか……」

「闇の中を飛び散る西の山からの火の粉が、炎馬の後を追いかけるようについていったそうだ。そして、業火は村の大半を燃えつくした」

火山噴火……サームの言葉はゴットフリーに故郷、ガルフ島の火の玉山を思いおこさせた。

あの日食の日、火の玉山に集結した邪気の群れ、迫りくる海……そして噴火。ガルフ島は崩壊した。それ故、俺はレインボーヘブンを探すのだ。第二の故郷を彼地に求めて。

一瞬、過去をさまよったゴットフリーの意識を呼び戻したのは、頭上から伝わってくる微かな振動だった。

天窓が揺れている？

雲が去り、翳っていた店の中に陽が差しこんできた。それがちょうど、ゴットフリーの頭上にさしかかった時、パリパリと乾いた音が響いてきた。

その瞬間、

空気が炸裂した！

「あっ！！」

天喜が叫んだ。鋭い金属音。そして、光が飛散する。

天窓のガラスが砕け散ったのだ。そして、天窓の中の宝剣はガラスの欠片を突き抜けるように、ゴットフリーの頭上めがけてまっすぐに落ちてきた。

- 闇馬刀 -

「隊長！危ないっ！！」

タルクは蒼白になって絶叫した。

だが、ゴットフリーは、目を見開き、天窓を見つめたまま微動だにしない。

その時、店の柱時計が正午を打った。太陽はちょうど天頂にあり、ガラスのなくなった天窓からは強い太陽光が差し込んできた。

ゴットフリーはかすかに首をかしげた風だった。だが、眩しすぎる陽光は一瞬、剣とゴットフリーの姿をかき消したのだ。

一気に貫かれた？

串刺しにされた？

天喜は、手で顔を覆い、タルクの横にぺたりと座り込んでしまった。

正午の時計の鐘が三つ目を打ち鳴らした時、黒馬島の宝剣、闇馬刀はざらりとその身を輝かせながら、店の床に深く刃を突き立てていた。

* * *

ジャンを背負った中年男がたどり着いたのは、展望塔が正面にある黒瓦葺きの洋館だった。かつては優美をきわめたであろう館は、今は古びて幽霊屋敷のように荒れ果てていた。その庭だろうか、館の隣には周りを高いトタン壁で囲われた敷地があった。男は注意深

く辺りを見まわすと、敷地の入口の錠をはずし、扉を開ける。

そのとたん、つんと鼻をつく強い香りが流れてきた。男はジャンを背負ったまま、中へ入って行く。男の跡をつけ、敷地に入りこんだミツシエは、目前に広がる光景に思わず声をあげそうになった。

この場所は空気までが赤く染まって、何て芳しく、何ておぞましい……

ミツシエの腰のあたりまで丈を伸ばした未知の花々。

その場所は、見渡す限りの紅い花園。

花園の中央に一箇所だけ、土肌をさらけだした窪んだ場所があった。男はジャンをそこに無造作に放りこむとシャベルを手にとった。

「埋めなくちゃ、埋めなくちゃ」

男は喜氣として、ジャンの上に土を盛り出す。

いったい、どういうつもり？あの男……

窪地が小山になると、男は満足げに微笑み、シャベルでぱたぱたと、小山の土を固めだした。

ミツシエは、紅い花の下にかがみ込んで、その異様な光景をなす術もなく見守っている。

ジャンは埋められたって大丈夫……でも、ここはとても嫌な場所。ゴットフリーとタルクを探して、早くジャンを出してあげなきゃ。だって、

この紅い花の香は、

人の心を狂わせる

4・萬屋黒馬亭 - 天喜（あまき）の白い鳥 - （2）

萬屋黒馬亭でざらりとその身を輝かせながら、黒馬島の宝剣、闇馬刀は店の床に刃を突き立てていた。

「ああ……なんて事！」

天喜は手足の震えを止める事ができない。陽光に照らし出されたゴットフリーの顔面は真紅に染まっていた。天喜はその時、剣は黒衣の男を真上から貫いたと思ったのだ。

だが、その男は倒れもせず、天窓の下にまっすぐに立っていた。そして、静かに足元に刺さった剣に手を伸ばした。

天窓の光が再び翳った時、

え？血の色が……黒く……変わった？

天喜は啞然として前を見据えた。天窓から差す光がその髪を紅く染めていた。ゴットフリーの黒髪は陽光にさらされると、紅に色を変える。それが天喜には血のように見えた。

ゴットフリーは、剣の柄を軽くつかむとふと口元をゆるめ、天喜の横にいたタルクを上目使いに見やる。そして、小気味よさそうに笑った。

「望むまでもない。この剣自ら、俺の元へやってきたのだから」
そう言い放つと、床から一気に闇馬刀を引き上げる。すると、その剣は、切先から急速に色を失い始めた。そして、それに逆流するかのよう、黒い閃光が刃の上を駆けぬけてゆく。

そんなっ！？闇馬刀が……

天喜は驚愕に身を震わせた。その光景を以前、目の当たりにしたタルクでさえ、呆氣にとられ立ち尽くしている。

剣の色が変わった……ガルフ島で隊長とジャンと戦ったあの時とまるで逆に……白銀から黒刀へ！！

「そうか、黒剣に紅く変わる髪！お前、ガルフ島の警護隊長だな。確か、島主の息子……ゴットフリー」

強張った顔のサームを、ガルフ島警護隊長は怪訝そうに睨めつける。

「何故、俺を知っている？こんな外海の島で知られるほど、俺の名は有名ではないはずだが」

「わしの兄者が行ったんだ、ガルフ島に。随分、前の話だが……その時にえらく変わった奴を見た……若いのにただならぬ雰囲気のものとして、

「俺がその変わった奴か？」

くすりと苦笑いをする。

「しかし、妙だな、ガルフ島はよそ者の入島には相当厳しかったはず。お前の兄はよく島に入れたな」

その時、言葉をはさんできたのはタルクだった。

「もしかして……お前の兄っていうのは、あの古物商じゃないか？リリア様がえらく気に入って、特別に入島を許した……外海の珍品を見せるとかいう条件で」

「ほお、長剣の兄さんは兄者を覚えてくれてるのか。その通りだ。兄者の名はザール。岬の先の洋館に住んでいるんだが、この界隈の海の珍品を収集する、ちよつとは有名な古物商だ」

ゴットフリーは小馬鹿にした笑いを浮かべる。

「兄は古物商で弟は萬屋か。ろくなもんじゃないな。商品は兄からの流れ物……そして、娘はポン引きまがいかな？」

天喜は外海の見知らぬ男の言葉に顔を真っ赤にして、小さく震えている。タルクは、また天喜が泣き出しはしないかと、はらはらし通した。

「余計なお世話だ！それに天喜はわしの姪っ子だ、娘じゃねえ。ぐたぐた言ってねえで、その剣をとっと、こちらへよこしな！」

サムは、黒衣の男から闇馬刀を奪い取ろうと手を伸ばした。

が、その瞬間、見えない火花に触れたかのように後ろに飛びのいた。「お前！闇馬刀に何をした？！握るところか触れもできねえ……体がしびれちまって。この剣の色といい……お、お前、まさか、黒魔術師か！」

ゴットフリーは、白けた様子で、闇馬刀の切先を小市民を絵に描いたような萬屋の主人に向けてみる。すると、サムはびくりと体を強張らせ、後ずさりをする。

沈黙が、不安と合いまみれながら、《萬屋黒馬亭》に広がっていった。天喜は空気の重さに堪えかね、タルクの肘をつんと突つくと小声で囁いた。

「あの嫌な奴、本当に黒魔術師？闇馬刀にしても、髪の色にしても……あいつ、バケモノじみてる」

タルクは、困ったように笑うと天喜を軽く制した。

「隊長は嫌な奴でもなければ、黒魔術師でもないぞ。ましてや、バケモノなんてとんでもない！」

そして、付け加えるように言った。

「俺らの船にはもつとバケモノっぽい奴が乗ってる」

天喜は、きょとんとタルクを見つめる。花屋で客引きをしている時の笑顔より、その表情の方がずっといい。タルクは、本気にそう

思った。だが、同時にサームとかいう粗野な店主に、これ以上ゴットフリーの相手をさせるのは酷な話だ……とも考えた。二人はあまりにも格が違い過ぎる。

タルクは、思い余って二人の間に入ってゆこうとした。が、一歩踏み出したとたん、その場につんのめって床の上に転がってしまった。

「な、何だ??」

タルクは狐に化かされたようにきょとんとしている。

“おい、誰がバケモノだって?”

背後から誰かの声がする。タルクは、きょろきょろと辺りを見渡してみた。だが、声の主の姿はない。

「タルク、何を遊んでいる?」

手にした黒剣をカウンターに置くと、ゴットフリーは訝しげにタルクを見やった。

「い、いや、遊んでいるわけではなくて……」

タルクが、カウンターの方に戸惑ったような視線を送った時、その隊長がはつと表情を変えた。

かたかた……かたかたと

闇馬刀が震えている。

ゴットフリーはすばやく闇馬刀を手にとると、その黒い刀身を目前にかかげた。

剣の中から何かが来る……

黒剣に変化した闇馬刀の刀身には、その名のごとく、暗黒の闇が

広がっていた。だが、その灰色の瞳には、闇の奥へと続く一本の道が見えたのだ。そして、そのはるか先の消失点から……何かが道をやってくる。小さな黒い点が、速度を増しながら真直ぐに駈けてくる。

「馬だ！黒馬が剣の中を駈けて来る！！」

ゴットフリーの叫びに、《萬屋黒馬亭》の面々は啞然と闇馬刀を見据えた。

「た、隊長、冗談もほどほどに……」

タルクは、軽く笑いながら隊長の横へ歩み寄った。だが、その時一瞬、時が止まったようにあたりに静寂が広がった。

どこか遠くから聞こえてくる蹄の音。それが、大きく響きだした時、

闇馬刀はゴットフリーの手の中で大きく揺れ出した。

《萬屋黒馬亭》さえもが震えている。

「タルクッ！伏せろ！」

闇馬刀を投げ捨てると、ゴットフリーはタルクを力まかせに床に押し倒した。

旋風……そして、

影のような、闇のような……巨大な黒馬が

ゴットフリーとタルクの上を霞めるように、飛び越えて行く。

ゴットフリーは信じられない面持ちで、その姿を目で追った。

黒い大地！この島に着いた時、俺たちの船の上に突然現れた断崖の屋根。あの黒だ……あれと同色の黒馬！

黒馬は、『萬屋黒馬亭』の窓ガラスを突き破ると、矢のような早さで外に飛び出していった。

窓に続く店の壁は、大音響と共にがらりと崩れ出した。崩れおちた壁に恐る恐る歩み寄り、天喜は空を見上げた。そして、小さく声をあげた。

「空が……青空が……闇に攫われてしまう」

暗幕を引くように、闇は東から青い空を覆い隠していった。巨大な影の下で真昼の光は急速に翳り出し、そして、空は不自然に暗い色をかえてゆく。

かろうじて西の空の一角だけに、青の光が残っていた。天喜はその空へ誘われるようにゆっくりと一歩、歩を進めた。

「だめだっ、外へ行つては――」

タルクが叫ぶ間もなく、天喜は闇の中へ消えてしまった。

5・萬屋黒馬亭 - 天喜（あまき）の白い鳥 - （3）

「天喜！」

サームは、泣くような声をあげて天喜の名を呼んだ。

だが、天喜がいた場所には、闇の帯が竜巻のように渦を巻き大きく膨らんでいる。禍禍し過ぎるその姿は、サームを震えあがらせた。

だめだ。とても、近づけない。近づけはしない……。天喜は闇の餌食にされたんだ。闇馬刀を天窓から出したから、これは天罰だ。

その時サームの後ろで突風が舞い上がった。タルクの長剣が闇に向かつて振り下ろされたのだ。

「うわあああああつー！」

タルクは天喜に対して責任があった。それならば、お前が気を使つてやれと、ゴットフリーに言われた言葉がタルクの心を捉えて離さない。あの娘は俺が助ける。

だが、タルクが渾身の力をこめて振り下ろした長剣は、いとも簡単に闇の壁にはじき飛ばされてしまった。ゴットフリーは、自分が投げ捨てた闇馬刀を探して床に目をやった。だが、その姿はどこにもない。

あの剣、黒馬に化身したか！

仕方なく、カウンターにあつた適当な剣に手を伸ばした時、

“ 剣を探す暇があつたら、早くあの娘を助けてやれよ ”

背後からの声にゴットフリーは、一瞬、虚をつかれた。

“ 剣などなくともいけるだろ？なんせお前は、悪の象徴だからな ”

「この声、ジャンか！？お前、どこにいる！」

“ そんな事より、早く行け！あの娘、死んじまうぞ。この唐変木
！”

「お前に言われなくてもっ！」

ゴットフリーは、そう言い捨てるとサムとタルクの間をかいくぐるように通りぬけ、闇の渦の前に出た。そして、天喜を捕らえているそれに向かって無造作に手を伸ばした。

「これは何っ？前が見えない……。私、闇の中にいるの？嫌だ！出してよ、誰か助けて！！」

天喜は闇の檻に囚われていた。夜とは違う全くの暗黒。自分以外は誰もいなくなってしまった無の世界。それなのに、息をすると蒸せるような空気が胸を支えさせる。

苦しい、息ができないわ。

それは、天喜が生まれてこのかた感じた事のない恐怖だった。

釣り上げられた川魚
網にかかった紋白蝶

今までは傍観し、楽しんでさえいた物の死が、今は自分の身近にある。

「死ぬのは嫌！！絶対、嫌！誰か助けて！」

天喜は、もがきながら闇の中で叫んだ。だが、その声に答えは返らない。

天喜はなす術もなく泣き出した。その時だった。

天喜の目の前がいきなり、白く裂けたのだ。

「こつちへ来い！」

長い五指を広げた手が、その裂け目から天喜を呼んだ。驚く間もなく、その手は天喜の腕を掴み、有無をいわず自分の方へぐいと引き寄せる。その瞬間、白い裂け目が大きく広がった。天喜はその腕につかまりながら、呆然と手の主の姿を見上げる。凍てつくような灰色の瞳……この男は、ゴットフリー！

怖い。この瞳はとても怖い……でも

天喜はゴットフリーを怖いと思った。だが、それは闇の中の震え上がるような恐怖とはかけ離れた感覚だった。

でも、この懷にいれば……きっと免れる。死や得体の知れないこの闇から

天喜は震えながらもゴットフリーにしかとしがみついていた。

闇は弾かれていた。

それは再び獲物を採りこもうと、再び、ゴットフリーと天喜の回りを取り巻き触手を伸ばしてきたが、どうしても二人に近づく事ができない。けれども、闇とゴットフリーたちとの均衡は徐々に崩れ出していた。

さて、どうすればいい？この闇は剣で斬れるような代物ではないぞ。

ゴットフリーは苦笑した。

一方、タルクはゴットフリーと天喜の後方で、長剣を構えたまま立ち尽していた。

俺はなんとしても助ける、助けたいんだ……隊長もそしてあの娘も。

その時だった。

“大丈夫。お前の長剣でぶった斬れ！ゴットフリーもろとも、ふつとばしてもいいんだぞ”

再び、響いてきた声にタルクは、訝しげに眉をしかめた。
「お前、ジャンだな。ふざけてないで出てきて手伝えっ！」

“手伝うから、早くやれっ……！”

タルクは、不満げにちらりと目を動かしてみた。だが、ジャンの姿はない。

「畜生！あんな奴は無視だ。隊長、伏せろっ、俺がその間、ぶった斬ってやるっ……！」

大声で叫ぶとタルクは、長剣を高く振りかざした。

ゴットフリーは、ちらりと闇の狭間からタルクを見やるとかすかに笑った。自分にしがみついている天喜の頭をぐいと押し下げると、同時に、自らも身を低くした。その瞬間、

「うおおおおおおおっ……！！！」

タルクの雄叫びと共にその長剣が空気を横一文字に切り裂いた。爆風がゴットフリーの頭上を通り抜けてゆく。

そして、その後を追うように蒼い光が炸裂した。

びっくりと一瞬、闇が震えた。

そして、突然、飛散した。

後に残ったものは、静寂と……月も星もない……闇とは違つ、まるで毒気のない夜だった。

「夜なのか？確か今は、真昼だったな……」

ゴットフリーは、床から立ちあがると、訝しげに窓の外を見やつた。天喜は、小刻みに震えながらその足元にすがりつく。ゴットフリーは、閉口したように眉をしかめると、灰色の瞳を天喜に向ける。

怖い。でも、この男から離れるのは嫌……天喜は混乱し、訳のわからぬ声をたてだした。

すると、ゴットフリーはいきなり天喜をどんと後ろへ突き飛ばし言う。

「タルク、お前の役目だろ」

ゴットフリーの後ろへ控えていたタルクは、大慌てで、天喜の体を手で支えた。大きな手は暖かった。天喜は、はっと我にかえるとタルクの顔を見やった。

「おい、大丈夫か？」

気よさそうなタルクの顔が、心配げに天喜を見つめている。天喜は心底ほっとした。そして、その大きな胸に顔をうずめると、放心したように泣き出した。

6・夜の消えた島 - 伐折羅（ばさら）の黒い鳥 - （1）

「何？、何で真っ暗？」

「まだ、お昼なのに……」

「太陽が消えてしまったんだ！こんなのおかしすぎるよ！」

子供たちは啞然と空を見上げた。車両はたったの一つのディーゼル機関車。乗客は黒馬島で唯一の学舎から数ヶ月ぶりに家に帰る十人ほどの子供たちだけだった。子供たちは半ばパニック状態で震え出し、中には泣き出す者もいた。

違う。太陽はいつもの場所にあるんだ。ただ、闇がそれを覆い隠している。

車両の一番後ろで、伐折羅^{ひなは}は漆黒の瞳を闇に向けた。

「だ、大丈夫だよ。駅にお父さんたちが迎えにきてるから」

機関士が子供たちをなだめるように言った。だが、その彼自体も額には冷たい汗をびっしりとかいていた。

「伐折羅んとは……迎えは無理か。一人でも平気か？」

機関士にむかって、こくんと一つうなづくと、少年は闇を見つめつづけた。

伐折羅に両親はいない。親代わりは萬屋と古物商を営んでいる叔父二人だ。だが、彼らは、親と呼ぶにはあまりにも強欲すぎた。

学舎へ通う子供の中で終着駅まで行くのは伐折羅一人だ。機関車が駅に止まると、他の子供たちは彼一人を残し、先を争うように車両から降りて親の元へ走っていった。

みんなは気づいていないけど、小さな闇は、しょっちゅう島に現れていたんだ。でも、昼の光を消してしまうなんて……こんなに不安。……そう、怖い。こんな時は誰だって怖いんだ。でも、僕は……。

怯えていた。だが、心とは裏腹にその口元には薄い笑みがこぼれている。体の芯が無意識のうちに感じている歓喜。深くたちこめた霧の向こうから、ずっと待ち焦がれていた何かがやってくるような。だが、伐折羅は、その思いをはっきりと自分の中に感じ取るのを拒むように頭を振り、再び窓の外に目をやった。

天喜あまきは、大丈夫だろうか。怖がって、泣いていないだろうか

その時、機関車の側面に黒い影のようなものが舞いあがってきた。はっと、気付くと伐折羅は窓の外に身を乗り出し、空に向かって高く右手をかざした。

「お前、僕を迎えに来てくれたんだな？」

チチチッと、轉る声が耳に心地よく響いてくる。指にふれる黒い羽毛のふわりとした感触。伐折羅は、透き通るような笑顔を見せた。

お前は、僕の……

- 伐折羅の黒い鳥 -

* * *

終着駅

昼の闇、理不尽な時間の中でタルクと天喜は伐折羅が乗った機関車が来るのを待っていた。手に持ったカンテラの光が天喜の水密糖

の頬をちらちらと照らしている。

本当に綺麗な娘だな。

心の中を悟られまいと、タルクはわざと閉口したように言った。

「なんで俺がお前の弟をお迎えしなきゃいけないんだ」

「だって、こんな危なげな中を私一人で待てというの？」

天喜はきつい口調で言い返した。巨体のタルクだが、すっかり天喜の下僕と化している。

「別に待たなくたって？弟とやらに一人で帰ってこさせればいいじゃないか」

「とんでもないわ！あの子が家に帰ってくるのは本当に久しぶりのよ。それでなくたって、伐折羅は怖がりやなのに、こんな怪しい日に、あんな臆病な子を一人で帰らせるなんて、絶対にできないわ」

いつの間にか、すっかり、この娘の世話役に収まっちゃった。こんな事なら、隊長にもう少し気をつかえなんて言うんじゃないか。

隊長を黒馬亭に残して、こんな場所に来るのは嫌だったのにと、タルクは、仏頂面で線路の先に目をやった。

機関車の姿はまだ見えない。辺りには、星も月もない嘘の夜。だが、あまりにも穏やかで少しの危険も感じさせない。駅に隣接した海から響く小波の音は眠気さえも誘い出す。タルクは機関車を待っているのが、退屈になってきた。

「学校へ行ってるたって、弟だろ？お前は行かなくていいのか」
その言葉に天喜は、一瞬、言葉をつまらせた。

「……学校は、寄宿舎制で学期が終わるまで家には帰れないし、こ

こらあたりでは頭のいい子しかいないのよ。私たちは親もいないし、お金だつてかかるでしょ。それに、弟といつても双子だもの。伐折羅と私は」

「ははあ、なるほど、弟は優秀でお前さんは、……でもないわけか？」

からかうような笑みに、天喜は口籠もってしまった。タルクはあわてて場をとりもとくと、すっとんきょうな大声をだした。

「まー、学校なんて、俺の家なんて誰も行つてなかったしな！こんな俺でも剣一本で、なんとかなつたんだ。親と死に別れたかなんだかわからんが、お前なんざ、とびきりの器量良しなんだから、気にすることなんか何もないぜ」

「本当にそう思う？」

「あ、でも、勉強はした方がいいぞ。やっぱり馬鹿より頭のいい方がいいに決まつてる」

必死でまくし立てる大男を見て、天喜は思わず吹き出してしまう。タルクつて、見かけは大入道だけど、実はいい人でしょ」

天喜の言葉にタルクは思わず赤くなる。天喜はその姿を見て、鈴のような音色の声をあげて笑った。

「それに比べて、あの男……タルクはよくあんなのと一緒にいるわね」

「あんなのつて……隊長のことか？お前を助けてくれたのはあの人じゃないか」

「だって、怖いんだもの」

何とかゴツトフリーの印象をいい方に引き上げたい。だが、“怖い”といわれてしまえば、否定する言葉が見つからない。凍てつくような灰色の瞳、何年一緒にいても、あの眼光には身の縮まる思いがする。

「タルクはあいつが好きなの？」

「好き……とかじゃなくてだなー。そういうんじゃない……」

言葉じゃ何とも説明ができない。

「それより、問題はこの闇だろ？お前、何か心あたりはないのか」

「心あたりは……なくもないんだけど」

「心当たりがあるのか！？」

天喜の答えはタルクには意外だった。

「家のすみっこや、階段の下とかよ。私と伐折羅は小さな頃からよく、見かけていたの。でも、とても小さくて手で払いのけるとすぐに散ってしまうんで、それがおもしろしくて、よく二人で遊んでた。ぜんぜん怖くもなかったし」

「それが、今日、お前を飲み込んだ闇なのか？」

「……わからない」

「あの黒馬に化身した神剣の名にも、“闇”の文字がついていたな。確か“闇馬刃”。この島と闇は何か因縁でもあるのか」

「そんな話は聞いた事もないわ」

その時、線路の向こうから、汽笛の音が響いてきた。タルクは何故だかほっとした気分になって線路に目を向けた。

「来たかつ！いやっ、あの機関車、走りすぎだろっ！」

車輪が火花を吹いている。斜めに傾きながら車両が迫ってくる。

暴走しているんだ。あの機関車は！！

7・夜の消えた島 - 伐折羅（ばさら）の黒い鳥 - （2）

「何故、お前がついて来る？」

凍てつく灰色の瞳が向けられた時、サームは、びくりと体をこわばらせた。

「こ、ここらあたりは、俺の兄者の土地だからな。しっかり、見張っておかないと、あんたらみたいな、おかしな奴等に荒らされちゃあたまらん」

だが、ゴットフリーの意識はサームではなく、前方の丘に見えてきた大木に向けられていた。ジャンが寝るといつて横になっていた、あの大木だ。

「ん、木の下に誰がいるぞ」

サームは一瞬、まずい場所に居合わせたような気がした。そこには一人で泣きじゃくるミツシェがいたのだ。

「おい、俺を呼んだか」

泣いていようが笑っていおうが、一向に興味がない。少女に向けられたゴットフリーの言葉は冷ややかだった。

「うつん……多分、呼んだのはジャン」

「また、あいつか」

タルクと天喜が、弟を迎えに萬屋黒馬亭を出た後、ゴットフリーはジャンを置いてきたこの場所が気になって仕方なかったのだ。多分、自分と呼んでいる。胸騒ぎをおこさせる……そんな馬鹿げた事をする者は、この得体の知れない娘かジャンに決まっているではないか。

「ジャンは、花畑に埋められた」

「何！？という事だ」

「男がジャンを花畑に埋めた」

ミッシェは、丘の下に見えている黒瓦葺きの洋館を指さした。

「馬鹿な！」

そう言い終わらないうちに、もう、ゴットフリーは洋館に向かって駆け出していた。ほのかに感じていた嫌な予感のせいもあったが、もともと事の判断と行動が並外れて早いのだ。

あの氷のような男があんなに慌てるなんて……しかし、あの屋敷はまずい。兄者、また、何かやらかしたな。

サームは、苦々しい顔でゴットフリーの後を追った。

* * *

不条理な真昼の夜は、まだ、明ける気配すらみせない。かすかな街灯の光の中に、洋館の黒い影だけが浮かび上がっている。幽霊屋敷のような姿は、陰鬱という言葉が具現化されたかのようなだった。

「ここか！」

ジャンが埋められた場所……ゴットフリーには、手に取るようにその位置がわかった。迷惑以外の何ものでもなかった。だが、ジャンに言わせれば“シンクロ（同調）”しているそうなのだ。彼とゴットフリーは。

洋館の隣にある敷地　鍵をかけわすれたのだろうか、少しばかり開いた扉から花の香りが流れてくる。

「待て！その扉を開けるな！」

サームが制止の声をあげたのは、ゴットフリーが敷地の中に足を踏み入れた後だった。

一面の紅い花園

一瞬ならば、かぐわしいかろう。花の香は、次の瞬間、むせ返るようにきつい刺激臭となった。だが、サームを驚かせたのは、その事ではなかった。

紅い光が、道を作り出している……。

花園の数箇所に備え付けられていた白色灯とは、明らかに違う紅い光。そう、花自体がその紅色を輝かせている。そして、それらはゴットフリーを導くように一本の道を作っていた。

驚愕するサームを尻目に、ゴットフリーは、平然と紅い道を走っていた。

そして、花園の中央に不自然に盛られた土山を見つけると大声で叫んだ。

「まだ、土がやわらかい。ここを掘るんだ！」

「なんで、わしが……」

「つべこべ言わずにさっさと掘れ！」

サームは投げつけられた視線に、一瞬、凍りつく。ヤバイ……この男の目、“逆らうと絶対に殺される”サームは、びくびくと震えながら、置きっぱなしにされていたシャベルに手を伸ばした。

埋められた穴を掘り返すのは容易だった。土が軟らかい上に穴自体はそれほど大きいものではない。サームが少し掘り進んだところで、そばで見ていたミッシェが指差す。

「そこにいる」

土の中に白い手が見えた。

「そこを退け！」

サームを追い出すと、ゴットフリーは穴の中に飛び込み素手で土を掘り起こした。やがて、人の頭が土塊の中から現れてきた。あせった様子でその顔面にかかった砂を払い落とす。

ぐったりと意識がなく、小麦色の髪も、日に焼けた肌も全部が土色に染まっていた。ジャンだ。ゴットフリーはジャンを土の中から引きずりだすと、その頬を叩いて言った。

「お前、何でこんな場所に埋められたっ！」
その時だった。

「貴様ら、人の土地で何してるっ！」

紅い花園の持ち主　瘦せぎすで赤毛の中年男が大層な剣幕で駆けてきた。

「兄者！」

「サーム、お前の客か。ここには入るなと前から言ってるだろう！」

「ち、違う。ザール兄……こいつらが勝手やって来たんだ。わしはそれを止めようと思って……」

ザール兄？この男。黒馬亭で名前が出ていた古物商か。リリアと面識があったという。

ゴットフリーは、上目使いに男の度量を見定める。痩せてはいるが同じ顔、おそろいの目障りな赤毛……こいつら双子か。兄も弟と同様、最低ランク。しかし、兄のどんより腐ったような目には、何か異様な感がある。

「あいつがジャンを埋めた男か？」
だが、ミッシェはその問いを無視するように、ジャンの方を指差した。

「目を覚ましたみたい」

「何？」

腕に抱えたジャンに視線をもどすゴットフリー。

「あー、よく寝た」

「……」

「あれ、ゴットフリー？それに何でこんなに土まみれなんだ？」

「お前、何でもないので……生理めにされて」

解せぬ表情のゴットフリーを見て、ジャンはにこと笑顔を見せる。
「いや、どちらかというと、すごく快適！土の中だとかえって力がわいてくる」

……そうか、こいつはもともとは、レインボーヘブンの大地……

まんべんの笑顔のジャンを無造作に地面に放り投げると、ゴットフリーはサームに向かって、はき捨てるように言った。

「もう一度、こいつをここに埋めてやれ！」

* * *

「狂ってる、時間もあの機関車も！」

「どうにかしてよ！」

と、天喜に言われてもタルクにはなす術が見つからない。天喜の弟、伐折羅を待つ終着駅。暴走する機関車はもう、二人の目の前まで来ている。

タルクは、半ばやけくそで長剣を鞘からひきぬいた。すると、長剣から蒼い光が漏れ出しているではないか。

あいつの力？まだ、この剣に残っている

黒馬亭でゴットフリーと天喜を闇から助けた時、長剣からほとば

しった蒼い光。あの時、確かに聞こえた。ジャンの声が。

タルクは、仁王立ちで暴走してくる機関車を睨みつけた。そして、いきなり2メートルもありそうな長剣を振り上げた。

「機関車でもかまうものか、ぶった斬つてやる！」

機関車が通り過ぎようとした瞬間、タルクの長剣が客車との連結部分に振り下ろされた。地鳴りと爆音が合わさったような、凄まじい騒音。天喜は耐え切れず耳を塞ぎ、その場にしゃがみこむ。

闇に蒼の光が炸裂した。

そして、機関車の先頭車両は凄まじい勢いで海に突進していった。連結部分を切断された客車は、脱線し、バランスを失ってホームの反対側に転がり落ちた。

タルクは長剣に力を全部吸い取られたかのように、ホームに膝をついた。実際、頭も体もしびれきって、目の前が真っ暗になってゆくのがよくわかった。

いや、もともと、外は夜だろう？ 暗いのは当たり前。それなのに、あの客車の上の闇は何だ！？

伐折羅が乗っていた客車が闇に包まれている。夜とは違った深い闇、客車の様子をつかがう事すらできないほどの。

「伐折羅、無事なの？！」

「待て！黒馬亭での事を忘れたのか。闇には近づくな！」

客車に駆け寄ろうとした天喜をタルクの太い腕が制止する。

海鳴りの音が響いてくる。じんとしびれたタルクの耳が、その音をやっと聞き分けれるようになった時、

「何だ？あの闇は……」

タルクは客車の上の闇を指差した。

それは、渦を巻きながら濃くなってゆく。逆に空が白みはじめてきた。くるくると回りながら、夜をからめとりながら、闇は上へ上へと舞いあがる。

「え……、翼？！」

あれは、あれは……、おかしい事にはすっかり慣れたと思っていたが、またか？またなのか

不本意ではあったが、タルクは、叫ばずにはいらなかった。

「あれは、鳥だ！それも客車を飲みこむ程の巨大な黒い鳥！」

巨大な鳥が弧を描くほどに、夜は薄れてゆく。そして陽の光が、滲むように溢れ出てきた。真昼が夜に変わってから何時間がたっただろうか。やっと、戻ってきた。まともな時間とそれに見合った明るさが。

やがて、大破した客車の姿がタルクたちの前に姿を現した。窓のガラスは一枚残らず割れ落ちて、木造の車両は転倒した衝撃で大穴があいている。

そして、線路の脇に一人の少年が立っていた。

消えた夜が化身したかと思うほどの漆黒の髪と瞳。“これが、伐折羅か”と、タルクはすぐに合点がいった。

髪や瞳の色は違っても天喜と同じ顔、同じ背格好。……が、伐折羅には、天喜のような華やいだ感はあるでなかった。ただ、つややかな黒髪が風になびく様や、深く澄んだ漆黒の瞳は、静かな夜の湖底のように寂しく、また美しく、人の心に深く憧憬の念を起こさせた。

陽と陰、天喜と伐折羅にはその言葉がよく似合った。

8・夜の消えた島 - 伐折羅（ばさら）の黒い鳥 - （3）

天喜は伐折羅に駆け寄るとその首筋をしかと抱きしめる。

「良かった。無事だったのね」

「僕の黒い鳥が守ってくれたんだ」

「ああ、良かった。あの鳥が闇を食べてくれたのね」

でも、いいんだろうか。あんなに大きくなってしまっ

伐折羅は、上空で弧をえがく巨大な黒鳥にとまどいを隠せない表情で言った。

「あれは、本当に伐折羅の黒い鳥？信じられないわ」

怯える天喜の声が届いたのか、黒鳥は大きく羽をはばたかせると真っ直ぐ上へ舞いあがった。そして、じきにその姿は黒い小さな点になり、完全に高い空へ消えてしまった。

「タルクつたら、聞こえてるの？」

唸然と黒鳥の行方を目で追っていたタルクだが、腕に流れたチクリと痛い感覚に我をとりもどした。

「え、ああ、つねるなよ。何なんだよ」

天喜が彼の太い腕に爪をたてていた。その後ろには天喜の背に隠れるようにして伐折羅が、タルクの顔色を窺がっている。

「さつき、無事に逃げれた機関士さんが連絡所に走っていったわ。」

後の事は電鉄会社にまかせて、早く帰りましょうよ。こんな場所に何時までもいたくないわ」

「帰るって、黒馬亭にか？あそこは俺の家じゃないぞ。それに、あの鳥はいったい何なんだ！？剣から飛び出た黒馬といい、この島は珍獣ワンダーランドか！」

「あれは、闇食鳥。伐折羅の黒い鳥」

「……」

まるで合点が行かぬ様子のタルクに伐折羅がおずおずと口を開く。

「母さんがいなくなった日にきた鳥なんだ。あの鳥は、闇が好きで……でも、いままでは、小さな靄をかじるくらいで……闇を飲み込んでしまうなんて……信じられないよ」

かすかに唇がふるえ、顔が青ざめている。明らかに伐折羅は見知らぬ巨漢のタルクを恐れていた。その空気を感じ取ってか、ありったけの優しい声でタルクは言った。

「母さんがいなくなった日？親とは死に別れたんじゃないやなかったのか」
「お父さんは死んだけど、お母さんは行方知れずなのよ……」

複雑なタルクの表情と、とまどった様子の伐折羅をきづかってか、天喜はわざと明るく笑ってみせた。

「この人はね、タルクについて私のボディガードに名乗りをあげた人！だから、怖がらなくても大丈夫。それに、こんな大入道でも気は優しいんだから」

「おい、誰が名乗りをあげたって？」

「あら、私を守ってくれるんじゃないかったの」

鈴のような声で笑う天喜。重くなりかけた空気を換えてくれた天喜に、タルク救われた気がした。しかし、女の子って、こんな笑うものなのかと、タルクはしみじみ感心する。剣と警護隊一筋に生きてきたタルクの身近な女の子といえば、いつも無表情なミッシェぐらいなものだったから。

「……まあ、とにかく黒馬亭までは送ってゆくが、その後は面倒みきれないぞ」

あの木の下でジャンとミッシェを連れて、さっさとこんな島は出ちまおう。あの黒剣に色を変えた闇馬刀……隊長を待ちかまえてい

たように天窓から落ちてきたではないか。きっと何か罾がある。隊長をここに長居はさせたくない。

その時、チチチツと囀る鳥の声が聞こえてきた。

「あ、白い鳥がもどってきた」

天喜は、空を見上げて笑顔を作る。白い鳥が天喜の肩にそつと舞い降りた。その様子を伐折羅は無言で見つめていた。

妙に大人びて冷涼とした眼差しには、タルクを恐れた臆病さは微塵も感じられなかった。

9・さらに闇へ(1)

「おい、やめろよ。砂をかけるな!」

「あの男が埋めると命令したんだ。文句があるなら奴に言え!」

サームは半ばやけくそで、ジャンを再び埋め始めた。彼の後方でゴットフリーが見つめている。逆らえなかった。その灰色の瞳に負の催眠術をかけられたように、サームは恐れ慄いていた。

「もうっ、やめろってばっ!」

ジャンはかけられた砂を弾くように、右の手をぱつと広げた。その瞬間、サームの体は1メートル程もふつとばされ、ごろごろとゴットフリーの手前を転がっていった。

「ゴットフリー、お前っ、いい加減にしろよっ!」

埋められていた穴から軽々と飛び出し、ジャンはゴットフリーの襟釘を無造作に握りしめる。

こ、こいつは、あの男が怖くないのか。それに、今、俺を、飛ばした力は何だ?

サームは、おどおどとジャンを見あげた。

ゴットフリーはそ知らぬ顔でジャンの手を払いのける。

「快適なんじゃなかったのか」

「ずっと、土の中にいちゃあ、レインボーヘブンを探せないだろっ!」

その時、無言で二人の様子を見詰めていたザールがあつと声をあげた。

「レインボーヘブン!」

目を見開き、体はぶるぶると震えていた。そして、口もとを薄く

開くと恍惚の表情で、ジャンに目を向ける。

「お前ら、レインボーヘブンを探してるのか？」

「ああ」

「あ、あの島は伝説の島だぞ。ただの夢物語の！」

「それが、どうした？お前には関係ないだろ」

そっけないジャンの答えに、ザールはたじろぎ言葉につまった。だが、相変わらず目だけは、ちらちらと彼の方を垣間見ている。

勘にさわる奴……ゴットフリーはザールの不審な態度に眉をひそめた。

「ジャンを埋めたのはお前だな。何のつもりかは知らないが、事と次第によつては、お前もそうしてやろうか」

どきりとした様子でザールはゴットフリーに視線を移す。

「ただし、俺は生きたまま埋めるなんて無粋な真似はしないがな」

瞬間、ザールの右の頬から鮮血が飛び散った。ザールは凍りついてた。剣の血を振り払いながら、口元では笑っているゴットフリーの灰色の瞳の奥で、激しい怒りがうずまいている。そして、それは否応無しに、ザールの心臓を握りつぶそうとするのだ。

「あ……ち、違う。わしじゃ……ない」

頬を押さえながらうずくまるザールの姿をジャンは、戸惑いながら眺めている。その視線を遮るように、ミッシェが空を指差した。「闇が消えてゆく。夜が明けるよ」

ミッシェが指差した空の向こうが、白く輝いていた。花園にいた面々は今までの騒ぎを忘れたかのように、空を見上げた。夜明けよりも強過ぎる日差しが、嘘の夜を消し去ってゆく。

「ようやく、当たり前前の昼がもどったのか」

吐きすてるように言うゴットフリーの姿を見るなり、ザールは再

び、ぶるぶると震えだした。

陽光が彼の黒の髪を紅に染め上げていた。

ああ、この髪の色……深い闇の中で炎が燃え広がるような激しさの。

「黒から紅に変わる髪！どこかで見たと思ったら、お、お前、ゴットフリー隊長だな。ガルフ島警護隊の！」

ゴットフリーは帽子を黒馬亭に置いてきた事を後悔した。彼の髪につきまとう、こういう輩の奇異な眼差しにはいい加減うんざりだった。

「その台詞は、もう聞き飽きた」

「わしは、島主リリア……フェルトに会った事がある」

「それも聞いたな」

白けた表情のゴットフリー。だが、彼を見つめるザールの目は好奇に満ちあふれていた。頬につけられた傷の痛みなど、すっかり忘れてしまっている。

あの髪の色。わしの手元のどんな宝より、深淵とした美しさ。

欲しい……そうだ。ガルフ島であの警護隊長を見てから、わしはずっと、あの髪が欲しかった。

ザールの興味は、完全にジャンからゴットフリーへと移行していた。

また、兄者の悪い癖が始まった。兄者は、珍品には目がないんだ。だが、こいつらに手を出すのはまずい。まずすぎる。次はあの剣を本当に心臓に突き立てれるぞ。

先程から沈黙していたサームは愛想笑いを浮かべながら、ジャン

に近づいていった。そして、彼の体の砂をぽんぽんと払いのけながら言う。

「お、お前、もう兄弟喧嘩は終わったんだろ。ほら、砂だらけじゃないか。うちに戻ってシャワーでもあびな。ちょうど、姪たちも戻ってきてる頃だし、食事もまだなんだろう？」

「誰が兄弟だつて？」

サームは、その視線を避けるように俯いて、ゴットフリーの方を指差した。

「馬っ鹿じゃないの？ 僕があんな冷血漢で自惚れ屋で、融通がきかない奴と兄弟だつて?!」

「え……、じゃ、お前あいつの部下なのか？ にしては、態度がでかいし」

「うわっ、もつとひどい事を言いやがる。部下になんか死んでもなるものか」

ジャンの暴言にたまりかねたのか、ゴットフリーが二人の前に歩みよって言った。

「ジャン、お前が死んでるところを一度、見てみたいものだな。煮ても焼いても食えないというのは、お前の為にあるような言葉だ」

陽光に照らされた紅い花園は今は、何事もなかったかのように秋風にゆれている。只、きつい花の香の中にいるせいかな、その中にいる誰もが妙に苛立った気分になせられていた。

「黒馬亭に戻るぞ。その男の言うように体を洗った方がいい。姿だけでも人間らしくしておくんだな」

ゴットフリーは歩を止めることなく、元来た道をもどりだした。その後をジャンとミツシエが追いかける。さらにその後をサームはかなりとまどいながらついていった。だが、ゴットフリーに完全に無視を決め込まれたザールの心中はおだやかではなかった。

ザールは突然、すっとんきょうな大声で叫ぶ。

「ゴ、ゴットフリー警護隊長、お前って捨て子なんだってな！」

何とも言えない気まずい空気が花園に流れ出した。

「お前、何が言いたい？」

振り返ったゴットフリーの視線を避けながら、ザールは言葉を続けた。

「わ、わしは持っているんだぞ。ガルフ島の当主リリア・フェルトから預かったお前の父の遺品を！お、お前は見たくないのか？お前の本当の親の物だぞ」

「何？！」

「金細工のロケットだ。中にお前の父の写真が入っている。お前によく似ていると島主リリアも言っていたぞ」

父……そんな者の存在を考えた事もなかった。だが、何故リリアがこいつにその遺品を渡したんだ？

ゴットフリーはそのまま、言葉を失ったように押し黙ってしまった。その様子を見つめて、ザールは小ずるい笑いをもらす。

「どうだ？見たいだろう？条件しだいなら、譲ってやってもいいんだぞ」

一方、ゴットフリーと同じく、ジャンもザールの言葉に衝撃を受けていた。

サライ村で別れた少女ココ。ココが見せてくれた銀のロケットには、ゴットフリーによく似た写真が入っていた……。捨て子だったココが持っていた、たった一枚の父の写真。まさか、あのロケットが二つあるなんて。だが、金と銀、それぞれを兄妹に手渡していたとしたら……それは、十分にありうる事だ。

ジャンとミッシェだけが気付いていた。ロケットの中の人物は、

ココの父であり、同時に、ゴットフリーの父である事を。ココとゴットフリーは兄妹だ。レインボーヘブンの守護神アイアリスに残された一房の選ばれし者。

「あ、後から屋敷へこないか？遺品は蔵の奥にしまいこんであるんでな、お前たちが食事をしている間に出しておくよ。お、お前が勘違いしてつけた頬の傷は……、もう血も止まったからな、ゆ、ゆるしてやるよ……な、夜になったらもう一度訪ねて来い。島主リリアから聞いた話も色々あるんだよ」

猫なで声でささやくザールに、ジャンはひどい嫌悪感を覚えていた。

「ゴットフリー、行くんじゃない。あいつは怪しすぎる」

感情を押し殺しているのか、ジャンには無表情なゴットフリーの心は計りきれなかった。それでも、ザールを無視して再び歩き出したゴットフリーの後姿を見ると、かすかにちりちりした痛みのような感覚が伝わってくる。

ゴットフリーの心が揺れている……だめだ、彼をあの男の元に行かせては。

その時、ミッシェがジャンの袖を強く引っばった。

「笑っているよ、紅の花園が……」

紅い花々が風に揺れる度、かさかさと花の囁きが聞こえてくる。

ジャンはその声に耳をすませて思わず眉をしかめた。

もっと、もっと暗い場所へ

もっと、さらに闇の中へ

滅びの王、誘えり

10・さらに闇へ(2)

「天喜、どうしてみんなして、仲良くレストランなんだよ」

「だって、お客さんなんて久しぶりなんだもの。それに店は壁が崩れちゃって、直すにも時間がかかるし」

「お前……まさか、その壁、俺たちに直させる気じゃないだろうな」

「あら、やってくれるの？大助かりだね。二・三日なら、みんなが泊まれるくらいの部屋はあるから。黒馬亭ってね本当は宿屋なのよ。客なんて滅多にこないから萬屋なんかやってるけど」

やはり、そんな事だと思った。俺たち（いや、俺か）体のいい雑用兼ボディーカードってところかい。

それでも、天喜に微笑まれると、何故かしら断ることができない。タルクは、仏頂面でメニューに目を通す。隣に座っているゴットフリーは、いつにも増して機嫌が悪そうだ。サムはどこに消えたのか、レストランには姿がない。食事なんてどうでも良かった。一刻も早くこの黒馬島を出てしまいたかったのに……。結局、天喜に押し切られる形で居残る事になってしまった。

ジャンとミツシエとは無事合流できた。しかし、土まみれのジャン（この理由はよくわからないのだが）が黒馬亭でシャワーをあびている間に天喜はそそくさとレストランに予約を入れてしまったのだ。

黒馬亭から徒歩で15分ほどの場所にある島の繁華街にタルクたちはいた。ここは規模は小さいが殺風景な黒馬島の中では、唯一賑やかと呼べる場所だった。タルクたちがいるレストランは野外にテーブルがあり、景色が見渡せる形式になっていた。遠くには西の山が見えている。

「……で、そつちの男の子が、ジャン。女の子がミツシエね。ジャンは私と同じ歳くらいかな」

天喜は、先程、タルクから紹介された同じテーブルのジャンとミツシエに、興味津々のようだった。伐折羅は天喜の後ろに隠れるように二人の様子を垣間見ている。

「……で、お前が天喜。その後ろが双子の弟の伐折羅か」

ジャンは、くったくのない笑顔で笑う。年齢に関しては彼自体も把握できていないので、一応、天喜の意見に賛成しておいた。

「あなたたち、どこから来たの？黒馬島に外からの客なんて滅多にこないのに」

「船を出したのは、ガルフ島のサライ村。ここに来た理由は、多分、僕の友人が僕を呼んでくれたから」

「友人？いったい誰？島の住民なら私、だいたい知ってるわよ」

顔を覗き込んでくる好奇心いっぱい为天喜の目は、琥珀のように綺麗だった。“サライ村のココモこんな目をしていたっけ”ジャンは思わず笑顔を作る。天喜はその様子を見てほくそえんだ。

ふん、ちよろい、ちよろい。男の子なんて、私がちよつと笑ってやったらこれだもん。でも、この子はお金も持ってそうにないし、力がある分まだ、タルクの方がましかもね。

「それより、お前、花の香りがする」

突然、話題を変えられて天喜は少しあわてて言う。

「あ、そ、それは、私が花屋をやってるから」

「花？何の」

「色々よ。切花を花束にして売っているの。今の時期はコスモスがお奨めよ」

「切花！そんな物売ってるのか」

「そんな物って言い方はないでしょ。私の店の花はとても人気があ

るんだから」

「切花は大嫌いだ。命を切り取られたようなものだろう？大地に咲かせておけば、来年もまた咲くっていうのに」

大嫌い……こんな言葉、言われたのは生まれて初めてだわ！

表面上、取り繕っては見たもののジャンの言葉は天喜のプライドをひどく傷つけたようだった。

たとえ、直接、私の事を指したのでも、絶対に許せない。

天喜は横に座っている伐折羅に小さく囁く。

「こいつもあのゴットフリーと同じで最低男……」

伐折羅は一瞬、理由のわからぬ様子を見せたが、少し離れたテーブルの黒づくめの男に目をやると言った。

「……あ、ゴットフリーってあの人の事？タルクさんと同じテーブルに座っている」

「そう、気持ち悪いでしょ。レストランに着てまで黒い帽子かぶってさ」

その時だった。ジャンの横で黙ってパンにかじりついていたミッシェが突然、声をあげた。

「ゴットフリーは気持ち悪くないよ。気持ち悪いのはあの男……あの男の持っている紅い花園」

「あんたたち、喧嘩でも売る気なの。いちいち、私の言う事に文句つけて！」

今までちやほや、されすぎていたせいか、天喜は自分の感情を抑える事ができない。

「あれっ？珍しいな。ミッシェが喧嘩か。やれやれ！おもしろいぞ」
「ふざけないで！あんたにシャワーなんて貸してやるんじゃない」

たわ！」

ジャンの無責任な応援に、天喜は余計に腹を立てる。

「何よっ！汚い子。言っちゃあ悪いと思って黙ってたけど、ミッシェ、あんたもシャワー、浴びた方が良かったんじゃないの？女の子のくせに洋服だってボロボロじゃない！」

伐折羅はただ、おろおろと三人の様子を見ているだけだった。

「おい、お前らしい加減にしろ」

目の前に2メートルもありそうな、長剣をぬつと見せ付けられて天喜はやつと我をとりもどした。何だ。もう終りかと、ジャンは残念そうに舌打ちする。

「だって、タルク、こいつらがひどい事を言つたのよ……」

天喜にすぐるようにつめられて、タルクは一瞬たじろいだ。

「だって、タルク、この娘がゴットフリーの事を気持ち悪いって……」

ミッシェにしては珍しく言葉が多い。吸い込まれそうな青い瞳でタルクを見つめる。一体、

どうすりゃいいんだ？しかし、隊長の事を気持ち悪いなんて……それは許せんな。

「とにかく、喧嘩はやめろ。飯がまずくなる。お前らに挟まれた伐折羅の困った顔を見ても、可哀相じゃないか」

タルクに言われて、伐折羅は少し頬を紅くする。

「あの……僕、タルクさんたちのテーブルに行つていい？」

「え……？俺は別にかまわないが……お前、余計に困るんじゃないのか」

「うっん、いいんだ。あの人もまだ、紹介してもらってないし」

「あの人って、ゴットフリー隊長の事か？」

その時、天喜が信じられないと声をあげた。

「伐折羅！絶対、だめ！あんな奴の所へ行きたいなんて、どうかしてる」

「僕、あの人と話したいんだ……」

止める天喜の手を振り解いて、伐折羅はゴットフリーがいるテールへ歩き出した。

「伐折羅の馬鹿っ！」

半泣きの天喜を尻目にジャンが笑う。

「伐折羅の気持ちに僕には解る……いい奴だとは天地が裂けても言えないが、知らず知らずのうちに人の心を引きこんでしまう……そんなところがゴットフリーにはあるから」

タルクは、かなり遠慮しながら天喜に言った。

「俺もその意見に賛成だ……だから、俺も隊長に付いてきたんだ」

* * *

食事にはほとんど口をつけず、すするように飲んでみた食前酒は、やけに甘くてすぐに嫌になってしまった。何気なく遠くに目をやると、今、見たくもない虹の道標がぼんやりと目前に浮かび上がってくる。

苛つく奴……あの古物商、夜に訪ねてこいなどと……何を企んでやがる……あの場所で殺してしまえばよかったか。

けれども、心の奥底の“行きたい”気持ちを押さえられない。ゴットフリーは、そんな自分自身に苛立っていた。すると、不意にタルクの声がした。

「隊長、ちょっといいですか」

「……何だ？あっちの騒動はもう収まったのか」

「ああ、まあ、なんとか。それより、この子をまだ紹介していなかったんで……あの、伐折羅です。天喜の双子の弟の」

ゴットフリーは、タルクの横に隠れるように立っている少年に目を向けた。漆黒の髪と瞳。だが、顔立ち是天喜とそっくりだ。

伐折羅は、無言でゴットフリーを見つめている。

タルクは、臆病な伐折羅が泣き出すのではないかと気が気でなかった。今日は普段より数倍も機嫌が悪い。そんな隊長の灰色の瞳に伐折羅が耐えられるはずがない。

「伐折羅……面白い名前をもっているな。それは、七億の夜叉をひきつれた、夜叉王の名だ」

「え……そうなんですか？」

不意をつかれたように伐折羅はきょとんとしている。伐折羅の漆黒の瞳は、夜の湖底のように静寂としていた。だが、悲しいほどに澄み渡る瞳はゴットフリーから視線を離そうとはしない。ゴットフリーは、幾分か声を和らげて言った。

「何だ？俺の顔に何かついてるか」

「あなたの瞳が……」

「俺の瞳？」

タルクは、この時、伐折羅は100%泣き出すものだと思っていた。隊長がどんな反応を見せようと、早めに伐折羅を奪取して天喜の元に連れて行こう。だが……

「あなたの瞳がとても綺麗だと思って」

タルクのみか、伐折羅のこの答えはゴットフリーにとっても意外だった。千差万別、色々な表現をされてきたが、綺麗な瞳と言われ

たのは生まれてこの方、一度もありはしなかった。

「俺の瞳が綺麗？くくっ、虫唾の走る事を言う」

「でも、でも……本当にそう思うから」

「伐折羅、変わった奴だな……ここに座るか？」

ゴットフリーに隣の席を勧められて、伐折羅はうれしそうに微笑む。

「はい、喜んで」

あいつ、えらくすんなりと、ゴットフリーの隣に座ったな。

じきに泣きべそかいて戻ってくるかと思っていたが、伐折羅は予想外にうまくやっている。ジャンは少し拍子はずれたような気がした。ジャンの隣にはむっとり黙りこくってしまった天喜と、何事もなかったかのようにスूपをすすするミツシエがいた。

「なあ、天喜、いいかげんに機嫌を直せ。僕も少し言い過ぎたよ」
「……」

「ここで出会えたのも何かの縁だ。仲直りしよう」

「別にいいけど……」

「けど、何だ？」

「ジャン、あんたって、えらく年よりじみた事を言うのね」

そう言った瞬間、天喜はころころと高い笑い声をあげた。そうしている、普通に可愛い女の子なのだ。何故、無理をして大人びる必要があるのだろう。人間に関してはかなり、学んだつもりだったが、天喜の気持ちはジャンには到底理解できそうになかった。

「ジャン、仲直りついでに、伐折羅をこっちに連れてきてよ。あの男の隣にいるより、こっちの方がいいに決まってるでしょ」

ゴットフリーたちのテーブルに目をやって、そうかな？とジャンはふと思う。なんだか伐折羅は楽しげだ。そういえば、ガルフ島を

出てから、ゴットフリーとゆっくり話なんかした事がなかった。

ゴットフリー、伐折羅と何を話してる？

ジャンはそれが気になって仕方なかった。

「わかった。行ってくる」

ジャンが席を立ちあがった、ちょうどその時、

「待って、あの黒い塊は何？！」

天喜が叫びながら指差した、西の空の一角から黒い塊が近づいてくる。

「蝙蝠……」

ミッシェがぼつりと言った。遠目がきくジャンにもそれらは、はつきりと見えた。

「しかし、並みの数じゃないぞ。ミッシェ、天喜、早く逃げろ！凄まじい数の蝙蝠がこちらへ向かって飛んでくる！」

11・さらに闇へ(3)

ジャンたちの他の客には、それらは最初、黒雲にしか見えなかった。だが、バサバサと繰返される羽音とともに辺りは騒然となった。

「蝙蝠！？何でこんな場所に」

「西の山を見てみる！こちらに向かってやってくる黒い塊は……全部蝙蝠だ！」

逃げろ、逃げろとあちこちから悲鳴があがった。その声が聞こえたからではないだろうが、蝙蝠の集団はいきなり速度を速めた。黒い電が降り注ぐように蝙蝠たちは爪と牙を突きたてながら急降下を始める。

「ミツシエ、天喜、テーブルの下に入ってる！」

ジャンは、二人を隠すとゴットフリーたちにいるテーブルに目をやった。だが、おびただしい数の蝙蝠が邪魔をしてさっぱり様子がわからない。

「おいおい、珍獣ワンダーランドの次の出し物は蝙蝠かよ」

一つ大きくため息をつく、タルクは背中の中剣を手にとった。

「珍獣ワンダーランド？この島の事か。残念だったな、あれはただの蝙蝠だ」

ゴットフリーはにやりと笑うと、腰の剣を引き抜く。

「ただ、数が破壊的に多いだけだ！」

その瞬間、黒い塊が一気に押し寄せて来た。その中の一匹はまっすぐに伐折羅めがけて飛んできた。体が硬直して動かない！目を閉じたくても閉じれない。目前で蝙蝠の鋭い爪がにぶく光った時、

“目をつぶされる！”

伐折羅は、本能的にそう思った。

「伐折羅っ、何を突っ立ってる！？」

飛び散る鮮血が見えた。だが、それは伐折羅のものではない。この甘美な感覚……一瞬、心が宙を舞う。

「伐折羅っ！」

頬を叩かれて、伐折羅ははっと我に返った。ゴットフリーが目の前にいた。腕の裂傷から血がしたたっている。

「あ、僕をかばって蝙蝠に傷つけられたんだね」

「そんな事より、早くテーブルの下に入れっ！」

伐折羅をその下に押し込むと、ゴットフリーはテーブルに飛び乗った。邪魔だとばかりに食べ残しの料理を蹴散らす。その瞬間、爆風が起こった。タルクの長剣の一振りが辺りの蝙蝠を吹き飛ばしたのだ。

後続の蝙蝠たちが再び急降下を始めた時、伐折羅はテーブルの下から顔を少しだけ覗かせ、身震いした。恐怖のせいではなく激しい憧憬の思いで。

「まるで鬼神だ……あの人は」

たった一太刀で、ゴットフリーの足元には夥しい数の蝙蝠の屍骸が作り上げられていた。タルクが巻き起こす爆風も並ではなかったが、殺傷力に関してはゴットフリーの剣にかなうものではない。剣が見えぬほどに、さばきが早い。多分、斬られた相手はそれがわからぬままに命をおとしているのではないだろうか。

「あ、蝙蝠の目玉……」

伐折羅の手に、ゴットフリーに切断された蝙蝠の頭が転がっていた。血に汚れるのもかまわず、伐折羅はそれを握り締めた。

「隊長、追ひ払おうにもまた、西の山から黒い集団がやってくる。これでは、切がない！」

長剣の血を振り切りながら、タルクはテーブル上のゴットフリーを見上げた。

「確かに。それに……蝙蝠料理は食べてもうまくなさそうだ」

苦い笑いを浮かべると、ゴットフリーはテーブルに積みあがった蝙蝠の屍骸に目をやった。その時だった。

「ねえ、今度は頭をつぶさないで」

テーブルの下から伐折羅の声が聞こえた。

「伐折羅、出てくるな！」

強い口調で言った後、ゴットフリーは、解せない顔で伐折羅の手元を見た。

「……お前、手に怪我でもしたか」

伐折羅の手は血で真っ赤に染まっていた。

「いや……そうではないな。その手の皿は一体何だ？」

伐折羅が後生大事そうに手に持っていた一枚の皿。それに盛られていたのは、ゴットフリーとタルクに斬られた蝙蝠たちの頭だった。

無残に切り取られた蝙蝠たちのなれの果て。皿にたまった血の間からガラス玉のような目がいくつも、こちらを覗いている。

「お願い。蝙蝠の目玉は、売るとお金になるんだ。だから、次のがきたらうまく頭だけ落として」

あまりにも異様な光景にタルクは、思わず眉をしかめる。

「蝙蝠の頭だけを落とせというのか？」

「ゴットフリー、うまくやって、あなたなら出来るでしょ」

伐折羅は、透き通るような笑顔を見せた。

ゴットフリーは、はは……と笑いながら剣を身構える。おもしろかった。どの軌道で蝙蝠たちを斬ってやろうか……

「わかった。だが、伐折羅……そこまで言うなら俺が落とした頭は一つ残らず集めろよ！」

伐折羅の持った小さな皿では、集めきれない程多く殺してやろう。それも上手に首だけをはねて。

レストランが蝙蝠たちの処刑場と化してゆく。しかも、ゴットフリーの手によって。

残酷な戯れだ……ゴットフリー隊長らしくもない……
タルクは長剣を握り締めたまま、その場に立ち尽くしていた。

* *

「だめだ、こう視界が悪いと埒があかない！」

群がってくる蝙蝠の群れを飛び越えて、ジャンは、テーブルから壁、看板に飛び移り、レストランの屋根へ上った。身の軽さにおいてもこの少年は、人の常識をはるかに超えていた。

だが、すぐに目に入った惨劇に声を荒げる。

「ゴットフリーっ！お前、何をやっているっ！」

見上げたゴットフリーの眼差しは、ジャンでさえ、身震いするほど荒涼と凍り付いていた。

「邪魔をするな。今、狩りの真っ最中だ」

「馬鹿な！こんなに小さな命を狩って何が楽しい!?」

ジャンは、唇をかみしめると、目を細め西の山を凝視した。障害物がなければ、ジャンの目は千里も先を見とおせる。

「蝙蝠たちは西の山の洞穴から、あふれ出している。きっと、真昼の夜のせいで混乱しているんだ。こいつらに敵意はない！だから、無駄な殺生はやめろ！」

ゴットフリーはジャンの言葉に耳を貸そうとはしない。

「死にたくなければ、さっさと逃げてゆけばいい。こいつらは、その選択肢を選ばずにやってくるんだ。向かってくる的を射落とす……そのの一体、何処が悪い？」

そうこうしているうちにも、ゴットフリーの足元には蝙蝠の屍骸がつみあがってゆく。そして、彼が乗っているテーブルの下では、伐折羅が惨殺されたそれらの頭を喜喜として皿に盛っているのだ。

「止めると言っているだろう！」

開いたジャンの手が一瞬、蒼く輝いた。すると、ゴットフリーの剣めがけて近くにあった石が飛礫のように飛んできた。だが、彼は事も無げにそれらをたたき落す。

「小賢しい真似をするな！ そんなに不満なら、サライ村でやったように俺の上に大石でも落せばいいだろう？ 女神アイアリスのうつとうしい呪縛に縛られた、お前にそれができるのか？ 俺が死ねばレインボーヘブンの虹の道標は消える。むしろ、その方が俺は楽なんだ！」

皮肉な笑いを浮かべ、ゴットフリーは空の獲物に剣を突きつける。

「いい加減に目をさまさないか！」

ジャンのとび色の瞳が黄金に輝き、小麦色の髪が褐色に燃えた。すると、地面の一角がゴットフリーが乗っているテーブルの下でむくむくと盛り上がりだした。バランスを失ったテーブルは大きく傾きだす。

「だめだ！ ジャン、テーブルの下には伐折羅がいる！」

タルクが叫んだ。ジャンの場所からは伐折羅の姿は完全に死角になっっていた。

「伐折羅っ、来いっ！」

テーブルから飛び降りたゴットフリーが、間一髪で伐折羅を引き

寄せた。それでなければ、伐折羅は重いテーブルの下敷きになるところだったのだ。

「ジャン！伐折羅を殺す気か？無駄な殺生は止める言った、そのお前が！」

レストランの屋根の上で、ジャンは激しく動揺した。ゴットフリーの腕にしがみつき、ただ、震えている伐折羅の姿は痛々しかった。

伐折羅の事など少しも考えてはいなかった……

しょんぼりと首をうなだれ、屋根の上に立ったまま、ジャンは身動きすらしない。

一旦逃げた蝙蝠たちが、また舞い戻ってきた。微動だにしないジャンが心配になって、タルクはレストランの屋根の下に様子を見にいった。

「……ジャン、大丈夫か？」

すると、ジャンはようやく顔をあげ、ゴットフリーに向かって言った。

「僕が行って、出て来れないように西の洞穴を閉じて来る。だから、戯れに蝙蝠たちを殺すのは止めてくれ」

「……西の山まで？かなりの距離だぞ」

「いいんだ。だから……僕の体を拾っというて」

「……！！」

ふらりと傾いたジャンの体が、屋根の上から落ちてくる。ゴットフリーが叫んだ。

「タルクっ！ジャンを受けとめろ！！」

屋根から落ちてくるジャンを受けとめろって？タルクは、ジャンの落下地点に突進する。

そして、どさりという音とともに、ジャンを確保した。

「え……??」

一瞬、きょとんと目を見開くタルク。ゴットフリーがあせった様子で駆けて来る。

「タルク、ジャンは?!」

「……」

「おいっ、何をぼうつと突っ立ってる?!」

ゴットフリーに一喝されて、タルクはやっと現世にもどってきた。
「タルク!どうしたの!?!」

何時の間にか蝙蝠たちの姿は、一匹残らず消え去っていた。おびただしく散らばった蝙蝠の残骸に怯えながら、テーブルの下からやつと出られた天喜は、タルク抱えられたジャンを見て驚きを隠せない。顔は蠟のように白かった。手はぶらんと垂れ下がり、全く生気を感じさせない。

「ジャンはどうなっちゃったの?さっきまであんなに元気だったのに……」

「この島に入る前から、具合が悪かったんだが……でも……」

「でも、じゃないでしょ。ジャンを早く黒馬亭に運んで!」

ジャンの体が軽すぎたのだ。タルクとしては、子猫を抱く程度しか重さを感じない。

こいつは本当に何者なんだ?普通の人間ではない事は承知していたが、一山作ってしまう程のバケモノじみた力、隊長の黒剣を白銀に変えた力……そして、異様なこの軽さ。俺はこいつの素性を全く知らない。隊長もミッシェもその事については何も語ろうとはしないんだ。

天喜の後ろにミッシェが立っていた。ゴットフリーは解せない様

子でミツシエに言う。

「おい、ジャンはどこへ行った？」

「……西の山へ」

「ならば、タルクが抱えているのは何だ？」

「あれは、抜殻。ジャンの心は今はいないの。でも、ちゃんと休ませてあげて。あの体が弱り過ぎると、ジャンが戻れなくなる」

「戻れなくなる？あいつの心が体にか？」

ミツシエは、こくんとうなずいた。

「ジャンがひどく弱っていなければ、心と体を離すなんて絶対にやっ
つてはいけなかった。でも、黒馬島が近づいてきたから……」

「そういえば、あいつは黒馬島に友達がいると言っていたな」

「そう……、ジャンに力をくれる大切な友達」

ゴットフリーは、事の成り行きが少しつかめたような気がした。
ジャンの心が体から離れた……だから、黒馬亭で闇が現われた時、
あいつの声が聞こえたのか。タルクに抱きかかえられたジャンに目
をやると、ゴットフリーは船にいた時、ミツシエにあえて聞くのを
避けた質問を口にした。

「何故、船でジャンは熱を出した？あそこまで体調を崩した理由は
何だ？」

「……」

「ガルフ島に力を与えたから……海の藻屑になるはずの島を助けて
しまったから……か」

「ジャンは自分の生きる力まで、ガルフ島に与えてしまった」

太陽が西へ傾き出した。今度は本当の夜がやってくるのだ。

小さく吐息をもらすと、ゴットフリーはタルクの元に歩いていつ
た。天喜にせかさねながら、タルクはジャンを背負い、黒馬亭に向
かうところだった。

「隊長、ひとまず、ジャンを黒馬亭に運びます」

タルクの脇に隠れながら、天喜が小さく声を出す。

「この島にはお医者さんはいないの。でも、私、看病くらいはできるから」

ゴットフリーに向けられた灰色の瞳に天喜はびくりと体をこわばらせる。だが、

「そうか……面倒かけるが、よろしく頼む」

一瞬、耳を疑いながら、天喜はぱっと頬を紅く染めた。

「は、はいっ。まかせて下さい！」

自然に言葉が口から踊り出た。心臓がばくばくと高鳴った。

「隊長はどうします？」

「少し用がある。黒馬亭で待っている」

どちらへ？とタルクに問われる前にゴットフリーは、足早にレストランを出て行ってしまった。

「私、お願いされちゃったわ。ちょっと嬉しい気分」

踊るような仕草で天喜はタルクの腕をちよんとつついた。

「そりゃそうだ。隊長にお願いされると俺でも張切る」

少しは隊長の良さをわかってくれたかと、タルクはうんうんと頷いた。だが、大破したレストランに目をやって、はっと伐折羅の事を思い出した。ゴットフリーに助けられて、震えていた伐折羅の姿がない。

「天喜、伐折羅は何処だ？」

「伐折羅……？さっきまで、そこに立っていたのよ。先に黒馬亭に帰ったのかな」

天喜は少し解せない風だったが、動揺はしていない様子だった。良かった、天喜は多分、あれを見ていない……。タルクは、ほっと胸をなでおろした。

天喜には、絶対に見せたくない。

蝙蝠の血にまみれても、笑っている伐折羅。あの透き通った笑顔は……

あまりにも残酷すぎる……。

12・花園の罫（1）

夕日が西の山に褐色の縁取りを添えている。夕焼けの空は東側から群青の色あいをみせだした。太陽と月と星が同居する夕暮れ。この短い時間がジャンは好きだった。

だが、この日、黒馬島の月は急に広がりだした黒雲の影で怪しい光をたたえていた。

“もう大丈夫だろ？だから、これ以上、分かんない方がいい。心が離れた体はじきに弱ってしまう。もし、体が死んでしまったら、お前は幻のような存在になってしまうよ”

ジャンは、馴染みのあるその声に“わかつている”と、頷いた。とはいっても、それは、お互いに体がある者同士の会話ではなかった。

西の洞穴を閉じた後、ジャンは再び元の道をもどりだした。多分、タルクあたりが自分の体を拾ってくれているだろう。

何気なく見下ろした、海岸線に波の泡が月雲のようにきらめいた。ジャンはふと美しかったガルフ島の海を思い出した。

海の鬼灯さえ、現われなければガルフ島はまだ、美しい島でいられたのに……。島が崩壊しなければ、ゴットフリーも島主リリアの後継者として一生を終えられたかもしれない……。

その時、波がひとときわ高く舞いあがった。

“それは、ありえない事ですよ……ゴットフリーは、レインボーへ

ブンの王だ。それは生まれながらにして抗えない運命なのですから”

ジャンははっと、意識を海に向けた。岩場に青い人影が見える。

“BW、ブルーウォーターレインボーへブンの紺碧の海……やっと、姿を現したな”

風変わりな緑の髪、ほとんど色のない切れ長の瞳。至福の島の欠片の一つ。

“姿といっても、ほとんど幻のようなものですがね。ガルフ島で力を使いきってしまつて、あなたやミッシェ以外には、私の姿は見えないでしょうね”

ガルフ島の崩壊　火の玉山の噴火、そして、せまりくる海。

“BW、お前、何でガルフ島を飲みこんだ！レインボーへブンが消えた時、アイアリスに見捨てられた盗賊たちの声を聞いて、一番、苦しい思いをしたのはお前ではなかったのか？”

“……”

“黙っていないで何とか言え！”

“よく、覚えていないんです。ミッシェの強い力を受けて、自分の荒ぶる心が押さえられなくなった。レインボーへブンにさえ、怒りを感じた”

“海の鬼灯につけこまれたな。あの紅い灯は怨念の塊だ。恨み、憎しみ、怒りの力を吸取りながら、通り過ぎるすべての物を破滅に導こうとする……”

BWは一瞬、暗い目を海に向けた

“そうですか……また、私は沢山の命を飲みこんでしまったのですね”

が、あきらめたように笑みを浮かべた。

“ところでジャン、あなたは私よりひどい状態だ。全くの精神体じゃないですか。体をどこかへ置き忘れましたか？”

体裁が悪くなって、ジャンはつつけんどんに言った。

“余計なお世話だ。僕はもう行くから”

“早く体に戻った方が賢明ですよ”

わかっているからと、ジャンは五月蠅そうにうなずいた。夜がやってくる。闇が黒馬島をつつみこむ前にゴットフリーの元にもどらなくては。BWはジャンの気持ちを読み取ったかのように、こうつけ加えた。

“ゴットフリーから離れないで。この黒馬島は彼にとっては鬼門の島です。あなたが繋ぎ止めないと、あの人は……闇の王になる”

闇の王……BWの言葉が心に食い込んで、ジャンは不安でたまらなくなかった。そうだ、あの紅い花園で聞いた声、耳をふさぎたくなるほど邪心にまみれた……あの声も同じような事を言っていた。

もっと、もっとと暗い場所へ
もっと、さらに闇の中へ

滅びの王、誘えり

ゴットフリーは何処にいる？

ジャンの心は流れ星のように黒馬島の夜空をよぎっていった。

急いで、急いでと……耳元で囁き続けて、僕を後押しするのは夜風だろう？霧花……お前もここにいるんだな。

姿は見えなかった。もう一つのレインボーヘブンの欠片。

歌が聞こえる。海の歌が。……あれはBWの子守り唄。そう、黒馬島を眠らせておいてくれ。

僕が行くまで……。僕が行くから。

“ゴットフリーは誰にも渡さない！”

* * *

「待つてよ。ゴットフリー、ザールおじさんの屋敷の入口はそっちじゃない。花園の方へ行っちゃだめなんだ」

後ろから呼びとめられても、振り返る事も歩を止める事もしない。伐折羅はかけ足で追いかけて、やっとゴットフリーに追いついた

「歩くの速すぎるよ。ついてくるのが大変」

「誰がついてこいと言った？邪魔だ。さっさと黒馬亭へ帰れ」

「僕も一緒に連れて行ってよ。おじさんに用があるんだ」

ゴットフリーの行く先はわかっていた。サームおじさんが、“あいつをザールの所へ行かせるのはヤバイ”ってしきりにつぶやいて

いたから。

みんながいない場所でゴットフリーと話ができる。それだけで心が踊った。特にジャン、何故だかわからないのだけど、伐折羅はジャンが煙たかった。

先に行かせまいとゴットフリーの腕をとる。だが、伐折羅の手が振りきられたのは、ほぼそれと同時だった。

「……ごめんなさい。手をつなぐの嫌なんだね」

半分、泣き顔の伐折羅にゴットフリーは、面倒臭そうに答える。

「ああ、嫌いだな。虫唾が走る」

「でも、小さい時は？父さんとか母さんとは？あと、友達とか」

「覚えがないな。そんな物はいなかったしな」

「えっ？」

「俺がいた島の島主が俺を拾って育ててくれた。といっても、世話をしていたのは館の使用人だ。俺はそいつらを悉くひどい目にあわしていたしな」

ゴットフリーは、わずかに笑い伐折羅に目を向ける。

「なあんだ。一緒だね、僕と天喜も親がいないんだ。でも、僕は両親の顔を覚えてる。二人ともすごくいい人だった」

「ということは、お前の両親は死んだんだな」

伐折羅は急に顔を曇らせて言った。

「父さんは西の山で盗賊に殺された。その後、母さんはザールおじさんの所で働きながら僕らを育ててくれたんだ……でも、今は行方がわからない」

おもしろくもない話だな。

再び伐折羅の先を歩き出したが、ゴットフリーには一箇所だけひっかかる点があった。

西の山の盗賊……こんなさびれた島で賊を組んでもたいした儲けになるとは思えない。大方、ここを根城に他で仕事をしているのだろう。伐折羅の父は、多分、その盗賊と関わっていたな……普通の島民ががわざわざ西の山まで行くとは思えない。

「ゴットフリー、ここから入って花園を横切って行こう。その方が屋敷には近いから」

花園をとりかこむトタン板の壁に、ちょうど人一人が通れるほどの切れ目があった。それは、伐折羅がザールに内緒で作った花園への秘密の扉だった。

きつい花の香は、相変わらずだった。鼻につんと刺激をうけた瞬間、頭の奥にしびれたような感覚が走る。白色灯に照らされ、花園は紅色に揺れていた。

何度、足を踏み入れても、この花園は異様な空気を撒き散らしているな。だが、不思議と危険を感じない。何故なんだ？これほど怪しい状況はめったにないというのに……。

ゴットフリーは、隣にいる伐折羅に目をやった。

そういえば、こいつも平然としてここに立っている。時折ひどく冷めた目をして作る笑顔は、臆病な普段の態度とは似ても似つかない。

「母さんはここで花を摘んでいた。天喜と良く似た、とても綺麗な人だったんだよ」

ゴットフリーの思考を中断させるように、伐折羅が話しかけてきた。

「いっぱい花束を作ったら、ザールおじさんが他の島で売ってくれ

る。ゴットフリーに採ってもらった蝙蝠の目玉もそうなんだ」

「他の島にか？黒馬島ではなく」

「その方がずっと高く売れるから。蝙蝠の目玉は薬になるんだ。それに黒馬島では薬を作る方法も知らないしね」

「ならば、お前が直接行つて、商売をした方が金になるんじゃないのか？あがりといつても、どうせザールに、ほとんどを持ってゆかれるんだろう」

「外の島へ行く方法はザールと……西の盗賊しか知らない」

「どういうことだ？」

「気がつかなかった？黒馬島の周囲は霧でおおい隠されている。島の人間からは外海の様子はわからないし、一旦、船を出して島を離れば、まずは帰ってこれない。たまにゴットフリーたちのように迷いこんでくる人たちがいても、一度、島を出た人が再び戻って来る事はないんだ」

周囲を霧につつまれている？そういうえば、この島は突然、俺たちの前に現われた。ジャンが甲板で倒れた時だ。だが、あの時の海には水平線が見渡せるほど何もなかった。たとえ霧に包まれていたとしても、島があればわかるはずだ。

矛盾している……

ゴットフリーはそうつぶやくと、強い口調で伐折羅に言った。

「島を出て、帰ってきた者はいないと言ったな。ならば、ザールはどうなんだ？お前は蝙蝠の目玉を売ってもらうのだろう。それに奴は以前、俺の島に来て島主リリアと会っている」

「だから、ザールは西の盗賊とつながっているんだ。多分、西の山に外海に出る秘密がある。黒馬島の住民はそれに気付いていても、自分たちの商品をお金に替えてくれるんだもの、見て見ぬふりをし

ているんだよ。それに、盗賊たちは決して町には下りてこないしね」

それは……と言いかけて、ゴットフリーは口をつぐんだ。

「伐折羅、話は後だ。この花園に誰がいる。声がするだろう……一人はザールか？で、あと一人は……誰だ？」

いっそ、ここでゴットフリーがザールおじさんを殺してくれたら、僕はもっと愉快になれるのに。

ゴットフリーの剣が血で染まる……それを思うだけで、伐折羅はひどく嬉しくなった。

13・花園の囃(2)

- 萬屋黒馬亭 -

“見つけた、僕の体。やはりここか”

黒馬亭の一室のベッドの上にジャンは横たわっていた。こざつぱりした部屋には、一通りの家具が揃っており、天喜が言うように、まだ十分宿屋として使えるように思えた。

ジャンは自分の体に降りて行くと、それきり考える事をやめた。意識を強く持ちすぎるとうまく体に入れない。心と体が一緒になつて目が覚めるまでには、それなりに時間がかかるのだ。

「ジャン？」

かすかに動いたジャンの顔をタルクが覗きこむ。黒馬亭に運んだは良かったが、ジャンは死んだように眠っている。ゴットフリーは出かけたきり戻らない。おまけに伐折羅までがないのだ。普段、豪胆なタルクもさすがに心配で胃が痛くなつたきた。

「タルク、ジャンはどう？」

「まあ、おんなじだな。眠っているだけだから心配いらないだろ」
部屋に入ってきた天喜にタルクは、心と裏腹に笑ってみせる。ここにきて、天喜の明るさだけが救いだつた。

「ミッシェはどこへ行つた？」

そういえば、いつもジャンにはりついているミッシェがいない。ミッシェまで行方知れずなんてとんでもないぞと、タルクは眉間にしわを寄せる。ところが、

「お風呂」

「え？」

「お風呂に入れてるの。だって、あの娘、泥だらけなんだもん。嫌がるのよ。でも、女の子なんだから、ちょっとは綺麗にしてくちゃね」

天喜はちよつと自慢げに手に持った布をひろげてタルクに見せた。
「これ、私には少し小さくて着れなくなった洋服なの。どう、ミッシェにちようどいいでしょう」

薄い桃色の柔らかそうな布目。襟と裾に軽くレースがあしらってある。いかにも天喜が選びそうな仕立てのドレスにタルクは首をかしげる。

あいつは、ああいうのを着たがるかなあ……。なんだか、暗い色を好んで着ているような気がするんだが。それにあんなドレスを着て、そばにいられたら俺はかえって落ち着かない。

「ちよつと、行って着せてくるね。もう、お風呂から出てくる頃だから」

上機嫌で部屋を出て行く天喜の後ろ姿を、タルクは苦笑いを浮かべながら見送る。

……タルク、タルク……

僕が呼んでいるのが聞こえないか？

ジャンの心はとくに体に戻っていた。だが、

体が動かない。声も出せない。目を開くことさえままならない。

体を離れ過ぎたのか？こんな時に動けないなんて！

タルク、お願いだから気付いてくれ、ゴットフリーは何処にいる？早くあいつを見つけないと、僕らは指針を失ってしまう。

「ミツシエ、まだ入っているの？着替えをもってきたんだけど」
黒馬亭の1階にある風呂場の戸口を天喜は軽くたたいた。昔、宿として使っていた2階の部屋の水道はすでに止められており、風呂が使えるのは1階の風呂場だけだった。そういえば、天喜には黒馬亭が宿屋を営んでいた記憶はない。過去には黒馬島を訪れる人が沢山いたらしいが、今はゴットフリーたちのようにたまたま、迷い込んだ客が年に数人いるだけだった。

おかしいな？もう出ちゃったのかしら……。ミツシエからの返事がない。天喜は風呂場の扉をそつとあけてみた。

「ミツシエ……エ……えっ！だ、誰っ？」

湯気の中の姿ははっきりとはわからない。それでも、垣間見た少女はミツシエとは別人だ。髪は白銀に輝いていた。白い肌は水滴の珠を弾きながら、絹の艶やかさで薄明かりを放っている。

白い妖精？

天喜の脳裏に、昔読んだ、御伽噺の挿絵が浮かんできた。はっと、天喜に気づいて湯気の中で少女が言った。

「もう、出るからあっちへ行つて」

眩しすぎる白さの中で、青い瞳だけが、唯一色をなしていた。

青い瞳……やっぱり、ミツシエだ。

「う、ごめん。ここに着替えを置いておくから、私は2階に行つてるね」

天喜はときどきと高鳴る鼓動を懸命に抑えながら、逃げるように

その場を離れた。

何？あの娘、

いつもと全然違うじゃない。

私、今まで、あんな綺麗な子……

……見たことない。

* * *

さわさわと夜風に揺れる紅い花園。

ザールを見つけたゴットフリーと伐折羅はもう一人との会話を聞き取れるよう、そっと近くまで忍び寄っていった。伐折羅はゴットフリーの腕をしっかりと握って放さない。先程とは場面が違う。ゴットフリーにしてみても、頼りなさげな伐折羅を振り切るつもりはないようだ。

なんだか、ゴットフリーと二人で悪い事をしているみたいだ……伐折羅はかすかにほくそえむ。波打つ心臓の音が心地良かった。

「まだ、荷が出来ていないって？期限は明朝だ。それを逃したら、もうここへは戻れねえ」

「だから、お前、少し手伝ってくれよ。わし一人じゃとても間に合わない」

「またかよ！売ってやる立場の人間を使うのかよ」

ザールと話しているのは、どこから見ても堅気とは思えない派手な服装の男だった。話の内容からして、どうも何かの商品取引をしているらしい。

「あの女が、いなくなってから、いつもこうじゃなかよ。お頭の手前、黙っていてやったが、俺たちがここを仕切ってもいいんだぜ」

男の言葉にザールは血相を変える。

「お前、天地が裂けてもそんな事をいうもんじゃない。お前ら、西の盗賊が島へ降りて来ていいのは、この屋敷までだ。それは先代からの掟だろう？その代償にわしらは、ここで花を育てているんだからな。それに仕切ると言っただって、お前ら盗賊にこの難しい花の栽培ができるとは思わんがね」

男はちつとつぶやくと、みだらな笑いを浮かべて言った。

「あの女の娘……天喜とかいったか？サームの店で花屋をやってる、あの娘はどうなんだ？」

「……だめだ。わしだって、ここに長時間はいられない。天喜の母親に手伝わせたのはまずかった。この花の香は少量ならば快樂を味わえるが、一つ間違えば命とりだ」

「違っつて。天喜はえらい器量良しと聞いた。俺たちに預けてくれりゃ、もつと稼がせてやるぜ。他の島には金をもった助兵衛おやじがいっぱいいるからな。きれいなドレスを着て、ちよつと相手をするだけで、大枚もつけられるってわけだ」

「あいつ、西の盗賊なんだな。ひどいよ、天喜の事をあんな風に……」

許さない……あいつ、絶対に。

伐折羅の目からは知らず知らずのうちに、涙が流れていた。だが、ゴットフリーの興味は天喜の事より、紅い花園に向けられていた。

栽培が難しく、少量ならば快樂、長時間は耐えられない……この花の香り、確かにここに長くいると、おかしい気分になってくる。

麻薬か。

ザールが、この花園で麻薬花を栽培し、西の盗賊がそれらを他の島で売りさばく。伐折羅と天喜の両親はその売買に関わって……多分、殺されたんだ。

「ゴットフリー、僕……」

「しっ、声を出すな」

ザールと男は話の段取りが付いたのか、挨拶もかわさぬまま、二手に別れた。ザールは屋敷の方へ、男は逆に花園の奥へと進んでいった。

「僕、今日は帰るよ。今、ザールおじさんが行った道をたどれば、屋敷の入り口に出られるから」

そう言い終わらないうちに、伐折羅は、もと来た道を小走りに駆けだした。

ゴットフリーはいぶかしげに、その後姿を眺めていたが、やがてザールの屋敷に向けて歩き出した。

* * *

伐折羅の鼓動が早くなる。怖くてたまらないけれど、天喜の事は絶対に許せない。

あいつは西の山の盗賊だ。下手に手を出すと、きっとひどい目にあわされる……。殴られる、うつん、剣でさされるかもしれない、そして、心臓を突き上げられて……。殺さ……。れ……

コロシテヤロウカ

盗賊の姿を目の前にした時、伐折羅の胸のつかえが急に消えた。

「なんだっ、お前?! まさか俺とザールとの話を聞いていたのか」
「お前は天喜を愚弄した……」

「何? ははあ、思い出したぞ。お前は天喜の双子の弟だな。ふうん、綺麗な顔してやがる」

品定めをするように伐折羅を見渡す盗賊の目を、伐折羅は軽蔑の

色を露にしてねめつける。

静まり返った湖底のように悲しげな漆黒の瞳、人の心を引き付けずにはおられない表情の危うさ。盗賊は思わずごくんと生唾を飲み込んで言った。

「お前たち、そっくりなんだってな。こりゃあ、ますます天喜を連れて行きたくなかったぜ。何ならお前もどうだ？　そういう趣味のおやじもけっこういるからよ」

馬鹿にしたような笑いを浮かべると、盗賊は伐折羅の肩に馴れ馴れしく手をまわす。

「……何なら俺が買ってやってもいいんだぜ」

だが、次の瞬間、盗賊はその場にうずくまった。

「お、お前、やりやがった……な」

盗賊の腹からは、おびただしい量の血が流れていた。

「子供だと思つて、油断した？　剣を奪われたのもわからなかったの？」

「ち、畜生……こんな事をしてただで済むと……思うな……」

そう言つと、盗賊はぱったりと前のめりに倒れ、それきり動けなくなつた。

最後までしつかり、殺してあげるよ。

伐折羅はもう一度盗賊の心臓を貫こうと、血に染まった剣を振上げた。その時だった。

「伐折羅っ、待て！」

びくりと振り返つた瞬間、伐折羅の心臓は再び鼓動を打ち出した。冷たい灰色の瞳が自分を見つめている。

「ゴットフリー、ぼ、僕……」

伐折羅は握り締めていた血ぬられた剣が急に恐ろしくなり、急いでそれを地面に捨てた。

「様子がおかしいと後を追いかけてみれば、この有様か。お前、自

分が何をしているのか、わかつているのか!？」

「あ……ぼ、僕……こいつが僕まで連れてゆくって言って、怖くて夢中で……それで、刺してしまったんだ……」

「馬鹿な事を！お前は西の盗賊は町には下りてこないと言っていたな。多分、奴らとザールとの間に何か協定があつたんだ。仲間を殺されたとあつては、きっと奴らは報復にやってくるぞ。そうなれば、お前だけでなく、他の島の住民だって危ないんだ」

「他の人たちまで……じゃ、天喜は……？」

「あいつの言っていたとおり、盗賊に連れてゆかれるだろうな」

「ど、どうしよう。僕、どうしたら……」

伐折羅は完全に我を見失い、ぼろぼろと涙をこぼした。おびれきった蒼白の顔を見て、ゴットフリーはため息をもらす。

「仕方ない、お前はどいてろ」

うつ伏せに横たわっている盗賊の向きを、足でごろんとあお向けに変えると、ゴットフリーは腰の剣を引きぬいた。盗賊はぴくりとも動かない。すでに事切れているようだ。

「ゴットフリー、どうするの？」

伐折羅の質問が終わらないうちに、ゴットフリーは迷いもせず、自分の剣をぐさりと盗賊の胸に突き立てた。

「こいつは、このままにしておけ。その内、盗賊の仲間がやってきて気づくだろう。鷹の紋章が入った剣の持ち主が、こいつを殺したと。俺は外海の人間だ。島の人間が恨まれる事は避けられる」

確かに盗賊の胸に突き刺さった剣は、島の武器屋で見られるような代物ではなかった。柄に入った鷹の見事な細工とはめ込まれた寶石。レストランであれだけの立ちまわりをしたのだ。おまけにその目立つ風貌、島の連中に聞けば、剣の持ち主がゴットフリーだという事は一目瞭然だ。

「でも、それじゃあ、ゴットフリーが狙われるよ」

「おもしろすぎる展開だ。伐折羅、今度は蝙蝠ではなく、盗賊たち

の頭でも集めてみるか」

不敵に笑うゴットフリー。

「もう、そいつの事はなりゆきに任せておけ。俺はザールの所へ行く。伐折羅、お前は……」

伐折羅の服は盗賊の返り血をあびて、真っ赤に染まりあがっていた。さすがに、このままでは黒馬亭に戻すのはまずいか……。ゴットフリーはしばし考えこんだ。

「大丈夫だよ。帰る前に近くの池で洗ってゆくから、さっきの蝙蝠さわぎで血がついて、嫌だったんで洗ったって、天喜には言うから」

ゴットフリーは無言でうなずいた。それにしても、先ほど怯えきっていた伐折羅はどこへ行った？ 今はおそろしく冷静に事の判断をする別の彼がいる。

「そうだ、ここに剣をおいていつてしまったら、ゴットフリーが持つ剣がないね」

伐折羅は、こわごわ、地面におとした盗賊の剣を拾い上げた。

「血だらけだ……でも、鷹の立派な剣とは大違いだけれど、ないよりはいいでしょ」

伐折羅は盗賊の剣をゴットフリーに差し出した。

いかにも下世話な剣だが、護身用くらいにはなるか。それに、これを持っていた方が盗賊殺しの犯人ばいな。

多少、不満げにそれを受け取り、血を払い落とそうとする。……が、

「あ、待って、ちょっとだけじっとしてて」

「何だ？」

「ごめん、もういいよ」

伐折羅は透き通るようなあの笑顔を見せた。血にそまつた剣を持

つゴットフリーの姿に伐折羅は見とれた。彼にとってそれは、どんな有名な画家にもかけない最高の名画だったのだから。

「あ、あれは？」

伐折羅の視線は、空の上に移っていった。月明かりを受けながら、黒い翼が舞い降りてくる。伐折羅は軽く手を差し出した。

「その鳥は？」

「これは、僕の黒い鳥。僕が困っていると、決まったように現れるんだ。きつと、この鳥は母さんの化身なんだよ」

手に止まった黒い鳥に伐折羅は愛しげに頬をよせる。

“伐折羅の黒い鳥” 確か天喜にも……ゴットフリーの考えを読み取ったかのように、伐折羅は言葉が続ける。

「天喜は白い鳥を持っているんだ。黒い鳥と白い鳥、こいつらは母さんがいなくなった日に、僕らの元へやってきた。だから、僕らはこの鳥を母さんだと思って大切にしているんだ」

その時だった。黒い鳥がひらりと身をひるがえして、ゴットフリーの肩に飛び乗ったのだ。

「あれ、珍しい。この鳥が僕以外の人の肩に乗るなんて」

ゴットフリーは迷惑げに、肩の鳥を払いのけた。

「お前は早く帰れ。盗賊とザールの話聞いていただろう？盗賊たちは今夜中に荷物を運び出すつもりだ。ここで盗賊たちと鉢合わせてしまったら、仲間殺しの犯人だと、お前も疑われるぞ。それでは死体に工作した意味がない」

何度もゴットフリーの方を振り返りながら、伐折羅は花園を去っていった。その頭上を黒い鳥が距離を開ける事なくついてゆく。

胸を貫かれ無残な姿で横たわっている盗賊の軀に目をやり、ゴットフリーはふとジャンの事を思っ苦い笑いを浮かべた。

俺は盗賊一人、殺しても何とも思わんが、あいつは俺と伐折羅で

死体に工作していると知ったら、さぞや腹を立てるんだろうな。

それにしても伐折羅……、七億の夜叉をひきつれた夜叉王の名……か。

妙に気になる。ジャンに感じた感覚とはまた違う興味が湧いてくる。

さわさわと紅い花園が揺れていた。ザールの屋敷へ歩き出したゴットフリーの後を、紅い光が追いかける。

破滅の王、誘えり……誘えり。

ゴットフリーには聞こえない、そのつぶやきは、紅い花園全体に広がっていった。

14・花園の囃(3)

「よく来てくれたな。待つてたんだ。えらく遅かったじゃないか」

屋敷でゴットフリーを迎え出たザールは精一杯の愛想笑いを浮かべて言った。

黒い影をまとった怪しい館は、中もそれにたがわぬ陰鬱さだった。照明は暗く、壁紙はところどころが剥げ落ちて、少しも手入れをしていないのは一目瞭然だった。ザールが収集したのだろう、唐突に置かれている骨董品の壺や置物もあり趣味がいいものとはいえなかった。

「男所帯で、ろくに持成しもできないが、まあ、ゆっくりしていつてくれ」

「そんな必要はない。用が終わればすぐに帰る」

「用？ああ、そうか、そうだったな。島主リリアから預かった品物は、蔵にしまつてあるんだよ。ちよいとばかり、奥に入つてしまつていて、わしの力じゃ出せないんだ」

「だから、俺に出して欲しいと？」

一体、何を企んでやる。こんな見え透いたペテンに乗ろうとしている俺も俺だが……。

馬鹿馬鹿しいと思いつつも、ゴットフリーは、こつちだと、誘導するザールの後をついていった。

ガルフ島の島主リリアの館ほどの広さはなかったが、ザールの屋敷もそれなりに立派な造りをしていた。

かつては、黒馬島の住民も豪勢な暮らしをしていたのだろうか、

今では、黒い痩せた大地が広がるばかりだ。俺の故郷、ガルフ島も昔は豊かな島だった。それを思えば、この島もガルフ島と同じ運命を背負っているのかもしれない。

ゴットフリーの心は、深く沈みこんだ。何故、豊かさや幸福は、一つの場所にとどまっていられないのだろうか？およそ人の力では、変えられない現実。それでも、俺は至福の島……レインボーヘブンを探さずにはいけない。

「わしは古物商が本業だが、こう見えても、この黒馬島の経済を取り仕切っているんだ。ここで育てられる馬や花は極上もんだぜ……お前さんの母、島主リリアと面会したのも、その取引の話があったの事だ」

ザールはいかにも真つ当な商人の顔をして言った。だが、ゴットフリーはそのほとんどが胡散臭いと思きつていた。リリアが自分の知らない所でよそ者と会うなんて、どうせ、ろくでもない骨董品をいかにも珍品と偽って、売りつけようとしたのだろう。

「その時なんだよ。お前さんの両親の遺品を島主リリアから、預かったのは」

金細工のロケット……俺の父の写真が入っている

ゴットフリーは、一瞬、言葉に詰まったが、

「何故、リリアが見も知らぬお前にそれを預ける事がある？」

と、ザールを睨めつけた。

「どこか、遠くへやってしまいたかった……と島主リリアは言っていたぞ」

「……」

「お前の身元が知れる唯一の証拠だ。彼女はきつと、お前を手放したくなかったんだろうな。だが、捨てるに捨てれない。それならば、誰か他人に渡してしまおう……て理由だ。幸い、わしは外海の人間

だ。島主リリアはそれを話すと大喜びでロケットを渡してくれたよ」

ザールの言葉には、どこかしら島主リリアに対する侮蔑が含まれていた。晩年のリリアの精神は半分狂っていた。この善良さの欠片もない古物商は、どんな美味しい言葉で彼女から金品を巻き上げていったのだろう。ゴットフリーは、自分を大切に思ってくれていたリリアに感謝する反面、哀れさを感じずにはいられなかった。

「もう一つ、聞きたい事がある」

ザールがその質問に簡単に答えを返すとは思えなかった。だが、ゴットフリーは敢えて言葉を続けた。

「この黒馬島から、出て帰ってきた者はいないそうだな。だが、お前には何故、それができるんだ？」

ザールは、うすら笑いを浮かべながら言う。

「別に隠しているつもりはないがな、黒馬島の住民なら、ほとんどが知っている事だ。西の山の麓一箇所だけ霧の晴れた場所がある。

そこから、わしは外海に出るんだ。ただし……そこに行けるのは西の盗賊と取引のあるわしだけだ。それに……」

「それに、何だ？」

「何時、その場所から、出ても戻ってこれるわけじゃない」

「……」

「タイムリミットは長くても、せいぜい5日だ」

「どういう事だ」

「まあ、その話は、お前にロケットを渡してからだ。俺が私腹をこやしていると変に誤解している奴もいるが、わしは黒馬島と黒馬島の住民の為に西の盗賊と付き合っているだけなんだ。それを解ってもらおう為にもな」

何個か扉の前を通り過ぎた一番奥の扉の前でザールは足を止めた。「この扉の奥に蔵がある。ちょっと、待ってくれ。今、鍵を開ける

から」

ポケットから、鍵束をとりだすと、じゃらじゃらと蔵の鍵を探し出す。ふと気づいて、ゴットフリーは蔵の扉に目をむけた。

あの花の香りがする……

扉の向こうから、かすかだが花の香りが漂ってくるのだ。

「まったく、扉が多すぎて鍵探しにはいつも苦労する」

がちゃんと鍵がはずれるのを待ちきれないように、ザールは扉を開けた。白壁の何もない部屋。ただ、紅い花の香りだけが満ち溢れていた。

「ここが蔵か？荷物など何も見えないが」

ザールは小ずるような笑顔を作る。

「この奥にもう一つ扉が見えるだろ。それが、蔵の入り口だ」

「それにしても、この花の香は……」

「ああ、屋敷の中から来たからな。気づかないのも無理はない。この部屋は前にお前と会った花園の隣にあるんだよ」

再び、鍵の束をいじりだすザールに、一体、何個の鍵をもってやがると、ゴットフリーは苛立ちはじめた。

「あつた、あつた。待たせたな、さあ、中に入ってくれ」

扉が開いた瞬間、ゴットフリーは目の前が真っ白になった。花園でかいだ香りより何倍もきつい刺激臭が彼に襲いかかってきたのだ。「……！」

立っているにも耐え切れず、その場に膝をつく。喉がきつく締まり、呼吸すらできない状況に、激しく喘ぎだす。

ザールはあらかじめ用意しておいたハンカチごしに、勝ち誇った声を出した。

「ゆっくりしてってくれと言っただろ？この島を出て、帰ってくる方法？誰がそんな事を教えるものか。この島の金はすべて俺が管

理する。島の人間にはそれなりに分け前をくれてやっている、誰も文句など言わせないぞ。それに、お前のその髪……が気に入ったんだ。お前はわしを虫けらみたいに扱いやがる。だから、お前の息が止まってから、たっぷりと時間をかけて、その髪を拝ませてもらうよ」

がしゃんと扉を閉めると、ザールはしゃがれた声で高々と笑った。

ザールの奴……甘く見すぎていた！

ゴットフリーは、壁を這い登るように立ち上がると、無理矢理に心臓の鼓動を整えた。苦しくて倒れてしまった方が楽だったが、少しずつの呼吸なら、きつい花の香りにも何とか耐えられそうだった。そうしているうちに、徐々に意識がはつきりとしてきた。

声が……聞こえる。

声というより、それはむしろ嘶きに近かった。

馬？……これは、馬の声か。

急に悪寒を感じて、ゴットフリーは剣を身構えた。盗賊の剣でも伐折羅のいうように、持ってきたのは懸命だった。その時、部屋の白壁がゆらゆらと動き出した。二箇所で盛り上がり、おぼろげだった輪郭が次第にはっきりと姿をととのえだした。その瞬間、ゴットフリーは驚愕に身震いした。

二足の白い馬……！

実際、壁が盛り上がったわけではなく、馬はもともと、この部屋に飼われていたらしい。だが、その体は異様に白く白壁に溶け込む

ように同化していたのだ。数多の修羅場を通り過ぎてきた……だが、そのゴットフリーでさえ、驚きを隠せなかった理由は

地獄からきた使者……その言葉しか、脳裏には浮かばない。それほど、二頭の馬の姿は悪意と後悔に満ちていた。

白い胴体とは裏腹に、顔面からこぼれるように飛び出した瞳は、燃えあがる炎の色をしていた。激しい鼻息をあげながら、嘶いた鳴き声は天地を恨むかのようにきしんで聞こえた。そして、口元から、だらだらと垂らした長い唾液からも、あの花の香が漂ってくるのだ。

このおぞましい香りは、こいつらの吐息か！？

ゴットフリーは、片腕で口元を押さえ、もう一方の手で真一文字に剣を構える。一寸の隙をついて、二頭の馬は襲いかかってくるに違いない。緊張感が、白い部屋の時間を止めた。

灰色の瞳が、二頭の馬を見据えている。どちらが先に動いてくる？ 右か左か……ざらりと睨みつけ、視線が赤い瞳と交錯した時、

血の涙を流しているのか……

馬たちの赤い涙に、ゴットフリーは一瞬、息を呑んだ。

見ないでくれ……あさましいこの姿を

見ないでくれ……惨めに崩れてゆくこの体を

頭に入りこんできたその声に、気をそらした瞬間、二頭の馬は大きく嘶き、彼に襲いかかってきた。

わずかに先に踏み出した右の馬。ゴットフリーはその方向に、渾身の力をこめて剣を振りぬく。

「っつ……!!」

だが、ぼきりと鈍い音と共にその切先は、宙を飛んだ。

ちっ、あの盗賊、安物の剣を使ってやがったな!

役に立たなくなった剣の柄を投げ捨て、踊りかかったきた馬の蹄を頭上ぎりぎりで、身を伏せてかわす。ひやりと冷たい汗をかき、ゴットフリーは、馬と逆方向に床を転がりながら距離をとった。

呼吸すること、花の香りが心臓を圧迫してくる。ひどい眩暈を感じながら見た馬の体は、ゆらゆらと青白い炎に包まれていた。

恨んでいる……おぞましい奴らの姿を見てしまった、この俺を。

剣を失い、武器になりそうな物は一つも見当たらない。タルクのような巨漢ならば、力まかせに戦う事もできただろうが、ゴットフリーが素手で二頭の馬を倒せる確率はほとんど無に等しかった。

ザールの奴、俺がやられたら、頭の皮でもひっぺがす気なんだろう。ふざけるな!こんな所で死んでたまるか。

だが、どうすればいい?

花の香はますます、ゴットフリーを息苦しくさせた。思考がおぼろげな時とやけに明確な時が交互にやってくる。目の前の敵に集中しろ、気を散らすなど、二足の馬を睨めつける。よく見てみれば、普通の馬より小ぶりはまだ、成馬とはいえなかった。似た姿の二頭は決して離れようとはせず、寄り添うようにゴットフリーの出方を伺っている。

こいつら……ゴットフリーは無意識の内に言葉を発していた。

「兄弟か?」

すると、馬の荒々しい吐息が一瞬、止まった。

「兄弟なんだな。しかも、仲の良い。なぜ、こんな部屋に閉じ込められた？その花の香、姿ゆえに幽閉されたか！」

ゴットフリーの言葉に、二足の馬は大きく嘶いた。

だれが、こんな姿にした！

平和な日々を過ごせるはずの、栗毛の兄弟は

紅の花園、あの花の香にまみれて

白妖馬と化したのだ。

「白妖馬？今のお前たちにお似合いの名前ではないか」

ゴットフリーは、頭の中に響いてきた言葉に冷たくせせら笑う。

こいつらもあの花園でおかしくなった口か……心だけでなく、姿をも狂わされたか。

「つけこまれたな。疑う事のない平和など、何処にもありはしない。その妄想が崩れた時、お前たちは嘆いただろう？恨んだだろう？そこに邪心が生まれたのだ。白妖馬こそがお前たちの望んだ姿。ならば、嘆くな！意にかなわぬ者は始末しろ。お前たちの心は、そうしない事には癒されはしない」

ゴットフリーの言葉に白妖馬は、狂ったような雄叫びを上げながら高々と蹄を持ち上げた。怒りに身もだえた姿はまさに地獄の使者にふさわしかった。

そして、お前たちをそこまで貶めた張本人を俺は知っているぞ。

紅の花園……そのからくり気づいた瞬間、ゴットフリーの中で何かが微妙にずれ出した。封印されていた心の別の部分が、滲み出すように彼を支配しはじめた。

海の鬼灯……火の玉山に火を吹かせ、BWを使ってガルフ島を海

に沈めた紅い灯。だが、それを作り出したのは誰だ？あの日食の日、火の玉山に集結した邪気たちは、どこから来た？考えるまでもない。あいつらは、すべて人間の心が生み出してきたのだ。己の恨みをはらすため、他のすべてを消し去ろうとする……破壊の衝動。

世間の小さな恐怖など、取るに足りないではないか。この世は邪心にまみれている、それらを満足させるには、大きな癒しが必要なのだ、この世のすべてを破滅させるだけの殺戮、破壊、そして死……。

そう、この世を救う唯一の術は……破壊する事だ。何もかも消してしまえ！そうすれば、万民は苦しみから開放される。

白妖馬を見据え、ゴットフリーは、残酷な笑いをもらした。その灰色の瞳からは、胸をすくような眼光は消えうせていた。

「お前たちは俺が癒してやるよ。己の血を浴びて地獄の厩舎へゆくがいい！」

予感があった。何かが闇を蹴って駆けてくる。それはまぎれもなく、自分自身に属する物だ。

ゴットフリーは右の手を前方に差し出した。すると、手の中がにわかにも明るく輝き出した。光の粒は、黒鋼色に色を変えながら一本の剣に姿をかえてゆく。

- 闇馬刀 -

黒い刀身は鏡のように輝き、切れ味は疑う余地もない。

求めれば、この剣は俺の所へやってくる。

無意識のうちに悟った理をゴットフリーは、当然のように受け入れた。

闇馬刀の光に触発されたか、二足の白妖馬は、堰をきったように襲いかかってきた。ゴットフリーは大きく後ろに剣を引いた。

「うおおおおっ!!」

絶叫しながら、右の馬の首めがけて、剣を振り下ろす。

血の花が咲いた。白い馬の首がゆっくりと宙を舞ってゆく。

血の涙を流しながら……己の非業を嘆きながら。

そして、首をなくした白妖馬の胴体からは、おびただしい血の雨が吹き上がっていた。

白妖馬の血をあびながら、ゴットフリーはその場に立ち尽くしていた。ザールに騙されてこの部屋に入った時より、数十倍も強い花の香が血の雨から流れ出てくる。吸ってはならない。だが、否応無しにその臭気は体の中に入り込んでくる。

この花の香は人の心を狂わせる……。

ゴットフリーに意識といえるものは、ほとんど残っていなかった。どくどく、どくどくと響いてくる心臓の鼓動だけが、頭の中で鳴り響いていた。

ここは闇の世界か、何も見えない、考える事もできない……ゴットフリーの心は、闇に閉ざされようとしていた。その時、手に持った闇馬刀が薄い光を放ちだした。

光が見える……

ゴットフリーは闇の中に一筋の光を見た。だが、その光は次第に

細くなり遠くの方へ消えてゆこうとしていた。遠くで片割れを失った白妖馬の悲痛な嘶きが響いている。

床に崩れ落ちながら、ゴットフリーは小さくつぶやいた。

「ジャン……お前、どこにいる……？」

15・海の鬼灯（1）

萬屋黒馬亭の2階。

「タ、タルク、タルクっ！」

息せき切って走りこんできた、天喜をタルクはいぶかしげに見た。
「何だ？血相変えて。今度はドラゴンでも出たか？」

「ち、違う。ミ、ミッシェが……」

「空でも飛んだか？」

俺は、あいつやジャンが空を飛んでも、別に驚かないぞ。

「そうじゃなくって！ミッシェって、ミッシェってまるで別人じゃない！」

はあ？とまるで合点がいかない様子のタルクに天喜はいらだった。
天喜が風呂場で見たミッシェは、銀の髪を輝かせた妖精のような少女だった。

「だ・か・ら……」

天喜が次の言葉を口にしようとした時、

「伐折羅が帰ってきたよ」

戸口の方から声がした。振り返って天喜は、愕然とする。黄ばんだような白い髪、薄汚れた服。そこには、前から見慣れたミッシェが立っていたのだ。

「ミッシェ、本当のミッシェ？」

「天喜、どうしたんだ？お前、変だぞ」

不可思議顔のタルクに、天喜は納得がいかない。タルクは、そんな事はおかまいなしにミッシェに話しかける。

「伐折羅はどこへ行ってたんだ？」

「近くの池で服を洗ってたって。レストランの騒ぎで血がついたから」

伐折羅が洗濯……。天喜は首をかしげたが、よくよく考えてみれば、伐折羅は一年の半分は学校の寄宿舎で過しているのだ。洗濯をしていたとしても不思議はない……。でも、何で池なんかで……？

「……で、伐折羅はどこ？」

「お風呂。気持ち悪いから綺麗にしたいって」
タルクは、軽く眉をしかめた。

気持ち悪い……。か……。そりやそうだろう。あれだけの蝙蝠の死骸を見たんだ。しかし、あの血だらけの頭を皿に盛った当の本人にしては、何か白々しい言い分だな。それに、もう夜だろ。暗がりの中で洗濯してたっていうのもえらく嘘臭い。

タルクは、壁にかかった時計に目をやった。午後十時。隊長とレストランで別れて優に2時間は経っている。「少し用がある」と言った割には時間がかかりすぎているじゃないか。

窓の外は、とつぷりと闇に覆われていた。月も星も姿を消しているのか、この時間にしては深すぎる闇。

「隊長を探してくる」

闇がはびこりだすと、絶対良くない事が起こるんだ。

タルクは居ても立ってもいられなくなって、がたんと椅子から立ちあがった。壁に立てかけたあった長剣を背負い上げる。その時、
「ジャン……？」

ジャンがむくりとベッドから起き上がったのだ。座ったまま、夢遊病者のように宙を見つめている。タルクは驚いてジャンの元へ駆

け寄った。

「おい、ジャン、しっかりしろっ！」

強く肩を揺さぶられて、ジャンは、はっとタルクを見た。

「タルクッ！ゴットフリーを行かすなっ！！」

ベッドを飛び降りて、そのまま駆けて行こうとするジャンの腕をタルクが掴む。

「待て、お前っ、どこへ行く気だ？！それに、隊長の居場所を知っているのか」

ゴットフリーの声が……聞こえた。紅い……紅い花の中で……

「ザールの花園だ！急げタルクっ、ゴットフリーを闇に獲られるぞ！」

ジャンが叫んだと同時に、するどい金属音が部屋に鳴り響いた。ベッド側の窓ガラスが弾け飛んだのだ。

「な、なに、何っ？」

驚いた天喜の顔に、冷たい夜風がびゅうと吹きつけてきた。壊れた窓の外からは、蹄の音と、かすかな馬の声が響いてくる。

何をやってるの！力がもどったあなたは、もう体から出れない。だから、ここの馬を使って早く行って！

- 夜風 -

この声はレインボーヘブンの欠片。

「霧花か？馬って、黒馬亭に飼われている馬のことか」

ジャン、夜風に向かって、話しているの……？

そうとしか思えなかった。なぜなら、黒馬亭の2階の部屋に吹きつ

けている風には天喜でさえも意思を感じた。怒っている……、窓ガラスを叩き割るほどに、この風は怒っている。

窓の下につれてきたわ。だから早く！

「解った。タルクっ、お前も来てくれ！」

ジャンは、タルクの太い腕をぐいと掴むと窓際へ引っ張っていった。先程割れてガラスのない窓を大きく開け放つ。窓の下には霧花のいうとおり、一頭の馬が彼等を待ち構えていた。

「タルク、飛び降りるぞ！」

「何だつて！ここは2階だぞ」

「だって、僕は馬の扱い方を知らない。だから、お前が乗せてくれ」「そうじゃなくて、お前と違って、俺がここから飛び降りれるわけがないだろ！」

タルクは身長2mを軽く越える大男だ。おまけに背には馬鹿でかい長剣まで背負っている。

「大丈夫だから、さっさと、飛び降りろっ！」

ジャンは、有無をいわずタルクを外へ突き飛ばした。見かけは子供でもジャンの力は岩をも砕く。

「ミッシェ、後から来てくれっ！」

そう言い残すと、窓辺に駆け寄った天喜の頭を軽々と飛び越えて、ジャンもタルクに続いた。

「タルクが空を飛んじやった……」

あの大男のタルクが、ふわりと空を舞い下の馬に飛び乗ったのだ。ジャンは、いとも簡単にその後ろに着地した。

ミッシェが空でも飛んだかって……

「タルク、あんだだつて、そうじゃない」
天喜はあまりの光景に目を白黒させて、二人が乗った馬が駆けて行く様を見送っていた。

* * *

闇の中を駆け抜けてゆく。タルクとジャンを乗せた馬が。

「おい、この馬、本当に黒馬亭の馬か？サラブレッド並のスピードじゃないか！」

「気にすんな！風に乗っているだけだから」

「それに、窓から落ちた俺を支えた奴がいる」

「以外と力持ちだろ」

「それって誰なんだ！！」

いらだつ心をぶつけるように、タルクは馬の胴体に蹴りを入れる。知らない事が多すぎる。俺はゴットフリー隊長の一の従臣だぞ。

「ジャン、隊長を見つけたら洗いざらい話してもらうからな」

乱暴なタルクの馬術に、ジャンは苦い笑いをもらす。

ザールの屋敷が目前に迫ってきた。一瞬、目を瞬かせてジャンが叫んだ。

「花園が燃えている！」

「何だつて！」

「いけないっ、あそこにはゴットフリーがいる」

紅い花園から、無数の火の粉が沸きあがっていた。それらが描く炎の渦が一つ、二つと烙印を押すように夜空に広がってゆく。

花園への扉は堅く錠で閉ざされていた。

「タルクっ、つき破れっ！！」

「とつくに、そうするつもりだよ！！」

タルクは、長剣を背から引き抜くと馬の背から、それを扉に振り

下ろした。そして、扉をトタンの壁ごと切り裂くと、突っ込むように花園に馬を走らせた。

* * *

「そろそろ、くたばった頃かな。いくら、化け物じみた奴だってあの白妖馬は、本当の化け物だ。敵いっこないだろう」

ザールは舌なめずりをしながら、ゴットフリーを閉じ込めた部屋へ向かった。あの髪が手に入るんだ。それを考えるとザールは嬉しくて踊り出したい気分になった。

「白妖馬が眠る朝まで部屋に入れないのが、残念だ……。さすがの俺もあの馬を相手にする気はないからな」

とりあえず、のぞき穴からでもゴットフリーの様子を見ておこう。じきに西の盗賊たちもやってくる。お楽しみは、麻薬花の運び出しが全て終わってからだ。

白妖馬のいる部屋は、もともとはザールが飼育していた馬の厩舎だった。黒馬島は、古くは馬の飼育と花の栽培を生業にしてきた島だった。痩せた土地には作物を育てる事はできなかったが、飼料となる牧草や観賞用の花は作る事ができた。ザールも麻薬花に手を出す前は古物商の他に真面目に放牧等の手伝いもしていたらしい。

ザールは部屋の扉に備えつけられた、のぞき穴に瞳をくつつけて中の様子をうかがった。

おかしいな。何も見えない……

その瞬間
バリバリッバリッ

白い部屋の扉が、真っ二つに裂けたのだ。ザールは寸での所で剣を受けなかったが、大破した扉から出て来た男の姿に腰を抜かして慄いた。

全身血まみれの男が、ザールの横を通り過ぎてゆく。足取りは鉛の枷をつけられたようにひどく重い。右手には、にぶく光った黒剣を握り締め、左手に何やら白っぽい塊を携えている。

「お、お前、ゴットフリーか……？」

まっすぐ前を向いたまま、瞳だけをぎろりと動かしザールを睨めつける。顔面にしたたる血の間から向けられた灰色の瞳は、地獄の闇を映すように陰鬱な光を放っていた。

ゴットフリー、いや、こいつはまるで……

ザールは、怯えきつて、その場から逃れようと後ずさりを始めた。その時だった。

ゴットフリーが、にやと引きつった笑いをもらった。

そして、

どさり……と、

左手にもった塊をザールに向けて投げ捨てたのだ。

「うわわああっ……！」

無残に切り取られた白妖馬の首が足元に転がっていた。血の涙を湛えた赤い瞳がザールに恨みの視線を送っている。

ザールの悲鳴に呼応するかのように、白い部屋から別の白妖馬が飛び出してきた。ゴットフリーは、白妖馬の鬣をつかみとるとその背に飛び乗った。

「魔王だ！わしは魔王を呼び起こしちゃった」

ははは……

ザールの言葉に満足げな笑い声をあげながら、ゴットフリーは白妖馬の胴体を強く蹴った。馬は、館の壁を蹴破り、地獄の叫びをあげながら紅の花園へ飛び出していった。

「うああ……」

ゴットフリーの乗った白妖馬を啞然と見つめていたザールは、白い部屋から飛び出てきた、もう1匹の白妖馬の姿に頭を抱え込んだ。

あ、頭がない……

どうしようもない恐怖にザールは囚われていた。とんでもない事をしちまった、この黒馬島は破滅するぞ。ゴットフリー……あいつは、あいつは……

魔王だ……。

16・海の鬼灯（2）

燃え上がる炎の間をすり抜けながら、タルクとジャンを乗せた馬は紅の花園を走っていった。

「ゴットフリーは何処だ!？」

むせ返るような花の香りが、広がってくる。何故、花園は燃えている?この火は一体誰がつけたんだ?

ジャンは、目を凝らして花園の中央にそそりたつ火柱を見つめた。

違う!この火は自ら燃えているんだ。紅い花園?違うぞ。僕は知っている……。この濁った不吉な紅の色は……

- 海の鬼灯 -

女神アイアリスに見捨てられ、この世をさまよう怨念の塊。恨み、憎しみ、怒りの力を吸取りながら、通り過ぎるすべての物を破滅に導く邪悪の根源。

「俺はこの紅を見たことがあるぞ……これは、まさか……」

啞然と燃え立つ炎を見つめるタルクに悪夢の記憶が蘇ってきた。忘れられるはずもない。ガルフ島が崩壊した時、溶岩と津波の間に見た紅の灯を。そして、助けきれず飲み込まれていった住民たちの哀れな姿を。

「海の鬼灯!何故こんな場所に?!」

「黒馬島に巢食っていたんだ。紅の花園に姿を変えて……ゴットフリーを取り戻すために」

「……海の鬼灯が隊長を?」

タルクはふに落ちない顔でジャンを見たが、驚きはしなかった。

黒馬島にゴットフリーを嵌める罫がある事にはとうに気づいていたのだ。

「海の鬼灯は、伝説の島、レインボーヘブンを襲った略奪者たちのなれの果てだ。ゴットフリーはその長の末裔……彼らにとっての王……なんだ」

「隊長が、略奪者の長の末裔？それも伝説の至福の島の」

「詳しい話は後だ。だが、レインボーヘブンの守護神アイアリスもゴットフリーをレインボーヘブンの王に選んだ。やがて、蘇る至福の島を統べる者として。平和に慣れすぎて戦う術を知らないレインボーヘブンには、略奪者たちの強い力が必要だったんだ」

だから、隊長はレインボーヘブンを探しているのか。そんなとんでもない運命を背負わされていたなんて……なのに俺は……タルクは少しばかり拗ねた気分になってきた。ゴットフリーに仕えたい一心で着いて来た。だが、レインボーヘブン……伝説を相手に今の自分にできる事などあるのだろうか？

火柱の勢いが弱まった時、ジャンの目が見慣れた黒づくめの男を捕らえた。

「ゴットフリーだ！！見つけたぞ」

馬の背から飛び降り、駆けてゆこうとするジャンをタルクが呼びとめる。

「ジャン、一つだけ聞かせてくれ！」

「話は後だ！」

再び、火柱が高く上がり、ゴットフリーの姿をかき消した。ジャンは炎を避けもせず、まっすぐにその中に飛びこんでゆく。タルクはありったけの声で叫んだ。

「お前は何処からやって来た？お前は一体何なんだ！！答えろ、ジャン」

燃え立つ炎に遮られ、もう、ジャンの姿は見えなかった。だが、タルクは確かに聞いた。足元から響いてくるジャンの声を。

- 僕は、レインボーヘブンの大地だ。守護神アイアリスによって分けられた七つの欠片の一つ。僕は探している、ゴットフリーと住民たちの居場所、真の至福の島が蘇るその場所を！ -

紅の花園が燃えている。海の鬼灯に侵食されていなかった花の箇所は、徐々に燃え尽きて黒い灰に変わり出した。

その花の香も次第に乾いた空気に閉じ込められ、今はこげた悪臭としか感じられない。ただ、花園の中央だけは絶え間ない業火が、立ち上り、熱風を撒き散らしながら紅の地獄絵を描き出していた。

ジャンは、その業火の真っ只中にいた。炎といっても、自然の一部である彼には、小さな火傷を負う程度にしか感じられない。だが、ジャンは苦しくてたまらなかった。

目の前にいるゴットフリー……白妖馬の背にまたがり、全身を血に染めたゴットフリーの瞳からは、もう以前の深遠さは消えうせていた。斜めにジャンを見下ろす灰色の瞳は、ぞっとするほど残酷でこの世の全てを夢んでいた。

「ゴットフリー、こっちへ来い！！」

ジャンは、ゴットフリーを引き寄せるように彼の方へ手を伸ばす。だが、ゴットフリーは知らぬ顔で白妖馬の歩を進めた。白妖馬がごうつと一声、嘶いた。すると、

ゴットフリーの目の前に炎が集結し始めたのだ。

* * *

「わしの花園が……大切な花園が燃え尽きてしまう……」

なすすべもなくジャンの後を見送っていたタルクは、後から聞こえてきた声に眉をしかめた。

「お前がザールだな。リリア様に会った古物商の。お前、ゴットフ

リー隊長に何をした?！」

怒りのこもったタルクの声に、ザールの体の震えは止まらない。

「わ、わしが悪かった……ほ、本当に心の底からそう思っている……だが、もう遅いかもしれない。一度、開けてしまったパンドラの箱はもう閉じれない……」

「何だと……?」

「わ、わしは魔王を呼び起こしちゃった……」

「魔王って、隊長の事を言っているのか!」

ザールの顔色はみるみる蒼ざめていった。

うあああつ!!

叫びながら、がくと膝をつき頭を抱える。

背後からのひどい悪寒に、振り返ったタルクの心臓が、一瞬、凍りついた。

首のない馬……

ワンダーランドもここまでゆくと、可愛げがないぞ!

驚いている暇などなかった。首がなくても、あきらかにその馬はタルクに向けてむき出しの敵意で襲いかかってくる。ゴットフリーに首を斯き切られても、死ねない白妖馬は、ただ、殺戮することのみに癒しを感じているのだ。

* *

花園に巣食った海の鬼灯たちは燃え上がり、空を舞いながら、形を作り始めた。ゴットフリーの元へ駆け寄ろうとするジャン。だが、

海の鬼灯がその行く手を阻まれ近づく事さえできない。

「畜生！何でこいつらに手が出せないんだ？」

ガルフ島でも、ジャンは海の鬼灯と戦うことができなかった。レインボーヘブンが海に沈んだ時、ジャンは聞いてしまったのだ。女神アイリスに見捨てられ、この世を恨みながら死んでいった略奪者たちの声を。海の鬼灯は、略奪者たちの怨念の塊だ。ジャンが持った哀れみの心が今もジャンを呪縛する。

目の前で紅い灯が完全に一つの形になった時、ゴットフリーは低い笑い声をあげた。

炎の馬……海の鬼灯の濁った紅をまとった邪心の馬。

白妖馬の背を降りると、炎馬に引き付けられるように、その方向へ歩き出す。右手の中で、闇馬刀が鈍く光っている。ゴットフリーは、ジャンに背を向けたまま、ゆっくりと剣をもちあげるとにやりと引きつつた笑いをもらした。

「だめだっ！ゴットフリー！！」

その瞬間、空が紅く染まった。

断末魔の叫び声が、焼け焦げた花園に響き渡った。

「お前は……戯れに命を奪う奴じゃなかった……のに」

無残に両断された白妖馬の体。どうしようもない怒りが込み上げてきて、ジャンは、泣き入りそうな声で叫んだ。

それは、人の言葉でない言葉、大地をゆるがす咆哮。

ゴットフリーを返せ！海の鬼灯……僕はお前たちを許さない！

ジャンの体が蒼く燃えた。眩し過ぎる光が焼け焦げたザールの花

園をみるみるうちに蒼の色に染めてゆく。

* *

首のない白妖馬、後戻りのできない負の運命に落ちこんだ哀れな怪物。

殺してくれ、殺してくれと、嘶きながらも、その心は殺戮を望んでいるのだ。

長剣を真っ直ぐ白妖馬に向け、間合いを数える。タルクの額に汗がにじんだ。

首のない馬って、どこを斬れば始末できるんだ？

その時、突然、辺りが蒼に染まった。

この蒼の光……ジャンか！？

長剣がぼつと輝き出した、タルクはそれを見て苦い笑いを浮かべた。何時の間にか、タルクの剣はジャンの力を得る術を覚えたらしい。

あいつの力は借りたくはないんだがな…

「だが、今はとりあえず、有難いかっ！」

タルクの長剣がうなりをあげた。からめとった空気が蒼の光と交じり合う。そして、振り下ろした切先は巨大な光の刃となって、首のない馬を切断した。

血は一滴も流れなかった。ゴットフリーに斬られた時、それは流

れきってしまったらしい。

胴体から真つ二つに裂かれた白妖馬の体を、蒼の光が包みこんでいた。見る見るうちに、その体は光の中に溶け込んでゆく。やがて、白妖馬の形は消えてなくなり蒼の光の粒となった。そして、それはゆっくりと浄化されながら空に上り出した。

タルクは輝く光の粒を目で追いながら、しみじみと言った。

「首もなく、血も流れない……。お前の生きている証は死ぬ事でしか示せなかったな」

……ジャンに感謝しな。あいつの力でお前は救われたんだ……

17・海の鬼灯（3）

ジャンが蒼く燃えていた。その足元からは、うなるような地響きが聞こえてくる。

「お前ら、いつまで隠れている。いい加減に姿を現せ！」

叫んだ瞬間、ザールの花園に無数の亀裂が走った。

両の手を堅く握り締め、ジャンは仁王立ちになって空を仰ぐ。

「黒馬島の大地よ。お前に巢食った膿を僕が搾り出してやる――！」

うおおおおおっ――！！

ジャンの叫びが、大地を震わす。すると、地面の亀裂から沸き立つように土砂が溢れ出した。ぷちぷちと音をたてながら、ザールが栽培した花の根っこが引き裂かれてゆく。

小麦色の髪は総毛立ち、とび色の瞳が黄金に輝いている。ジャンが両の手を地面につけると、蒼の光は一層強く地中の土塊を外に引きずり出し始めた。

* * *

「花園が沸き立っている……、土くれが沸騰してるみたいに」

ジャンと海の鬼灯の間で、何かが起こっているんだ？ジャンはいとしても、心配なのはゴットフリー隊長だ。魔王……まさか、ザールの奴。

「ザール、お前、隊長にあの白妖馬を仕向けたのかっ！まさか、隊長まであんな風に変えちゃったんじゃないだろうな！」

「……は、白妖馬の事は、わ、悪かった。だ、だが、その後の事は、わしにだつてわからないんだ」

タルクは、ザールを睨めつける。

「あの馬は、お前が育てたのか？」

「違うつ！ あれは、普通の栗毛の馬だった。紅の花園だ。あの花の香を嗅ぐうちにあの馬は、白妖馬に変化したんだ」

「どちらにしても同じ事だろつ、紅の花を育てたのは、お前なんだつ……！」

赤鬼の形相のタルクに、ザールはおどおどと手を差し出した。

「一体、何の真似だ？」

「こ、これは、あいつ……ゴットフリーの親の遺品だ。わしが島主リリアから、預かっていた。こ、これをやる。だから、許してくれ！」

親の遺品？ 隊長の本当の親の……そんな話……初めて聞いた。タルクは、ザールに差し出された金のロケットを手にとり、その蓋を開けた。

「中身はどうした？ 何も入っていないじゃないか」

「……写真が……あの男とよく似た写真が入っていたんだが……島主は多分、あいつの父だと」

「捨てたのか？ 何で！」

「……すまん、実は他で売るのにいらなと思って……」

「馬鹿野郎っ……！」

瞬間、ザールの体は吹っ飛んでいた。タルクが本気で殴りつければ、ザールを殺しかねない。力を抑える事ができたのが、タルク自身にも不思議なほどだった。

「だから、隊長はお前なんかの所へ行つたのか！」

畜生！いつも自分の生い立ちを憂いていた。ああ見えても、あの人は繊細なんだぞ。

タルクはザールが差し出した金のロケットを握り締めると、沸き立つ土砂の中へ駆け出した。蒼の光が最も眩く輝く場所……。

そこにジャンと……ゴットフリーがいる。

* * *

土砂の中から追いついて立てられた紅の灯が、一つ二つと飛び出してくる。夜空につけられた紅の斑点は、炎馬の周りを囲みながらゴットフリーを闇に誘う。

「ゴットフリー、その馬に乗るんじゃないっ！」

だが、ゴットフリーは、ジャンの方をふりかえりもせず、炎馬の元へ近づいてゆく。闇の王を背にする瞬間を待ちわびるかのよう、炎馬の炎は更に強さを増してゆく。

乗ってしまったら、お前は……もう、僕らの所へは戻ってこない。

ジャンが、その足を止めようと身を持ち出した時、

ぐわんと

風が声をあげた。

そして、炎馬が突然、飛散した。

「タルクッ！！」

ジャンは思わず笑みをこぼした。

はあはあと息を荒げた大男が、ゴットフリーの前に仁王立ちにな

っていた。手には2メートルもあるうかと思えるほどの長剣を携えている。

「隊長！目を覚ましてくれ！！あんたの器量は、魔王になるためのもんじゃない」

ぎろりと向けられた灰色の瞳に、タルクは一瞬、体をこおぼらせたが、今まで、感じた畏れの心は微塵たりともわきあがってこなかった。

いつもの隊長に睨まれたなら、俺は一步たりとも動けないが……

長剣の柄をタルクはぎゅっと握り締めた。

ゴットフリーが闇馬刀を身構えた刹那。

「タルクっ、避けるんだっ！！」

ジャンが声をあげるより早く、刃はタルクに飛んできた。

タルクの長剣が、闇馬刀を間一髪で受け止める。力だけなら、タルクはるかにゴットフリーを越えている。だが、剣の早さ、確実に相手の急所を見極めてくる剣技には、勝てる自信は全くなかった。

何て早さだ！それに隊長が持っている黒剣……あれには見覚えがあるぞ……まさかつ、黒馬亭で見た“闇馬刀”か！？

一瞬の雑念が、タルクの視界からゴットフリーを消し去った。反射的によけた左肩から鮮血が飛び散った。痛みを感じる間もなく、次の一撃が飛んでくる。なんとか、かわしたものの額からは汗が玉となって湧き出してきた。

勝てないぞ……こりゃ。だが、負けたら俺たちは隊長を失ってしまふ。一体、どうする？

「タルクっ、上だっ!!」

ジャンの声にタルクは長剣を頭上にかざす。通常ならば、長剣と闇馬刃がぶつかり合って火花が飛び散る場面なのだ。だが……

きんつと、短く鳴った金属音に、タルクは愕然と手元に目をやった。どさりと後方に落ちた鋼の残骸が地面に食い込んでいる。

その切先を半分以上も失った剣は、もはや長剣と呼べるものではなかった。

何て破壊力だ。俺の長剣をへし折るなんて……

闇馬刃の向こう側でゴットフリーの灰色の瞳が鈍い光を放っている。横一文字に構えた剣が通るであろう軌道には、タルクの首がある事は間違いなかった。

畜生！ここまでか……。

タルクは唇を噛みしめて、仕えたい一心で追いかけてきた自分の上官に目をやった。

にやりと笑みを浮かべて、闇馬刃を振り上げる。殺戮と破壊の喜びだけが、今のゴットフリーを支配していた。その瞳にタルクはもはや獲物の一つとしか映ってはいない。

どうせ、殺されるなら、元の隊長にやられたかったな。それならば、悔いも残らないだろうに……。

闇馬刃を構えるゴットフリーの後で、タルクに蹴散らされた海の鬼灯がまた集結をし始めた。

殺せ……殺せ……殺して早く闇に来い……。

背後で滅びの歌を歌いながら、紅の灯はさらに巨大な炎馬を形どってゆく。

「止めるんだ、ゴットフリー！タルクを殺すなっ！！」

そんな事をしてしまったら、お前は一生、闇の中から這い上がれないぞ！！

18・海の鬼灯（4）

ジャンの瞳が黄金に光った。地面がうなりをあげる。

その瞬間、ゴットフリーとタルクの間に稲妻のような亀裂が走ったではないか。突然、深く刻まれた大地の裂け目から、吹き上がった蒼の光。

虚をつかれ、ゴットフリーは剣を構えたまま、空を仰ぎ見た。

これも、ジャンがやったのか……何て凄まじい力を持っているんだ。

タルクは短く吐息をもらすと、ジャンの方へ目をやった。だが、ジャンは啞然とした表情で蒼の光を見つめているのだ。

この蒼の光は僕の方じゃない……霧花……BW？いや、違うぞ。もう一人……誰がいる。レインボーヘブンの欠片の一つが、ここにいる……！！

吹きあがった蒼の光は、闇を払いのけながら、ザールの花園の上に広がってゆく。そして、夜空の隙間から突然、陽の光が差ししてきた。

闇の向こうに青空が見える。

ジャンは心の震えをとめる事ができなかった。

この抜けるような蒼天。僕は知っている……この空は……レインボーヘブンの青い空！

やがて、陽光は燃え尽きたザールの花園を明るく照らした。陽の光がゴットフリーの黒い髪を紅に染めてゆく。その灰色の瞳は、ただ、一心に空を見つめていた。

「あの空、あの空だ！お前ら見るんじゃない。あれは、わしだけの物なんだ！」

突然、ジャンの背後で声がした。

「……ザール！お前、何か知っているな？！」

がくがくと震えながらも、ザールはジャンを押しつけて青空の元へ歩み寄ろうとしている。だが、その首根っこを、間一髪でゴットフリーから逃れてきたタルクが驚掴みにとらえた。

「性懲りも無く、まだ、隠し事をしているのか？いい加減に全部話したらどうだっ――！」

ジャンとタルクに睨めつけられて、ザールははっと我をとりもどした。その時、彼は初めて、髪を紅に染めたゴットフリーとその背後にいる巨大な炎馬に気がついたのだ。

魔王とその乗馬……炎の馬

だが、時間が止まったかのように、ゴットフリーはただ、空を見つめている。

うあああつ――！と叫び声をあげながら、ザールはジャンの足元にひふれした。

「話すから……話すからわしを助けてくれ。埋めたんだ……あの女を。そして、わしは見たんだ。虹の向こうの至福の島を――！」

虹の向こう……この男、レインボーヘブンの道標の事を言っているのか？

ジャンは驚きを隠せない。

「埋めたって、お前が僕を埋めたみたいにか?!」

「……わしがあの女を花園で見つけた時にはもう、息がなかった。多分、紅の花の香りで中毒になってたんだ。だから、遺体を隠そうと埋めた。土をかけてしばらくすると、今みたいに蒼の光が現われて……そして、わしは見たんだ。青空の中に現われた虹の向こうに、あの伝説の島、レインボーヘブンを!」

「レインボーヘブンが空に!そんな馬鹿な!」

その時だった。タルクが空を指し声をあげた。

「虹だ!青空の中を虹が駆けてゆく!」

それは見えたと考えた瞬間に消えてしまった。だが、タルクは確かに見たのだ。空の巨大なスクリーンの中に一瞬、垣間見えた緑の島を!

あれは、レインボーヘブンの虚像だ……

ジャンは、ほっとした反面、落胆もした複雑な思いで空を見上げた。それにしても……

「ザール!お前が埋めた女って誰だ?それにお前は僕までここに埋めた。それは何の為だったんだ?!」

「同じだったんだ。異様に軽かったから……お前もあの女……天喜と伐折羅の母親と同じくらいに軽かったから。また、見れると思っただ。あの至福の島を」

行方不明だという天喜と伐折羅の母親!紅の花の中毒で死んだって?まさか……まさか、その人が、レインボーヘブンの欠片?!

青空に架かる虹は、端の方から徐々に薄れだした。それと共に空は再び闇に閉ざされて行く。

「あ……あ……」

ゴットフリーは、力が抜けたようにがくと地面に膝をついた。そして、握っていた闇馬刃から手を離すと、消えてゆく虹の方向に腕を伸ばした。

「隊長！」

明らかに先程のゴットフリーとは、様子が違う。タルクは地面にできた亀裂を大股に飛び越えると、彼の元に駆け寄った。

「隊長、しっかりしてくれっ！」

両の肩を揺さぶってみても、灰色の瞳の視点はただ、空虚に虹の行方を追っている。その背後では炎馬が息を潜めて、事の成り行きを見守っている。

恨みと後悔の産物……ゴットフリーの肩越しに燃える馬の不気味さにタルクは背筋にひやりと冷たいものを感じた。

だがな、お前たちに隊長は渡さない！

タルクは、すうつと息を一つ吸い込むとぎゅつと右の拳を握り締めた。振上げようとして、すぐ辞める。かすかに笑い、そして、次は左の拳を握り締める。

いけねえ。ザールを殴った方の手を使っちゃうところだった。

そして、タルクはあらん限りの声で叫んだ。

「いい加減に目を覚ませ！！お前はレインボーヘブンの王になるんだろっ！ゴットフリー！！」

ジャンは呆気にとられて、その様子を見ていた。ゴットフリーの体が弾き飛んでいた。ごろごろと転がり、止まった後はぴくりとも動かない。

「タルクッ！！お前、ゴットフリーを殺す気か！？」

焦って、ジャンは倒れている彼の元に走りよる。タルクの奴、あの馬鹿力でゴットフリーを殴りやがった……

「手エなんか抜いても、こいつは目を覚まさないだろっ！頑固もんで完全主義のこの男は！」

「でもな　！」

ジャンは、次の言葉を口に出そうとした時だった。

「……誰が頑固もんだって……」

聞きなれた低めの声が聞こえてきたのだ。

「目をさませ。ゴットフリー……タルク、お前がそう言ったのか」
タルクとジャンが目をやった視線の先、

「ゴットフリー……！」

二人は同時にその名を呼んだ。ゴットフリーは小さく、つぶやくように言った。

「長い悪夢を見ていたようだ……」

「俺たちにとっちゃ、悪夢どころの騒ぎじゃなかった。お前、魔王になりかけてたんだぞ」

「お前だって？タルク、俺がお前か……」

ゴットフリーはタルクに殴られた頬を押さえながら、小気味良さそうに笑う。

はっと、気付いてタルクは急に恐縮したように顔を強張らせた。

「いや……、お前でなく……隊長だった。いかん、思わず……」

「あんなに力一杯、殴っておいて、今更何言ってる。もう、取りつくつても無駄、無駄」

ジャンは破顔した。だが、すぐ真顔になるとゴットフリーの血に染まった姿をじっと見つめてこう言った。

「ごめん。僕がいたのに、お前をそんな姿にしてしまった。見なく

ていい、悪い夢を見せてしまった……」

ジャンはゴットフリーの両の手をとると、その手に上に自分の頭をのせるかのように俯いた。

「でも、悪夢は所詮、夢なんだ……お前のいるべき場所は、夢の中じゃない」

女神アイアリスは言った。ゴットフリーの本性は悪だと。だが、それならば、何故、僕は彼に魅かれるんだ？何故、彼を失う事をこんなにも怖れるんだ？

ジャンの体が蒼く光を放ち出した。それは、これまでと違った柔らかな光だった。蒼の光がジャンの手を通してゴットフリーまでも蒼く染めてゆく。

血の色が……消えてゆく。隊長を紅に染めていたおぞましい闇の衣が浄化される。

タルクは、目頭が熱くなって、思わず大きな手で顔を隠した。

だが、事態はそれで収束したわけではなかった。

「炎の馬が行ってしまっよう」

抑揚のないわりによく通る声。

「ミッシェ！来てくれたのか」

ミッシェは、ジャンの言葉を無視して空を指さした。ゴットフリーの背後にいた炎馬は、彼を諦めたのか、空に駆け上がるとそのまま、町の方へ飛び去ろうとしていた。

「早く追いかけて。そうしないと、町が大変な事になる……」

19・燃える島（1）

「海の鬼灯が町に！？あいつらは空を駆けてゆく。今から追いかけても間に合わないぞ」

黒馬亭のサラブレッド並の馬でだって、とても追いつきやしない。

海の鬼灯……ガルフ島と同じように、黒馬島まで崩壊させようというのか。

どうしようもない怒りがこみ上げてきて、ゴットフリーは無意識のうちに体が震えてきた。すると、先程、手放され地面に横たわっていた闇馬刀が彼に呼応するように、かたかたと揺れ出したのだ。「黒剣が揺れている……黒馬亭で見たのとまるで同じだ。あれは、やはり闇馬刀！……ということは」

また、あいつがやってくる……のか？

焦った様子のタルクを尻目にゴットフリーは不敵に笑う。

「そう、あの黒剣は俺の物だ。そして、あの馬も……」

その言葉が終わらないうちに、遠くから蹄の音が響いてきた。それが、大きく響きだした時

旋風が舞い上がった。

黒馬島の黒い大地……それと同色の黒い馬

ゴットフリーを除く他の者は全員、目の前に現れた巨大な黒馬を啞然と眺めていた。

大地に足を下ろした威風堂々とした姿。

どこか人間を見下しているかにさえ思える黒い瞳。

だが、ゴットフリーは躊躇することもなく、その背に飛び乗った。
「ジャン、この馬で空を駆けれるか？」

一瞬、沈黙するが、ジャンはすぐに笑顔を作った。

「空を駆けるには、その馬には翼がないな。けれども、ゴットフリー、お前は行ってくれ。道は僕が作る。その黒馬なら天の道を駆けて行ける！」

ジャンの言葉にゴットフリーはにやりと笑うと黒馬の胴を蹴り、炎馬の駆けた方向に走りだした。

「ミッシェ、僕の力を制御して。もう、二度とガルフ島の時のような、まずい真似はしたくないから」

ミッシェはジャンの言葉にこくんとうなずくと、タルクの腕を強くひいた。

「少し、かがんで。私を肩にのせて」

ジャンは駆けてゆく黒馬の方向に両の腕を伸ばすと強く拳を握り締めた。

「黒馬島の大地よ。僕の声が聞こえるか？少し、島の形を変えてしまうが、我慢してくれよ」

つぶやくように言った後、ジャンは蒼く輝きだした。

うおおおおおおっ！！

およそ、人の声とは思えぬ咆哮。すると、蒼の光はジャンの前方の土を盛り上げた。それはまっすぐな線となって、黒馬で駆けてゆくゴットフリーを追いかけてゆく。

地鳴りと共に、大地が揺れた。

「タルクっ、しっかり立っていて！絶対、ここを動かないで！」

ミッシェはタルクの両の肩に立ち上がると、珍しく大声で叫んだ。

この揺れの中で、動くなっていわれても。

ミツシエの体重など、タルクにとってはないに等しいものだったが……

何か一言、言っただろうと思った瞬間、

ゴットフリーを乗せた黒馬が、空を駆けたのだ。

タルクは目の前の信じられない光景に二の句がつけなくなった。

いや、黒馬が飛んだのではなく、黒馬の下が土が空に浮き上がったんだ。あれが、ジャンの言っていた天の道。

ジャンが立っているちょうど、手前を始点として道ができあがってゆくのだ。黒馬の速度にあわせ、先にく炎馬を追いながら、それは空中に黒い地層を伸ばしてゆく。

すげえな。空に道を作るなんて……。

だが、ジャンの力の凄まじさに、大地はますます、大きく揺れ出した。何とか、動くまいとこらえてみても、タルクの足元には無数の地割れが迫ってきていた。

「ミツシエ、無理だ！早く逃げないと、地の底にひきずりこまれるぞ」

タルクが叫んだ瞬間、ミツシエが白く輝き出した。

「制御するからっ！タルクは目を閉じていて」

タルクの肩の上に立つミツシエは、横に両腕を伸ばすと、瞳を大きく見開いた。すると、ミツシエの体から眩いほどに輝きだしたのだ。ジャンの蒼い光より数段、強い白銀の光。普通の者では絶対に正視できない輝きが、ザールの花園に広がり、それは、蒼の色をみ

るみるうちに飲みこんでゆく。

「ありがとう、ミツシエ。ずいぶん、楽に力が出せるようになったよ」

ジャンはほつと息をついだ。

蒼の光は今は、かすかに余韻を残すのみになっていた。ゴットフリーをのせた黒馬の姿はもう見えず、彼らが走り去った後には天に架けられた道だけが残されている。

大地はいつの間にか、揺れる事をやめていた。

「……で、隊長は海の鬼灯……炎馬に追いつけそうなのか？」

やっともどつてきた視力に、目をこすりながらタルクが言う。

「大丈夫。あの黒馬はこの島の御神体だから、島の平和を乱す者を絶対に許しはしない」

「御神体？あの萬屋のサムが黒馬亭で言っていた話と少し違うな。確か、寺の坊主が天窓を閉めるのを忘れて、そのせいで闇馬刀が黒馬島に仇をなしたと言っていた。その時、御神体の炎馬が現れて島を焼き尽くした……待てよ。その炎馬ってまさか？」

海の鬼灯か……ということは、島を焼き尽くしたというのは、闇馬刀のせいではなく……あの紅の灯だったのか。

「さつき、黒馬を見た瞬間、僕にはわかった。あれが邪悪であるわけがない。あの馬こそが、海の鬼灯から黒馬島を守る為に現れた本当の御神体だったんだよ」

まだ、合点がいかない様子のタルクにジャンが言う。

「僕たちも、早く町へ行こう！黒馬島に巣食っていた海の鬼灯が、町の方へ集結したぞ」

ジャンが作った地割れから、おびただしい数の紅の灯が、湧き上がっていた。

紅い葬列……ガルフ島での日食の日、火の玉山に集まった邪悪の灯と同じ。

「俺たちも天の道を通ってゆくのか？」

おっかなびつくり尋ねてくるタルクに、ジャンは笑う。

「僕たちの馬が、あの道を通っても転落するのは目に見えている。だから、急ぐんだ！海の鬼灯とゴットフリーの戦いに、町にいる天喜たちが巻き込まれるぞ」

* * *

突然の揺れに驚いて、黒馬亭を飛び出した天喜は、啞然と空を見上げた。

「空が燃えている……炎が夜空に沸きあがっている」

背筋にぞつと震えがきた。空を占拠している紅は、おぞましい血の色をしていた。そして、その間をぬって炎の馬が空を駆けて来るのだ。

「や、やっぱり、闇馬刀を天窓から出した罰が下ったんだ！天喜、早く逃げるんだ。炎馬の炎が町を焼け尽くすぞ」

おびえた声をあげたサームは、天喜をおいて町と反対の方向に走りだす。

「待って！叔父さん、私も連れてって！」

呼んでもサームに振りかえる余裕はない。

「無駄だよ。天喜、サーム叔父さんに頼ろうなんて」

後ろから聞こえてきた妙に落ちついた声。

「伐折羅……」

「でも、本当にあの炎は、町を焼き尽くしてしまいそうだね」

「早く、逃げましょう。ここにいるのは危ない！」

臆病で怖がり屋の弟は、私が守らなきゃならないんだわ。天喜は

不安ではちきれそうな心を無理やりに勇気づけて、伐折羅の手をとった。だが、

「天喜は逃げて。大丈夫。あいつら、全部始末してやる。黒馬島に手は出させない」

「な、何言ってるの？伐折羅……」

伐折羅の言葉に、天喜は自分の耳を疑った。空を見上げて笑みさえ浮かべている伐折羅は、天喜が知っている弟とはまるで違っていた。

本当に伐折羅なの？

「なるべく、町から離れていて。海岸へ行くといい。暗くても我慢するんだよ。闇が天喜を隠してくれるから」

「闇……嫌よ、闇は私を飲みこもうとしたのよ」

天喜は、そう言った後、はっと空を見上げた。黒い影が舞い降りてくる。

あれは、伐折羅の黒い鳥……

「違うよ。闇は黒馬島を守っているんだ。昔から、ずっと。ただ、あの紅い灯に惑わされてしまった。僕が乗った機関車が暴走したのも、そのせいだったんだよ」

「わからない。伐折羅の言ってる事が全然、わからないわ」

その時、また、大地が激しく揺れ出した。その時、炎馬の後方に現われた黒い塊に町の住民たちが悲鳴を上げた。

「道だ！黒馬島の大地が長く伸びて……しかも、炎馬を追いかけてる！」

炎馬の炎はついに町を焦がし始めた。燃え上がる家々の屋根が空の紅い灯と溶け合って、町は紅一色に染まってゆく。

「あいつらを奈落の底までおとしてやるんだ。地獄よりもっと深く
て暗い場所に突き落して」

伐折羅の声に呼応するように、黒い鳥が大きく羽を膨らませた。
伐折羅の黒い鳥……機関車が暴走した時に闇をからめとって現われ
た、あの巨大な鳥。

伐折羅が黒い鳥に飛び乗るのを、天喜は呆然と眺めていたが、
「天喜、早く逃げろ！海岸だ。後で必ず迎えにゆくから」

その声には逆らう事ができなかった。半ば追いたてられるように
天喜は駆け出した。

20・燃える島(2)

海岸へ……海岸へ。暗くても私はおびえない。闇が守ってくれる
……でも、伐折羅は……。

駆けながら、見上げた空には、炎馬を追う黒い大地が天の道を作りあげていた。天喜はその先端に黒い馬を見つけた時、我慢していた涙がどつとあふれだしてきた。

ゴットフリー！黒馬に乗っているのは……彼だ。

あの人がいれば……きつと免れる……この邪悪な紅の炎から……私もそして、伐折羅も！

海岸までの道には明かりは一つも無い。天喜は聞こえてくる波の音と勘だけをたよりに走り続けていた。

波の音が一際高くなった時、

蒼い光が見える……

岩場に薄く輝く光を天喜は、目をこらして見つめた。すると、人のような形がおぼろげに浮かんできたのだ。

「誰かそこにいるの？」

突然、かけられた声に蒼い影は驚いたように振り返った。

「それは、こちらが言いたい台詞です。こんな暗い中で一体何を……」

近づいてくる影の輪郭がはっきりと現われた時、天喜ははっと息を呑んだ。緑の髪が海風に揺れていた。顔色はひどく青白いが、そ

れは端正な顔立ちを更にひきたてているように思えた。

B W……レインボーヘブンの紺碧の海。

「ああ、あの紅の灯におびえて、海岸までやってきたんですね。それにしても……」

B Wは、天喜の頬にそつと手を伸ばすと、おやと表情を変えた。

「お嬢さん、美しいお嬢さん……こんなところであなたに会えるなんて、思いもしませんでした。レインボーヘブンの欠片……空……けれども、おかしいですね。あなたは完全な人間で、しかも蒼天の輝きしか持ち合わせていない」

「レインボーヘブンの空？レインボーヘブンってあの伝説の島の？」

「そう。蒼天の輝きと星夜の深遠さを兼ね持った、この世で一番美しい空です」

「レインボーヘブンの話は、お母さんからよく聞かされたわ。その島は500年も前に海に沈んだって。でも、虹の向こうに、必ずその島は蘇ると」

そういえば、タルクとジャンもレインボーヘブンの話をよくしていた。何で彼らまで伝説の島の話をしてるんだらうと、私は不思議に思っていた……。

「虹の向こう！あなたのお母さんが、その虹を見たのですか？」

「お母さんはいつも、空を指差して……いつか至福の島に私たちを連れていってくれるって。でも、私と伐折羅には何も見えなくて。

私は御伽話だと思って、半分も本気にしていなかった」

「あなたにお父さんは……いるんですよね？」

「西の山で死んだわ……でも、何でそんな事を聞くの？」

「……いや、ちょっと気になって。でも、もう一つ聞かせて下さい？伐折羅っていうのは、誰なんです？」

「伐折羅は私の双子の弟よ……」

そう言ったとたん、天喜の目から大粒の涙が流れ出した。

「私の弟が、黒い鳥に乗って行ってしまったの。あの紅の灯を始末するって……あの子を助けて！そんな事、伐折羅にできるはずがないのに」

見も知らずのBWに、何故、こんな事を言ってしまうのだろうか。

だが、BWの瞳には、優しさと共に計り知れない力を感じた。天喜は、彼に懇願せずにはいられなかったのだ。

そんな事もあるものなのか。

BWは不思議な面持ちで再び天喜の顔に目をやった。

この娘は、レインボーヘブンの欠片……空……と人間の間に生まれた子供なんだ。

「お嬢さん、あなたの名前は？」

「天喜」

「天喜、そして、弟が伐折羅……。多分、その名はあなたのお母さんがつけたものです。レインボーヘブンの蒼天の喜びと……深遠なる夜を守る夜叉王……。あなたたちは、二人で一つなのです。空に昼と夜の二つの顔があるように、天喜と伐折羅はレインボーヘブンの空の血を二つに分けて引き継いでいる。ただ……」

この娘は確かに、人間だ。多分、伐折羅もそう。それにしても、天喜と伐折羅の母……。レインボーヘブンの欠片、空……は一体、何処へ行ってしまったのだろうか？

その時、爆音のような大音響が海鳴りの音を打ち消した。海岸の

闇でさえも、一瞬、紅く染まり、町の上空から夜の色は消えうせていた。

「怖い。あの紅の灯はまるで黒馬島を憎んでいるよう」

BWは、紅の光におびえる天喜を包みこむように、その肩を抱いた。
「あの紅の灯……海の鬼灯は人の怖れや憎しみを吸い取って大きくなってゆくのです。だから、怯えないで。強い心を持つ者にあの灯は打ち勝つ術を知らない」

* * *

「何なんだ？この馬は、ちつとも速く走らないじゃないか！サラブレッドまがいはどこへいつちまったんだ」

「仕方ないよ。二人も乗せているんだから。おまけに一人は大入道のタルクだろ」

ジャンはタルクの背につかまり、苦い笑いをもらした。それにしても……霧花の奴、

あいつが心配でたまらないってか？！僕たちをおいて、ゴットフリーについていったな。

「とにかく急ごう！町が燃え尽きる前になんとか火をとめるんだ」

「ミッシェはどうした？」

「ザールの面倒を見させてる。相当、イカレちまってたから」

タルクはザールの名を聞いてあからさまに嫌な顔をした。畜生！と口の中でつぶやくと、当り散らすように馬の腹に蹴りを入れる。

「あんな奴、放つとけばいいのに！」

「そうもいかないだろ。奴にはまだ、聞きたい事が山ほどあるんだ」

空の紅はますます濃さを増してゆく。空からこぼれ落ちた海の鬼

灯は炎となつて町を焦がす。ジャンとタルクが町にたどり着いた時には、居住地の半分がすでに炎の海と化していた。

なす術もなく、ただ、逃げ惑う住民たち。

「ジャン、このままだと、町は燃え尽きてしまふぞ！」

タルクの言葉にジャンは絶句する。

だが、その時、

「この火災にまぎれて、金目の物を集めてしまおうぜ」
燃える家々の影に黒い影が見える。30人ほどだろうか。おびえる様子もなくせつせと動き回っている。

誰だ？こいつら……。

ジャンが、気をそちらへ向けた時、

急に辺りが暗くなった。そして、男たちがいる一角だけが闇に覆われた。

そして、闇の中から聞こえてきた隣と響き渡る声、

「西の山の盗賊……町の人の財産に手をつけるのは、掟破りじゃなかったのか？」

ぎよっと、呼ばれた男たちは声の方向に目をむけた。

少年が一人、闇の中に立っていた。夜が化身したかと思うほどの漆黒の髪と瞳。だが、その瞳は静かながらも、背筋をぞくりとさせる光を帯びている。

「お前、伐折羅……たしかお頭の双子の子供の片割れだな」

盗賊の一人が言った。

「そつだよ。お前が殺したばくの父は、西の盗賊の頭だった」

伐折羅？あれは伐折羅なのか？！

タルクは信じられない眼差しで彼を見た。タルクの知っている伐折羅は、儚げでいつも怯えている、天喜の後ろが定位置のような少年なのに……。

21・燃える島(3)

「僕が知らないとしても、思っていたの？僕は……本当の伐折羅はね、いつもお前たちを闇の中から眺めていたんだ」

伐折羅の背後の闇がゆらりと揺れた時、盗賊たちはごくりと生唾呑みこんだ。……てつきり、闇だと思いこんでいた黒い霧。だが、それは、巨大な黒い鳥だったのだ。

「お、俺たちは口が裂けても家族には言うなといわれていた。だから、黙ってやってたんだ。だが、ザールの奴がしゃしゃり出てきて……」

「ふん。何を今更。ザールにそそのかされて、お前たちは父さんに手をかけた。大方、そのうちザールも始末して、黒馬島で好き勝手をしようと思っていたんだろ」

伐折羅の後ろで黒い鳥が大きく翼を広げた。盗賊たちは、びくりと後ろにあとずさった。

「か、頭……お、お前の父親が悪いんだ。古より西の盗賊は黒馬島を守りながら生きてきた……そんな掟を頑なに守り続けて……時代遅れなんだよ！盗賊は盗賊だ！自分たちがよけりゃ、それでいい。だから、殺してやったんだ！それに、どだい、無理な話だったんだ。時には人を殺すのも厭わない盗賊の頭が、それを隠して普通の家庭を持つとうだなんて」

「父さんは、母さんを……僕たちを本当に愛してくれていた。人殺しも盗みも黒馬島を守るためにやっていた。だから、僕も殻をかぶって何も知らないもう一人の伐折羅の中にいたのに……」

あまりの伐折羅の変わりように、タルクはたまりかね、ジャンの腕を強く引っ張った。

「あいつは本当に伐折羅なのか？それに、伐折羅と天喜の父親が西の盗賊の頭？」

「父親の事は知らなかったが……あれは……あの伐折羅は夜叉王だ。成熟した夜は時にああいう者を生み出すんだ。七億の夜叉……闇の戦士をひきつれた夜の守り手を」

「夜の守り手？それって何だ……」

「ゴットフリーの黒馬と同じく、己の島を守るために現われた、まあ、軍神みたいな物だよ。多分、海の鬼灯の出現が彼を呼び起こしたんだ」

そして、それよりも強くゴットフリーに引き寄せられて……。

「海の鬼灯と戦うために、夜叉王は現れたわけか？なら、あの黒馬と同じじゃないか。伐折羅がゴットフリーになつた理由が今、わかったよ。なら、夜叉王……伐折羅は俺たちの味方なんだな」

だが、タルクの言葉に、ジャンは首を縦には振らなかった。

「黒馬は正当な島の御神体だが、夜叉王は流血と殺戮を好んでやる。黒馬島を守るといふ目的は同じでも、黒馬と夜叉王は、その性質がかけ離れて違う」

だからか……ジャンはようやく合点がいった。レストランで蝙蝠を狩った、ゴットフリーの無慈悲な奇行は、もともと闇の王の資質を持ったゴットフリーが、夜叉王、伐折羅に触発されての事か。

「海の鬼灯も夜叉王も根本は破壊者だ。ただ、守りたいか守りたくないか……夜叉王と僕らの繋がりを探すとしたら、それは、島と住民を守りたいというその一点だけなんだよ」

西の盗賊はそれぞれに武器をかまえ、伐折羅をかこみながら襲いかかる期を伺っている。しかし、伐折羅は黒い鳥にもたれ、笑みさえ浮かべながら彼らを涼しげな目で眺めている。

「いや、それは違うと思うぞ
タルクが言った。」

「伐折羅と俺たちの共通点は島を守りたい事だけじゃない……いや、それどころか、海の鬼灯にも、レインボーヘブンの女神アイアリスにも、すべてに通ずる共通点がまだ、あるんだ」

「……」

「俺たちは、すべてゴットフリーに魅かれている。そして、自分たちの王にすべく、彼を求めている。俺はわからなくなってきたよ。闇の王、夜叉王、レインボーヘブンの王……ゴットフリーの本性は一体、どれなんだ？」

ジャンが口を開こうとした、その時、

「伐折羅！お前も死んで父親の所へ行ってしまったえっ！！」
西の盗賊たちが、一斉に伐折羅に襲いかかった。

それは、一瞬の攻防

盗賊の先頭を切った男の首が、ころんと地面に転がっていった。

「馬鹿をやっていないで、僕の言うことを聞いてよ」
闇の中で、伐折羅は透き通るような笑顔を見せた。

闇が、男を瞬殺した！？盗賊たちはわけのわからぬ奇声を発して、後ずさった。

「死にたくはないんだろう？このままでは、今燃えている火は町全体に広がってしまう。だから、お前たちは破壊するんだ。この一角の家々をすべて！」

「ま、町を壊すって……な、何で？お前は町を守りたいんじゃない、不可思議な伐折羅の言葉に盗賊たちは動揺していた。」

「本当に頭が悪い連中だな。数珠つなぎの家々をそのままにして置

いたら、火は燃え広がるばかりだろ？だから、壊せ！粉々に。燃える材料がなくなれば、炎は消える」

まだ、動き出さない盗賊たちに伐折羅がいらつき始めた時、

「伐折羅のいう通りだ。ただし、壊すのは今、燃えている家だけだ。住民がいたら、逃がしてやれ。そして、まかりまちがっても無事な家に手をかけたり、盗みを働いたりするんじゃないっ！」

目の前に現れた巨漢に、盗賊たちはぎよつと目をみはる。

「わかったら、さっさと行けっ！！」

タルクの大声に度肝を抜かれて、盗賊たちは大慌てで作業をし始めた。

「そつだ、破壊しろ！この一角が燃えてしまっても、黒馬島は守られる。だから、遠慮なんかいらない。壊して、壊して、壊しまくれ」

伐折羅は、すうつと夜の空気を吸い込んだ。きな臭いこげた香が胸いっぱい広がってくる。甘美だった。だが、心は半分も満たされてはいない……だって、黒馬島の空にはびこる、海の鬼灯をまだ、始末していない。

「ジャン！タルクの後にいるんだろ？」

黒い鳥に飛び乗りながら、伐折羅はジャンを呼んだ。

「伐折羅……お前」

「海の鬼灯は僕が片付ける。知ってるよ。ジャンはあれに手が出せないんだろ？それで、よく、あの人と一緒に旅ができるね」

「……」

「ジャンはゴットフリーにはふさわしくないよ。だって、あの人は闇を支配できるだけの技量がある。黒馬が彼を背にのせたのを見ただろう？御神体が認めたって事は黒馬島を統べる者である証なんだ。この島は僕が率いる戦士たち……闇によって守られている。ゴットフリーから離れてくれ。これからは、僕が彼のそばにいる。ゴ

ツトフリーと僕でこの黒馬島を守ってゆく」

「勝手な事を言うな！御神体が認めたからって、ゴットフリーが黒馬島を統べる必要が何処にある？彼はレインボーヘブンの王になる男だ。そのために、僕は……僕らは虹の道標を追っているんだ」

「レインボーヘブン……お母さんがいつも話してくれた至福の島か。だが、ゴットフリーがその王だなどと、決めたのは誰だ！」

ジャンは、言葉を失った。

それを決めたのは……アイアリス……レインボーヘブンの女神だ。黒馬島の御神体がゴットフリーを認めた事とそれは、寸分の違いもない。

「ほら、見てみる。答えられない。ジャンは普通の人間じゃないな。お前と海の会話を聞いていたぞ。レインボーヘブンの欠片……あの島が海に沈んだ時にはばらに飛び散ったという、その欠片の一つなんだろう？お前だって、海の鬼灯と変わらない……ゴットフリーを無理に引き込もうとしているバケモノみたいなものじゃないか」

「それは、違うぞ……！」

その野太い声が響いてきた時、伐折羅の勝ち誇った表情が一瞬、崩れた。

「ゴットフリーは、隊長は……レインボーヘブンを探しているんだ。ガルフ島に残してきた人々を至福の島に導く為に！レインボーヘブンの王だかなんかは知らんが、彼が一番、求めているのは、闇の王でも黒馬島の統治者でもなく、平和な島、至福の島、レインボーヘブンなんだ！」

ちよつと、政治家の選挙演説みたくなってしまったと、タルクは苦い笑いをもらす。その様子を見て、ジャンは破顔した。

「そつだ。運命を決めたのは守護神アイアリスだが、レインボーヘ

ブンへの虹の道標はゴットフリーの意思で示された。僕ら……レインボーヘブンの欠片たちが、彼を招いたわけじゃない。至福の島を探すため、ゴットフリーに、僕らが率いられているんだ」

ちっ、と舌をならすと、伐折羅は黒い鳥を空に飛立たせた。

「好きに言ってる。これから、僕はゴットフリーの元にゆく。安心して、海の鬼灯は僕と彼とで封殺してやるから。ゴットフリーは必ず、僕を選ぶ。役に立たないジャンは、そこでゆっくり見物でもしていなよ」

黒馬島の上空はますます赤みを帯びていった。見上げると、ジャンの作り出した天の道は、まだ先端を伸ばし続けている。空一杯に広がった海の鬼灯は、燃え盛る炎馬が駆けるほどにその数を増している。そして、その後ろを追う黒馬。更に後方には伐折羅の黒い鳥、黒馬の背にゴットフリーの姿を觀止めた時、ジャンは泣きたいような気分になった。

僕はゴットフリーに何もしてやれない……

だが、ジャンの横に立つタルクは、力強い口調でこう言った。

「選ぶも選ばないも、ゴットフリーには、ジャン、お前が必要だと思っよ。隊長が闇の王になりかけた時、お前はその声を聞いたんだろっ？」

ジャンは、タルクの言葉にはっと表情を変える。

「ゴットフリーは、僕を……、僕を探していたんだ。たしか、そう……あの声は、こっう聞こえた」

……ジャン、お前、何処にいる？

「ジャン、お前、何処にいる？」

タルクは、破顔すると、ジャンの肩をほんとたたいた。

「ほら、見る。最悪の場面で、ゴットフリーが思い出したのは、伐折羅でも海の鬼灯でも……俺でもなく……ジャン、お前だったんだよ！」

22・決戦（1）

黒馬島の焼けた空。町の中心を下にした時、炎馬は熱風の中で嘶いた。その雷のような声に共鳴し、空中にちらばった紅の灯は、なお激しく火の粉を町にふりそそぐ。

歩を止め、追ってくるゴットフリーの黒馬を威嚇するように見下ろす炎馬。だが、黒馬はひるむ様子もなく、堂々と恨みの炎を燃え滾らせた炎馬の瞳に対峙した。

「残念だったな。俺はお前たちの恨み事を聞いてやる気は更々ないんだ。俺を王と呼びたいなら、その腐った根性をたたき直してから出直してこい！」

その言葉に逆上したかのように、炎馬が嘶いた。その刹那、周りの海の鬼灯たちが黒馬めがけて攻撃をしかけてきた。

ゴットフリーの脳裏に以前、ガルフ島で海の鬼灯と戦った記憶が蘇る。かまいたちの刃のように、あの紅の灯は人を切り刻むのだ。だが、不思議と紅の灯は彼に近づく事ができない。何かゴットフリーの周りに壁を作り出していた。

私の風が炎馬と海の鬼灯を捕らえている。だから、あなたはあれを消し去って！

耳元に響く風の声。

「誰だ?! お前の声は前にも聞いた事がある」

私は夜の風。

レインボーヘブンの欠片の一つか。と頷き、ゴットフリーは黒馬

の背から天の道に降り立った。

「夜の風……か。だが、他にも名前があるのだろうか？」

ゴットフリーの横で黒馬の姿が薄れだした。それと入れ替わるかのように、彼が手前に差し出した右手の中が眩く輝きだす。

闇馬刀。その刀身が完全に形をなした時、黒馬の姿はかき消すように見えなくなった。

霧花。私はあなたの僕。^{しもべ} 全霊をかけてあなたに仕える覚悟はできている。

手にした闇馬刀を、一太刀振るうと、ゴットフリーはにやりと笑った。瞬間、刃の軌道にあった海の鬼灯がばらばらと落下する。

「僕になどなつて欲しくもないが、炎馬だけは逃がすなよ！」

ゴットフリーは、目前に真一文字に闇馬刀を構えた。黒い刀身の向こうには闇の世界が広がっている。

灰色の瞳には闇馬刀の中の一本の道が映し出されていた。

この道をあの黒馬は駆けてくるのだ。闇の世界と現世を結ぶ、暗黒の道を。

海の鬼灯……お前たちが、この世に心留まるつもりならば、俺がこの剣で暗黒の扉を開くまでだ！

「シャドークロス！闇の扉！！」

ゴットフリーは、叫び、闇馬刀で空に大きく十字をきった。その瞬間、爆音のような激しい唸りが、空の切り口から吹き出してきた。「闇には闇の場所がある。帰れ！お前たちが癒されるただ一つの棲家へ！」

唸りは海の鬼灯を吸い取ると、有無を言わせぬ力で、開かれた闇の扉へ引きずりこむ。だが、紅の炎は激しく燃えあがりながら、更に数を増してゆく。

抗おうとする力と、制しようとする力。黒馬島の上空は爆風の渦を巻きながら、怒涛の嵐を生み出していった。

ゴットフリー、駄目。この嵐に私の風が耐えきれない！

霧花が叫んだ。

「海の鬼灯は、俺にまかせろ。お前は炎馬だけを留めておけ！」

そんな事はできない。あなたの周りに集まった紅の灯が見えないの？風の壁を退けてしまったら、あれは一斉に襲いかかってくる。

もう、空には空と呼べる色は少しも残ってはいなかった。びつしりと敷き詰められた紅の渦。闇馬刀につけられた空の裂け目に吸取られても、尚、その数は減る様子を見せようとはしない。

だが、風の壁が崩されるのはもう、時間の問題だった。力が尽きた時、霧花は悲鳴のような叫びをあげた。

紅の渦が葬列をなし、ゴットフリーの方向へ降下してくる。

これ以上、闇の扉を広げれば、黒馬島自体をも吸取ってしまうかもしれないが……。

闇馬刀の威力はゴットフリーでさえも、予想がつかない。

まがりなりにも黒馬島の神剣と呼ばれた剣だ。無差別に出会った者を闇に引きずり込むとは思えない。

「闇馬刀、俺はお前の力を信じる！」

黒剣の刀身が、ゴットフリーの叫びに呼応するかのようにぎらりと輝いた。海の鬼灯が放つ邪気が熱風となって押し寄せてくる。ゴットフリーは、中段の構えから大きく闇馬刀を頭上に振りかぶった。もう、後戻りはできない。

だが、不意に闇馬刀の上から黒い影がおちてきたのだ。一瞬、そちらの方向へ気をそらし、ゴットフリーは軽く眉をしかめた。

「伐折羅」

巨大な黒い鳥に乗った夜叉王。その背後は漆黒の闇に包まれている。

七億の夜叉……闇の戦士を引き連れて。

「こんな無粋な邪気を神剣で相手する値打ちなんてないよ。黒剣の闇馬刀……そんな物があつたなんて驚いたな。僕が知っている闇馬刀は白銀色で、天窓に奉られているやつだからね……こいつらは僕にまかせて。二度と這い上がれない奈落の底までつきおとしてやる」

伐折羅は、澄み切った湖底の瞳で、そう言った。すでに闇の戦士たちは海の鬼灯を取り込み始めていた。空一面を覆いつくしていた紅が、地平に近い部分から徐々に闇に飲みこまれてゆく。

霧花の風の壁から開放された炎馬は、闇の戦士に対抗するように、激しく嘶いた。すると、炎の体から新たな海の鬼灯が生まれだされた。

「炎馬を逃がすな！あれをしとめない事には、この戦いは終わらない」

ゴットフリーは伐折羅の黒い鳥に目をやると、強い口調で言った。

「来い！俺を乗せてあの馬のところへ連れて行け」

「待って！この鳥は僕しか乗せない」

だが、伐折羅の言葉が終わらぬうちに、黒い鳥はゴットフリーの元へ降りていった。当然のように黒い鳥に飛び乗るゴットフリーの姿に伐折羅は驚きを隠せない。

天喜にすらなつかなかったこの鳥が、こんなにも簡単に……

「伐折羅、お前は降りるか？それとも、俺についてくるのか」

伐折羅は、ゴットフリーの背につかまると、迷いのない声で言った。

「ゴットフリー、そんな質問こそ不粋だよ。僕はあなたとならば、地獄の底でも厭わない」

ゴットフリーと伐折羅を乗せた黒い鳥。駆けてゆく炎馬を、黒い鳥が追いかける。漆黒と紅のまだら模様の中を、二つの風が駆け抜けていった。

* * *

海岸で、天喜は啞然と空を見上げた。

燃える空を闇が飲み込もうとしている。断末魔の叫びのように吹き上げられる海の鬼灯の炎が、町を焦がしてゆく。

「何とか火を止めないと、町どころか、黒馬島全部が燃え尽きてしまっわ」

天喜をささえている胸から、すがりつくような視線を送られて、BWはしばし言葉を失った。だが、やがて、意を決したようにこう言った。

「この火を消せばいいのですか」

「……でも、どうやって？こんなに広がった火の手をどうやって止めるというの」

「黒馬島のまわりの波を高くあげれば、あるいは消せるかもしれない」

せん」

「波を？そんな事ができるのは神様しかないわ」

天喜の言葉にBWは思わず笑みをこぼした。

「神様ほど酷な真似はしませんよ。私はレインボーヘブンとガルフ島で2度も沢山の命を飲み込んでしまった。最初は女神アイアリスの意のままに、二度目は海の鬼灯に踊らされて。だから、黒馬島では、そんな失敗は決してしない」

抱き寄せた天喜の体をそつと離すと、BWは空を見上げた。

「霧花、夜の風、そこにいるのでしょうか」

返事はなかった。

「……海の鬼灯との戦いで、疲れ果ててしまいましたか。でも、もう少し力を貸してください」

力……？私に何をしろというの？

「黒馬島のまわりの波。それを風で町に運ぶだけです」

……

「運んだ後の事は、あなたに任せていいですか？わたしだと、また、黒馬島を海の底に沈めかねませんから」

わかったわ。海の水を、町に降らせばいいのね。

風がびゅーと、通り過ぎていった。天喜は、その瞬間、あつと声をあげた。

「これは、あの時……黒馬亭で窓ガラスをたたき割った、あの風だわ」

天喜の言葉にBWは意外な顔をする。

「窓ガラスを割ったって？あの霧花が」

「そうよ、ジャンと話をしている、すごく怒っていたの」

BWはくすと笑いをもらした。

「それは、ゴットフリーがらみでしょう。多少、理性を失った行動に出ても仕方ない。彼女はゴットフリーの命令ならば、この世の果てでも飛んでゆきますよ」

「ゴットフリー！あなたは、ゴットフリーを知っているの？」

だが、無言でBWは、波際へ歩き出した。

「待つて。私にもう少し話を聞かせて！」

BWの後姿を追いかけてしようとした天喜は、はっと表情を変えた。

波音？うつん……歌が聞こえる……美しく、優しい小波のような声。これは、この緑の髪の人が歌っているの？

やがて、BWの体から蒼い光がほとぼり出した。柔らかなその光に触れた時、天喜は心の不安が幾分か軽くなったような気がした。

「天喜、会えて良かった。ここで力を使ったら、私の姿はまた見えなくなってしまう。ですから、ここでとりあえずお別れを言っておきますよ」

その瞬間、海岸の波が高く舞いあがった。BWはその中に躊躇もしないで、歩いてゆく。

「待つて！私を置いてゆかないで！」

大津波のように盛りあがった海面に驚き、天喜は足がすくんで一歩も動けなかった。だが、BWの力に制御された波は、決して海岸の天喜の方へ進もうとはしなかった。

「お願い、せめて名前を聞かせて！」

その姿はすでに見えなくなっていた。だが、天喜の耳に響いてきた波の音は、ささやくように、こう言った。

BW、私はレインボーヘブンの紺碧の海。また、会いましょう。
天喜……蒼天の輝きをもつ空の落し子

23・決戦(2)

「燃えている家からの延焼は何とかいとめたが……」

顔を煤で真っ黒に染めて、タルクは空を仰ぎ見た。タルクとジャンに先導されて、燃える家々を壊し続けた盗賊たちは、疲れ果てて、死んだように地面につつぶしている。

「大変だ！ジャン、炎馬が移動し始めた。また、炎を吹き上げて、今度は黒馬亭の方向を焼き尽くすぞ」

「何だって！！」

風の壁の呪縛がとけてしまったのか？そういえば、さっきまで強く感じていた霧花の気配がどこにもない。

霧花……まさか、海の鬼灯に……

「大変だ！そ、空が燃え出したぞ。何なんだ？あの黒と紅の巨大な渦は？！」

爆発音とともに、空から火の粉が降ってきた。たまりかねて盗賊たちは蜘蛛の子をちらすように逃げてゆく。

「ジャン、黒馬亭に行くぞ！天喜を探すんだ！」

血相かえて、走り出すタルクの後をジャンが追う。

その行く手にも火の手が広がり出した。燃えながら家の柱や屋根が落ちてくる。その残骸を手で払いのけながら、パニックに陥った人々の間を掻い潜ぐって進むのは、ジャンでさえ困難を極めた。

ちょうど、屋根が焼け落ちた商店の横にさしかかった時だった。

「……助けて、助けてくれ……」

聞き覚えのあるしゃがれた声。

「タルク、待って！誰かが生埋めになってるぞ……この声、サーム

か!？」

倒れてきた柱の下から、煤だらけの手がジャンに助けを求めている。

「サーム?まさか、天喜も一緒か!？」

ぎよつと、目を見開いてタルクが駆け寄ってくる。こともなげに片手で柱をもちあげると、ジャンは下に埋まっていたサームを、外へ引きずりだした。

「サーム、天喜はどこだっ?!」

「し、知らない……それより、み、水をくれ」

派手に柱の下敷きになっていた割には、怪我といった怪我はしていないようだった。だが、町の別の場所からは新たな炎が舞い上がっていた。

「ここにいては、危ない!とにかく、逃げるんだ。タルク、サームと町の人々を海岸へつれてゆくぞ!」

「海岸へ?」

「もう、町の事はあきらめろ。とにかく、命の方が大切だ。だが……」

燃え上がる炎の中で、人々は狂ったように叫び声をあげている。

逃げ場を失い、半ば放心状態で立ちすくむ者、泣きながら手を引かれる子供。こんなパニックの中で、みんなを海岸へ誘導することができるのだろうか。

「黒馬がこの島に仇をなしたんだ……だから、あの神剣を天窓から出すなとわしは言っただろう……」

うつろに空を見上げるサームの言葉にタルクは、思わず声を荒げて言った。

「まだ、わからんのか!黒馬島を焼け尽くそうとしているのは、黒馬ではなく、あの紅の灯がという事が!」

そんなお前たちの、間違った迷信が海の鬼灯につけこまれたんだ。「黒馬はこの島を守ろうとしてくれてるんだぞ。島民から信じてもらえない御神体なんて、可哀想すぎるじゃないか!」

その時だった。ジャンがはっと空を見上げた。

風？いや、もっと湿気を含んだ大きな流れがやってくる。

「雨だ！タルクっ、雨が降ってるくぞー！」

叫んだとたん、大粒の雨が上空から落ちてきた。横殴りに降りしきり、燃える町を冷やしてゆく。それらは見る見るうちに、炎を打ち消し、上空に巢食っている海の鬼灯を地表に叩きつけた。

「有難い！これで町の火が消える」

タルクは雄叫びのような声をあげ、万遍の笑みを浮かべた。けれども、ずぶぬれになった顔を手でぬぐった時、何ともいえない奇妙な表情で眉をつりあげた。

「この雨……塩辛いぞ……」

「塩辛い？海の水……そうか、BW……きつと、奴の仕業だ」

「BW？あの青二才か？何であいつの名前がでるんだ？」

胡散臭そうに尋ねてくるタルクの顔を見て、ジャンは笑みをもらした。

そうだった。タルクはBWがレインボーヘブンの欠片である事を知らないんだ。

「いや、何でもないよ」

「お前っ、まだ、俺に何か隠してるなっ！」

そうこうしているうちに、雨足は徐々に静かになってきた。町に広がっていた炎のほとんどは、海の鬼灯とともに、姿がみえなくなっていた。町の人々は、ようやく平常心をとりとどしたものの、焼け落ちた町の残骸はあまりにも悲惨で、ただ呆然と立ちすくんでいる。

「まだ、火種になる炎が残っているかもしれない。怪我人も大勢いるだろう。タルク、大変だろうが、町の人々を先導して後の処理をやらせてくれ」

何だか、ゴットフリー隊長が言いそうな台詞だなと、タルクは笑った。

「まかせてくれ。ガルフ島でこういう状況は経験済みだ。こっちは、町の中心が焼けたただけだろ。それに比べりゃ、まだましだ」

「そうか、なら、僕は行くから」

「……行くって……何処に？」

聞きながら、タルクにはその答えはわかっていた。

「伐折羅にまかせてはおくわけにはゆかない」

頼んだぞと、タルクが言う前にジャンは、もう走り出していた。

紅の空が見る見るうちに闇に覆い隠されてゆく。だが、空の一角だけは不気味なほどの紅の光を放っている。

あそこに炎馬……海の鬼灯の本体がいる。

ジャンはその光の下をめざして、駆けて行った。

ジャン、待って！私も一緒に……

風の中から響いてくる声。ジャンは、立ち止まりもせず言った。

「霧花か？あの雨は、お前とBWが降らせたんだな。でも、もう無理はするな。力を使い果たしてしまうぞ」

あなたをゴットフリーの所へ連れてゆくわ。あなたは、空を飛べないでしょ。

だが、ジャンは首を横にふった。

「この体から抜け出れば、僕はどこまでも飛んでゆける」

とんでもない事を言わないで！力のもどったあなたは、今の体から離れる事はできない。もし、できたとしても、その体はもう使い

物にならなくなるわ！

「……ほんの短い間なら、大丈夫な気がするんだ。女神アイアリス、あの人の思惑に乗るつもりはないが、その恩恵を受ける権利が僕にはある」

あなたはレインボーヘブンの守護神だ。ゴットフリーを守る為なら、僕に力を貸してくれるな。

ジャンは、紅い灯の方向を確認すると、立ち止まって目を閉じた。そして、心の中で叫び声をあげた。

“アイアリス！僕をもう一度、この体から自由にしてくれ！僕はゴットフリーの元へ行かなきゃならない！”

すると、突然、ジャンの体が白銀に輝き出したのだ。

霧花は、天空に飛びたつていった一筋の光を不安げに見送った。それから、地面に倒れているジャンの体にそっと手を伸ばした。

艶やかな長い黒髪、夜色の瞳。

ジャンからこぼれ落ちたアイアリスの力が、その姿を闇に浮かび上がらせたのだろうか。

アイアリス……私にはわからない。あなたがもっと早く、手をくだしていれば、あの紅の灯はこれほどまでに大きくはならなかった。あなたはジャンに力を貸しながら、同時に海の鬼灯を育てている……これは、私の思い過しなのですか。

美しい顔を心配げに曇らせて、霧花はジャンの体を膝に抱きかかえた。

24・決戦(3)

黒馬島の空は、もう、ほとんどが闇に覆われていた。その中を異様に明るく燃える紅の炎が駆けて行く。

西の山へ。それは、黒馬島にとつての鬼門の地。悪と暴力がはびこる盗賊たちの住処なのだ。だが、彼らが、黒馬島の靄がはれる唯一の場所にいるという事が、外海から来る侵略者たちの入島を悉く失敗に終わらせていた。

“西の盗賊は、島の人々には決して手をつけてはならない”

島以外でどんな殺戮をしても、その掟が守られる限り、彼らは島の守り手だったのだ。だから、島民たちは特に抵抗することもなく、彼らと共存の道を選んでいた。いったい、何時からそんな慣習が続いてきたのだろうか？今の黒馬島に、その歴史を知る者がいるとは思えなかった。

「海の鬼灯……炎の馬！西の山より先はもう黒馬島の圏外だ。有難いな。黒馬島をあきらめて外海へ行ってくれるのか」

炎馬を追いかけて飛ぶ黒い鳥の背で、ゴットフリーは皮肉たっぷりに言った。

炎馬は歩を止めると、自分の斜め下まで追いついてきた黒い鳥を、怒りの籠った眼差しで睨めつける。

「さて、ここらでそろそろ決着をつけようじゃないか。お前の分身たちは先に闇に落ちてしまったようだしな」

ゴットフリーの後で伐折羅が涼しげに笑う。今や黒馬島の上空の光は、炎馬の炎だけになっていた。炎馬とゴットフリーたちの廻りには、彼ら以外に色というものは、何もなかった。ただの闇。奈落の底につながるような暗黒の世界が広がっているだけなのだ。

「あの紅の灯は、もう二度とこちらには戻ってこれないよ。黒馬島を狙う奴は、闇の戦士がすべて奈落の底に連れて行く」

伐折羅の言葉に、ゴットフリーは一瞬、快感を覚えた。だが、その時、彼が手にした闇馬刀が薄く輝き出したのだ。

黒い刀身には暗黒の闇が広がっている。

闇馬刀を真一文字にかまえて、ゴットフリーははっと灰色の瞳を見開いた。

違う……闇馬刀の闇と伐折羅の闇は、まるで違っている。

伐折羅の闇は、底のない落とし穴のようなものだ。入った者は永遠に闇の中を落ちてゆく。だが、闇馬刀の闇には黒馬が通ってきた道がある。たった一本の闇と現世をつなぐ道。

俺にそれを知らせて、一体、どうしろと言うんだ？！

頭に浮かんだ思念を振り払うかのように、ゴットフリーは闇馬刀を炎馬に向ける。

「行けっ！このまま、炎馬の心臓を貫くぞ」

黒い鳥が急上昇を始めた。闇馬刀は炎馬の中心を確実にとらえている。伐折羅はゴットフリーの背にしがみつきながら、胸がすくような歓喜に心を躍らせていた。

体の中心、ちょうど心臓部分を闇馬刀で貫かれた時、炎馬は凄まじい叫び声をあげた。その瞬間、炎馬の体は粉々に弾け飛んだ。

断末魔の悲鳴と共に、正視できないほど強い紅の光が、辺り一面に炸裂する。

一瞬、視力を奪われたゴットフリーは、おぼろげに視界が開けてきた時、愕然と自分の周りを見渡した。

ガルフ島警護隊……そして、ガルフ島の……

火の玉山の噴火と大津波に飲み込まれ死んでいった、ゴットフリーの部下たち、そして島の人々。ゴットフリーと伐折羅を乗せた黒い鳥をぐるりととりまくように、彼らは空に浮かんでいる。

「お前たち……何でここに……」

解っている。これはフェイクだ。彼らの体を取りまく紅い灯……これは、海の鬼灯が見せている幻にすぎない……。

そう思いながらも、ゴットフリーは正面を向く事ができなかった。守れなかった命の一つ一つを思い起こす度に、胸が引き裂かれる思いがする。

「ゴットフリー、どうしたの？」

剣を握る手に少しも力が入っていない。黒い鳥の首筋に顔を隠し、自分から視界をさえぎっている。先程までとがらりと変わったゴットフリーの態度に、伐折羅は首をかしげた。

「うつつとしい、紅い灯。ゴットフリー、僕にまかせてくれていいよ。こいつら全部、闇の戦士の餌食にしてやる」

伐折羅の目には、まわりをとりまいているのは、今までと変わらない紅い灯にすぎなかった。

「闇の戦士！このうつつとしい紅い灯を、全部、奈落へ連れて行け！やりたきや、この場で引き裂いて、食ってしまってもかまわない」伐折羅の声に呼応するように、黒い鳥の下の闇が、激しい勢いで湧き上がってきた。

次々と闇にさらわれて行く紅い灯は、消える間際に悲痛な叫び声をあげた。それは、嫌がおうなしに、ゴットフリーの元に響いてくる。

これはペテンだ。惑わされてはならない！

それでも、聞きなれた声を耳にした時、ゴットフリーは思わず、そちらへ目を向けてしまった。

“ゴットフリー隊長、僕の顔を忘れてしまったのですか？”

唇を噛み締めて、何かをこらえるように、ゴットフリーは体を震わせた。

「ミカゲか……。リリアが狂ってしまった後も、唯一仕えてくれた使用人の……」

“そうです。海の水を嫌というほど飲んで……。苦しさで死への不安を抱えたまま、私の命はガルフ島の海へ消えてしまった”

「だから、……お前は海の鬼灯に……なったのか」

“わからない。でも、僕の魂は、行く場所を探して、まだこの世をさまよっている”

ただの紅い灯……。伐折羅にはそうとしか思えない。だが、ゴットフリーの思いは一心に紅い灯に向けられている。

僕を通り越して……。無視して。

伐折羅は気分が悪くなった。

「うつとしい紅い灯！ゴットフリーを惑わすなっ、お前らには闇の世界がお似合いだよっ！！」

伐折羅が叫んだ途端、闇が大きく膨れ出した。

“嫌だ！闇の中に落ちるのは嫌だ！助けて、ゴットフリー……”

ゴットフリーの目の前でミカゲの姿はみるみるうちに、闇に吸い

込まれていった。そして、ミカゲと同じように海の鬼灯に化身した
ガルフ島の住民たちも、泣き叫び、ゴットフリーに助けを請いなが
ら闇へ消えてゆく。

「消えろ、消えろつ。そして、闇の中で好きなだけ泣き叫ぶがいい
！そこは永遠にお前たちの住処なのだから」

伐折羅の胸をすくような笑い声が、ゴットフリーの心を更に苦し
くさせる。

永遠に帰っては来れない闇……救いのない暗黒の……

もう、空にはたった一欠片の紅い灯だけが残るのみになっていた。
「そろそろ、終焉だね。こいつを消し去れば、僕らの勝利だ」

勝ち誇った表情で、伐折羅はゴットフリーに目をやった。しかし
……彼は愕然と宙を見つめているのだ。

最後の海の鬼灯。それは、最も見たくない姿をゴットフリーの前
に作り出していた。

“ 助けて、ゴットフリー。私の息子……行きたくない。私は、い
つまでもこの世に留まっていたい…… ”

リリア……ガルフ島の島主、そして俺を拾って育ててくれた恩義
ある人……。俺は、俺は……この人を永遠に闇に葬りさる事はでき
ない。それだけはできない！

うめくような声をあげると、ゴットフリーは手にした闇馬刀を高
々と頭上に振上げた。

「ゴットフリー、何をするのっ！！」

焦って止めようとする伐折羅を振り切って、斜めに闇を切裂いた。
その瞬間、伐折羅の闇は飲み込んだ食物を嘔吐するように、紅い灯
を吐き出したのだ。

再び黒馬島の空は紅く染まり出した。逆転の展開を喜ぶように前より一層、色濃く燃えあがる。それと逆にゴットフリーに斬られ、力を失った闇の戦士たちは、次々に姿を消してゆくのだ。

闇馬刀……何て力を持っているんだ。たった一太刀で僕の闇を切れくなんて……

伐折羅は、ただ驚いて、黒光りする闇馬刀を見つめるばかりだった。

「ゴットフリー、あなたも所詮、外海の人間か！黒馬島がどうなっても、かまわないと言ったね」

「伐折羅……俺は……」

「ひどいよ。黒馬島は、父さんが……そして、僕が命をかけて守ってきた大切な島なのに」

伐折羅が流した大粒の涙。夜叉王の内に隠れている元の伐折羅が流しているのか、そこには一片の邪心も感じられない。

黒馬島を見捨てるわけにはゆかない。ならば、海の鬼灯に化身したガルフ島の人々を出口のない闇に閉じ込めるのか？そうしなければ、彼らの魂はこの世を永遠にさまよい歩くぞ。海の鬼灯として、周りの物を取り込みながら、破滅に導きながら……

ゴットフリーは、首をうなだれ、唇を強く噛み締めた。つうつと口元から流れた血が、闇馬刀の表面に苦悶の筋を描き出す。

どうすればいい？俺には、もうなす術がない……。

伐折羅の不審感、ゴットフリーの苦しみ。それらは、海の鬼灯にとって最上級のご馳走だった。闇から開放された海の鬼灯は、我が意を得たりと、また集結をし始めた。

炎馬……、また、俺を闇に誘うか……。いつそのこと、海の鬼灯に変化した人々の魂を引きつれて、闇の王になってしまえと。

空が紅く燃えていた。巨大な炎馬がその中で大きく嘶いた。それは、黒馬島を征した勝者があげる勝どきの声なのか。結末はまだ見えてはこなかった。

25・決戦(4)

ジャンは、紅の灯の間を縫いながらゴットフリーの元へ心を飛ばしていた。今のジャンには実体がない。だが、海の鬼灯ももともとは、同じような精神体なのだ。進路を塞がれ自由に前へ進めないもどかしさに、ジャンは苛立った。

この胸を突き刺す痛み……一体、何が起きている？ 僕は行かないやならないんだ。一刻も早くゴットフリー、彼の元へ！

「ゴットフリー！ 放っておくと、炎馬はまた大きくなる。もう、闇馬刀の力でしかあの馬は止められない」

伐折羅は、ゴットフリーの背中にすがりつき懇願した。

闇の戦士が消え去った今、頼れる者は彼以外にはいない。

「黒馬島を見捨てないで！ あなたはご神体の黒馬が認めた人だ。そんな事、やるはずないよね！」

ゴットフリーは、無言で闇馬刀を見つめていた。もう、何もかもが、どうでも良かった。

何故、どいつもこいつも俺を当てにする？ ガルフ島も黒馬島もレインボーヘブンも、俺一人の力で、どうすればいいというんだ！？

闇馬刀の切先を真っ直ぐに炎馬の中心に向けると、ゴットフリーはすうつと深く息を吸った。

ここで、炎馬を消し去ってしまおう。そして、その切先をそのまま、自分の胸に突き刺せばいい。闇に落ちていくならば、俺もみんなと共に行く。

意を決したように、闇馬刀を強く握り締め、

「海の鬼灯、炎の馬！これで終わりだ。闇馬刀の闇への道を俺の後からついて来い！」

ゴットフリーは、その剣を大きく空に振り上げた。

……が、その時、

“駄目だ、ゴットフリー！お前が率いるべきものは、死んだ魂ではないんだっ！！”

声が聞こえた。

「この声？ジャンか！？お前、また体から抜け出したのか？」

それが、どんなに無謀な事が、自分自身が一番知っているはずだろう？心が抜け出た体は急速に弱ってゆくのではなかったのか。

“そんな事より、炎馬をさっさと片付けてしまえ。だが、共に行くなどと、そんな馬鹿な考えはこの僕が許さない”

「貴様の許しを誰が請うた？海の鬼灯に貶められても、あれはガルフ島の……者たちなんだ。闇の中をさ迷わすわけにはゆかないっ！」

“闇の中へなど、行かせはしない。闇馬刀は人々を闇に誘う剣ではないんだ。だから、ゴットフリー、渾身の力を込めてあの炎の馬を斬ってやれ！”

お前の本質は悪なんかじゃない。僕にはやっと答えが見えてきた。闇と光を同時に導く、二つの世界を渡る者……だから、みんなが救いを求めて、お前のまわりに集まってくる。

“ゴットフリー、自分を信じて、その闇馬刀をもう一度よく見てみる！そうすれば、自ずから、お前の選ぶべき道が見えてくる”

「俺の選ぶ道……」

ゴットフリーの手の中で闇馬刀が薄く輝きだした。その刀身を見据える灰色の瞳には、闇へ続く一本の道が映し出されている。

「刀身の中の一本道は、暗黒へ続くばかりだ。ここに何の救いがあるというんだ」

“それは、お前の心が負に向かっていているからだ。望めば、その剣は希望の道への指針となる。僕の力に触れて、ガルフ島で色をかえた黒剣。レインボーヘブンへの道標を指し示した後、あの剣はどこへ行った？闇馬刀は、形こそ違っているが、お前の愛刀……黒剣と同じ物だ。お前は自分でも知らぬうちにそれを悟っているではないか！”

ジャンがそう言った瞬間、紅い灯がざわと揺れた。そして、巨大化した炎馬が二・三步後ざすりをした。

ぼうつと白く輝きだした闇馬刀の光が、徐々に眩さを増してゆく。ゴットフリーの後で、なす術もなく傍観していた伐折羅が、あつと声をあげた。

剣の色が……変わってゆく！？そんな馬鹿な！

ゴットフリーが握る剣の根本から、閃光が走るように闇馬刀が漆黒から白銀に色を変え出したのだ。

何を驚くことがある？黒馬亭の天窓で、この剣は俺を待っていた。黒馬島の神剣として。それは何を意味している？

ガルフ島だけでなく、この黒馬島の住民まで、俺に託そうというのか。

真っ直ぐに構えた刀身を見据えて、灰色の瞳にその光を映し出す。そして、ゴットフリーは胸がすくような笑いを浮かべた。

白銀の剣の中に一本の道が見えた。それは、闇へと続く道。その消失点は闇馬刀の奥にある。

「だが、剣をはるかに超えて続く道が俺には見える」

闇馬刀を大きく振りかざすと、ゴットフリーは何の迷いもなく、それを炎馬に向けて振り下ろした。

静かすぎる終焉がやってきた。炎馬を作り出していた海の鬼灯は、叫ぶこともなく、白銀の剣を受け入れたのだ。

炎馬から飛び散った紅い光が、剣の光に溶け込むように消えてゆく。そして、ゴットフリーが振るった闇馬刀の切先から白銀の光がほとばしった。

光は闇馬刀を飛び出し、矢のように光の線を空に描き出した。

「それは天に続く道だ。ミカゲ……俺はまだ、そちらには行けない。俺がいなくても、お前は、みんなの魂を光の中へ連れてゆけるな」
かすかにミカゲの姿を垣間見たような気がして、ゴットフリーはぼつりと言った。

やがて、光の走る方向の空が白く輝き出した。

「夜明けだ……」

長い夜が終りを告げた。上り出した朝日にゴットフリーの髪が紅く輝く。伐折羅は、その眩しさに目を細めた。黒馬島にはびこっていた海の鬼灯は、跡形もなく姿を消していた。

海の鬼灯と同じ紅。だが、この紅の深遠な光は闇の世界の物じゃない……。

そう思った瞬間、伐折羅は空にいる事が急に怖くなってきた。なぜなら、

僕の黒い鳥が……

朝日の光を受けた時、伐折羅の黒い鳥までが、白く色を変え出したのだ。

「ゴットフリー、駄目だ。僕はこの鳥には乗れない。これは、僕の鳥じゃない！」

「伐折羅っ、危ないっ！」

ゴットフリーは、驚いて手を伸ばしたが、それを振り払うように伐折羅は鳥から落ちていった。

あの鳥には僕は乗れない……白い鳥。天喜の白い鳥！あの鳥は……僕が乗るには眩しすぎるんだ。

「ジャン、何とかしろっ！伐折羅が落ちたぞ！」

ゴットフリーが叫んでも、ジャンの返事は返ってはこなかった。

「ジャン……？どこへ行った……」

朝日に輝く天喜の白い鳥の上で、ゴットフリーはふと、東の空に目をやった。

俺の選ぶべき道。ジャンは言った。自分を信じれば自ずからその道は見えてくると。

闇馬刀からほとばしった光の道と平行に、七色の虹が空に線を描いてゆく。

それは、架け橋。至福の島、レインボーヘブンへの虹の道標。

* * *

伐折羅はただ、悲しかった。どうあがいても届かない思いに、心を碎かれていた。

手を伸ばせば、触れられる場所にいたのに……けれども、どんなに近づいたとしても、あの人を自分の元に留めて多く事はできない。

このまま、どんどん落ちていってしまえと、伐折羅は半ば自暴自棄になって目を閉じた。

地面にたたきつけられて、死んでしまってもかまわない。黒馬島の黒い大地に深くめりこんで、そのまま眠ってしまいたい。

だが、朝日が昇りきるその前に、伐折羅をささえた者がいたのだ。ふわりとした感触に包みこまれた時、伐折羅の体は宙に浮かんでいた。

「誰？何で僕を助ける！！」

“動かないで。夜が明けきってしまったら、私はあなたをささえる事ができなくなる”

「お前が誰だか知らないけど、助けてもらう筋合いはない。放っておいてくれ！」

“……私もあなたと同じ闇の住民。あなたの思いが私には痛いほど解る”

「闇の住民……？」

“私は、夜の風……レインボーヘブンの欠片の一つ。どんなに焦れても叶わぬ思い……それは闇の住民の宿命。でも、ゴットフリーはあなたが死んだら、きっと嘆き悲しむでしょう。いつか彼はあなたの力が必要になる。ジャンが光の中からゴットフリーをささえる礎ならば、伐折羅、あなたは闇の側から彼を助ける夜叉王なのよ。だから、お願い。強い心を持って。そして、自分を決してあきらめないで”

伐折羅の体が、黒馬島の上に降り立った時、夜の風の気配は掻き消されたようにいなくなっていた。

天喜の白い鳥が朝日の中を飛んで行く。伐折羅はほろ苦い思いで、遠ざかってゆく白い鳥を目で追った。久々に見る朝日は、伐折羅には眩しすぎた。静かな湖底の漆黒の瞳、そこから溢れ出す涙を伐折羅は止める事ができなかった。

26・決戦(5)

焼け焦げた町にも、希望は残った。町の中心は燃え尽きたものの、他の地域への飛び火はまぬがれた。

呆然とたち尽くしていた人々も、昇る朝日に励まされるように、町の修復に動き出した。

「俺は、人間というものは強いものだ、つくづく思ったよ」

ジャンの服の砂をはたきながら、タルクは言った。

絶大な指導力を発揮して、島の人々をまとめあげた後、タルクは町外れに倒れていたジャンを見つけたのだ。

「ガルフ島の時だって、みんなそうだったじゃないか。希望さえ失わなければ、どんな状況だって人は立ち上がれると言う事だよ」

派手に倒れていたわりには、今はけろりとした顔でタルクの横で笑っている。特に怪我もしていない様子のジャンを見て、タルクはほっと安堵の表情を浮かべた。

「……で、ゴットフリー隊長……いや、ゴットフリーは無事なのか？あの紅い灯が消えうせたという事は、海の鬼灯に勝ったんだな？」タルクの言葉にジャンは少し首をかしげてみせる。

「うーん、勝ったというより、導いた……という感じがなあ」

「言ってる事がよくわからんぞ。とにかく、無事なんだな？ゴットフリーに、俺はまた、会えるんだな」

「会えるよ。ほら、もうそこに来ている」

ジャンが指差した空の方向に目をやり、タルクは思わず苦笑した。「ワンダーランドの最後の動物か？あれは……」

白い天女が地上に降臨するかのようにゆるやかに……タルクとジャンの方向へ、巨大な白い鳥が舞い降りてくる。

朝日を後ろから受けた、その背には、ゴットフリーの姿があった。

「ゴットフリー……！」

我慢できず駆けよって、ゴットフリーを大きな体に抱きしめる。

タルクの突拍子もない行動にジャンでさえも目を丸くした。

「な、何だ？いきなり……やめろっ、息ができない」

どう反応してよいか、解らぬ様子でゴットフリーはされるがままになっている。

「あ……す、すみません。いや、すまない。あんまり嬉しくて、つい我を忘れてしまった」

はっと、気付いて、大慌てで手を離すと、タルクは気まずそうに笑った。ゴットフリーは、それには知らぬふりを決めこんで、ジャンに言った。

「伐折羅が下に落ちたんだが、何処にも姿がないんだ」

「伐折羅が？……ああ、だから、霧花がいなくなったのか。大丈夫。多分、霧花が伐折羅を助けてる」

「霧花……あの、夜の風か？」

「お前、霧花に会ったんだな。そうか、夜の風……あれも、レインボーヘブンの欠片の一つだ」

そして……お前が探していた水蓮は、彼女だったんだ……。

その時だった。

「ジャン、タルクっ……」

「天喜……！」

海岸の方向から、駆けってくる少女。

「良かった。無事だったんだな」

タルクは、先程の事もあってか、多少控えめに天喜を迎えた。

「伐折羅は？黒馬亭は……大丈夫なの？」

「黒馬亭は、無事だ。伐折羅も大丈夫だよ。黒馬亭で待っていてくれと言っていた」

ジャンの言葉にタルクは眉をしかめたが、天喜を心配させるなど、ジャンからそつと目配せを送られて、敢えて言葉を挟む事はしなかった。

「なら、早く、黒馬亭に帰らなきゃ！」

二人を急かせながら、天喜はとまどうようにゴットフリーに目をやった。

「あなたも一緒に。無事で良かった……本当に良かった」

* * *

悪夢のような夜の喧騒に、人々も疲れきって、眠りにおちてしまったのだろうか。黒馬島の朝はやけに静かだった。今は海から響く小波の音だけが聞こえている。黒馬亭への道すがら、天喜は昨日、海岸で会った不思議な男の話を語りだした。

「緑の髪の男……それはBWだ。天喜はBWに会ったんだな」

「ジャンはあの人を知っているの？！BWは自分はレインボーヘブンの欠片、紺碧の海だといって消えてしまった。とても、不思議な人。でも、あの人のよ。黒馬島の炎を消してくれたのは」

「ああ。タルク、お前、あの時降った雨が塩辛いつて言ってたもんな」

ジャンに視線を送られても、タルクにはどう答えていいかわからない。あの青二才がレインボーヘブンの欠片？紺碧の海？どう考えてみても、それはタルクの理解の範疇を超えていた。

「BW……ガルフ島を飲みこんで、海に消えたかと思っていたが……」

……」

ジャンたちから数歩離れて、先頭を歩いていたゴットフリーが、小声でつぶやく。

「レインボーヘブンの欠片……あの人、BWは、こんな事も言っていたの。私の母さんは……レインボーヘブンの欠片、空だと。そして、私と伐折羅はその血を二つに分けて受け継いでいると……」

「何だつて？ 奴がそんな事を？」

「母さんはいつも、空を見ていた。虹の彼方に至福の島があると言つて。とても、信じられない事だけど、でも、もし、母さんがレインボーヘブンの空なのだとしたら、それはどこへ行ってしまったの？」

「天喜のお母さんがレインボーヘブンの空……そうだったのか。天喜のお母さんは、紅の花園で花の毒気に充てられて死んだとザールは言っていた。だから、お母さんを花園に埋めた時、ザールは見たのか、レインボーヘブンの青い空を」

ジャンの言葉に、天喜は、寂しげに笑った。それから、ふと空を見上げて、舞い降りてきた白い鳥に手を伸ばした。

これは、私の白い鳥……母さんの化身の。

「多分、その鳥がレインボーヘブンの欠片……空だ」

ゴットフリーは立ち止まると、天喜の方を振向いて言った。

「伐折羅の黒い鳥は、朝日をあびて白い鳥に姿を変えた。……伐折羅の黒い鳥と天喜の白い鳥。二羽の鳥を同時に見た者がいるか？ 夜の時間と昼の時間、レインボーヘブンの空の血を夜と昼に分けて、お前たちが受け継いでいるのだとすれば、人間の体が滅びた時、お前たちの母親の心はその鳥に成り代わって、伐折羅と天喜を見守つ

ていたんだ」

天喜の肩に乗り、白い鳥がチチツと囀った。

「本当にそうなの？あなたがお母さんなの？」

天喜の問いに、白い鳥は答えない。鳥の言葉を代弁するようにジヤンが、言った。

「その鳥に人間でいた頃の記憶は残っていないと思うよ。それでも、その鳥は伐折羅と天喜を守りたいんだ。お母さんの強い気持ちは本能となって、今も鳥の中で生きつづけてる」

すると、神妙な顔をしたタルクも、しみじみと言った。

「母親っていうのは、いつも子供の幸せを願っているもんなんだな。例えばどんな形になったにせよだ。俺なんざ、さよならもろくすっぽに言わないで、家をでてきてしまって、ガルフ島が沈んだ後は、生きていくのか死んでいるのかわかりもしない。こんな話を聞くと、もう少し色々な事を気にかけてやったらよかったと、つくづく思うよ」

そんなタルクたちの会話から遠ざかるように、ゴットフリーは、再び黒馬亭に向かって歩き出した。

母親……俺にはそんな記憶はありはしない。だが、リリア……あの人には幸せになって欲しかった。海の鬼灯になってまで、この世に留まりたがったりリアの心。それを絶ち切ったのは、闇馬刀……あの人を一番守らなくてはならない、この俺の剣だったんだ。

27・決戦(6)

心が痛んだ。炎馬と戦った時に見たガルフ島の人々の顔、特にリアの顔が脳裏に焼き付いて離れない。

「ゴットフリー、ちょっと、待ってくれ！」

足早に行ってしまう、ゴットフリーをタルクが呼ぶ。そ知らぬ顔で無視するつもりが、タルクの一言がその足を止めた。

「どうしたんだ、ジャン？お前、気分でも悪いのか？」

先程まで、饒舌に話をしていた、ジャンの様子がおかしい。立ち止まって、俯き、肩を小刻みに震わせている。

「ジャン……お前……泣いてるのか？」

顔を覗き込み、タルクは驚いて表情を曇らせた。

「おい、どこかで怪我でもしたのか？痛いところでもあるのか？」

無言で、流れる涙を手でぬぐう。それでも、ジャンは、あふれ出る涙を止める事ができなかった。

「……だって、心が……伝わってきて……僕は悲しくなっちゃって……」

泣きながら、ジャンはゴットフリーの方へ歩き出す。タルクと天喜は、なす術もなくただ、おろおろとジャンを見守っている。

「お前、何を、泣いている？」

ジャンを見つめるゴットフリーの灰色の瞳は、かすかに戸惑いの色を帯びていた。

だって……泣いているのはお前だろう？その思いが僕の中にあふれ出て、僕は涙を止める事ができない。

「おかしな奴。どこかで頭でも打ったんじゃないのか」

はき捨てるように悪態をついたゴットフリーに、ジャンは少し笑い、聞き取れない程の声でこう言った。

「なら、お前の代わりに僕は一人で泣いている……」

そのとたん、ジャンの足元で土塊が盛り上がり出した。みるみるうちにそれは、高く上に伸び上がってゆく。

「えっ、何っ？ジャンの下が……」

口をぽっかりと開けたまま、天喜は天を仰いだ。だが、今回のタルクはかなり冷静に、この状況を受け入れる事ができた。ガルフ島でも、ジャンは、居住地の屋根をはるかに越える高さの山を作った事があったのだ。もともと、その時、ゴットフリーは寸でのところ、ジャンの作った山から転がり落ちてきた大石の下敷きになるところだったのだが。

ジャン一人がやっと乗れるほどの、細長い山。その頂上に座り、ジャンは膝小僧に顔を隠すように泣いていた。

“僕を放っておいて。一人でここにいたいんだ”

頭に響いてくるジャンの声。

「タルク、何が起こったの？ジャンの声が頭に浮かぶ……それに、この山は……」

「驚くのも無理はないよな。ジャンはな、天喜の母さんのお仲間らしいんだ。レインボーヘブンの欠片ってやつ」

「……レインボーヘブンの欠片？七つの欠片のうちの一つ、それがジャン？お母さんは空、BWは海……そして、私は夜の風も知っている。なら、ジャンはレインボーヘブンの何？」

「ジャンは礎、レインボーヘブンの大地だ。だから、奴は山を作り、

大地を揺らし、天の道を作り出す」

そう告げるゴットフリーの声には、一抹の疑いも込められていなかった。

「レインボーヘブン……女神アイアリスにより七つの欠片に分けられた島……いつか、ジャンやお母さんたちは、またレインボーヘブンに還る。本当にそんな事ができるの？」

「俺やタルク、ミッシェ、そして、ジャンはのために旅を続けてきた。真の至福の島を蘇えらせる場所を探すために」

「私も行きたい……。伐折羅と二人で、お母さんがいるレインボーヘブンの空を見たい」

天喜は琥珀のように澄んだ瞳でそう言った。その頭に手をぼんと乗せてタルクが言う。

「呼んでやるとも。俺たちがレインボーヘブンを見つけたら、天喜と伐折羅を真っ先に。何たって、お母さんが空なんだからな」

同意を求めるようにゴットフリーに目をやった瞬間、タルクははっと、ある物を思い出した。

「そうだ……大切な物を忘れていた」

「ごそごそとポケットをまさぐり、中から取り出した物をゴットフリーに差し出す。」

「これは……」

「ザールから預かったんだ。お前の親の遺品だと言っていた」

「豪奢な造りの金のロケット。このロケットを欲しいが為に、ゴットフリーはザールの罠に陥ったのだ。」

黙ってロケットを受け取り、その蓋を開けてみる。

「中の写真はザールが捨ててしまったらしい……本当にあいつは馬鹿野郎だ！」

はき捨てるように言うタルクの手に、ゴットフリーは再び、ロケ

ットを手渡した。

「そんな物にはもう用はない。どこかへ捨ててしまってくれ」

「えっ、でも、大切な物なんだろう?!」

「今更、親の事を知って何になる?俺には必要のない物だ」

「でも……」

その時、タルクの手に、白い手がすつと伸びてきて、金のロケットを奪い取った。天喜だった。

「捨てるなんて絶対、駄目。これは、私が持っているわ。タルクたちがレインボーヘブンを見つけて、私と伐折羅を迎えに来るまで、私がこれを預かっている」

いいでしょ?と天喜の瞳が強く訴えている。

「ゴットフリー、それでいいのか?」

彼の出方がわからない。タルクは多少、とまどい気味にゴットフリーに目をやった。だが、

「いいだろう。俺は必ず迎えに来る。そのロケットはお前の好きにすればいい」

ゴットフリーには迷いが無い。天喜はぱつと頬を赤らめた。

「ならば、この鳥を連れて行って。この鳥はレインボーヘブンの欠片、空なのでしょ。あなたたちの旅には必要なはず。黒馬島がどこへ行ってしまっても、この鳥が、私と伐折羅のいる場所を見つけてくれるわ」

「黒馬島がどこへ行ってしまっても……ってどういう事だ?この鳥は……」

タルクは解せない風に、首を傾げたが、ゴットフリーには思い当たる節があった。

「この島は、俺たちの前に何の兆しもなく、突然現れた。霧に隠されているだけでなく、この島は……」

「そう、この黒馬島は一つの場合に留まってはられない。島ごと

移動を繰り返し、住民でさえもその位置を知ることができない。だから、一度、この島を出た物は二度と戻ってはこれないのよ」

「何?! 何でそれを早く言わなかった!」

驚くタルクに天喜は気まずそうに下を向く。

「だって、タルクたちは、久しぶりに会った外海の人たちだったのよ……言えばみんなは出て言ってしまう。そして、もう、戻る事はない。それが嫌で……」

「ただし、例外があったな。西の盗賊、そして、ザール。奴らはその方法を知っているはずだ」

「みんなはそんな事を言ってるけど……でも、島が動く前は小さな地震がいくつも起こるから、私たちにも少しは予測ができるのよ」

天喜の言葉にゴットフリーは、ザールが館で言った事を思い出していた。

なるほど、奴が館でタイムリミットはせいぜい5日と言っていたのは、島が移動するまでの時間の事だったんだな……

「まだ、黒馬亭で休めるだけの時間はあるわ。それでも、早めにこの島を出た方がいい。一度、移動を始めたら、次にこの島は海の果てに現れるかもしれない」

28・別れ(1)

“放っておけ”

ゴットフリーの一言で、タルクはジャンを彼が作った山の上に残さざるをえなくなった。

隊長という役職や敬語などのこだわりは、もう、あまり感じなくなっていたが、タルクにとってゴットフリーは、やはり主であることにかわりはなかった。

黒馬亭のま

わりには民家はほとんどない。それが幸いしてか、黒馬亭は海の鬼灯からの業火を免れ、元のままの佇まいを保っていた。

「伐折羅がないわ」

何となくそんな気がしていたのよ……天喜はしょんぼりと首をうなだれる。黒い鳥に乗って去っていった伐折羅の後姿が忘れられない。もう二度と伐折羅と会えなくなるかも……そんな予感があったのだ。

黒馬亭で天喜たちを出迎えたのは、先にもどっていたサームとミツシエだった。

「ザールはどうした？」

「焼け残った屋敷の部屋で寝こんでいるわ。紅の花園での出来事がよっぽど、シヨックだったみたい」

そりやそうだろうと、タルクは思った。魔王になりかけたゴットフリーも然り、首のない白妖馬を見た時など、豪胆なタルクでさえも背筋が寒くなった。

心配ばかりが心を占めていたが、天喜は敢えて明るく笑った。

「とにかく、みんな、疲れたでしょう。お茶をいれるわ。伐折羅だ

って、その内帰ってくるでしょうから」

そうだなと、相槌を打ちかけて、タルクはおやといった顔をする。
「彼の分はいらないみたいだ。泥のように眠り込んでいる」

窓辺のソファに沈みこむように、寝息をたてていいるゴットフリ
ー。

「いろいろな事がありすぎたからな。俺もなんだか眠くなってきた。
一息ついたら、みんなも一眠りした方がいいぞ」

「とりあえず毛布だけでもかけておかないと風邪をひくわ」

あの炎馬を一人で相手にしてきたんだもの、くたくたに疲れてい
るんだわと、天喜はゴットフリーの事が不憫に思えてきた。毛布を
そつと体にかけてながら、その横顔を垣間見る。

初めて見たゴットフリーの無防備な表情に、どきりと勝手に心臓
が高鳴った。それを周りに知られまいと、平静を装うのに天喜はえ
らく苦勞をした。

* * *

黒馬島の朝は、静まりかえっていた。

鳥の囀りでさえも聞こえてはこない。ただ、小波の音だけが疲れ
きった島に響きわたり、子守唄となつて黒馬島を癒していた。

“ジャン、大丈夫？少しは落ち着いた？”

優しく頬をなでてくる風にジャンは、目をこすりながら、笑みを
浮かべた。

「霧花か？うん。泣くだけ泣いたら、ずい分、すっきりしたみたい」

ゴットフリーの心が流れ込んで、涙が止まらなくなってしまった。でも、今はずいぶんと落ち着いて、静かな時間の流れを感じる。奴も疲れて眠ってしまったのかもしれない。

「あいつは意地っ張りだからな。でも、僕が泣きなくなったのは、あいつのせいばかりじゃない……」

“ えっ……？ ”

「もう一つ、とても強い悲しみが僕の心に流れてきて、それがゴットフリーの心と一緒にあって、いてもたってもいられなくなってしまったんだ」

あれは誰の心だったんだろう？ 胸を裂かれそうな切ない思い。

自分が作り出した山の上から見下ろした黒馬島の一角は、哀れに焼け焦げて惨めな姿をさらけ出していた。だが、朝日に照らされた黒い大地では、緑の牧草や無事に残った家々の屋根が、再び生氣を取り戻したかのように明るく輝いていた。

「僕たちは、そろそろこの島を出なくてはいけないな。黒馬島の事は、まだ知りたい事が山ほどあるが、レインボーヘブンを探す旅をいつまでも、中断しておくわけにはゆかない」

“ ジャン……あなたが感じたもう一つの心って…… ”

「さっき言った事？……もういいんだ。だって、焼けおちた町や、海の鬼灯に化身したガルフ島の人々、本当に沢山の悲しみが、この島を覆っていた。あれは、きっと、そういう人々の気持ちだったと思うから」

ジャンの体を蒼い光が覆いだした。

「この山をきちんと元にもどしておかないと……黒馬島が怒るんだろ。うな。けど、天の道は、かけた力が大きすぎて修復不可能なんだけどね」

きまずそうに笑顔をつくる。すると、ジャンが乗っていた山は元の位置に収納されるかのように静かに地面に吸い込まれていった。

“ジャン、あなたが感じたもう一つの悲しみは、きっと、伐折羅の心。誰にも触れられない者ならば、諦める事もできるでしょう。でも、あなたとゴットフリーのその繋がりが、あの子を苦しくさせているのかもしれない。伐折羅……何か悪い予感がする。私の思い過ぎしならばいいのだけれど……”

霧花は、ほのかに感じる一抹の悪い予感をぬぐいされないでいた。

* *

“俺はあんな風に泣いたりしない……”

ソファで寝入りながら、ゴットフリーはジャンの姿を夢の中で思っておこしていた。まるで小さな子供のようなジャンの姿が、自分の子供時代と重なった。

子供の頃から泣けない立場にいた自分。それでも、堪らなく悲しくなっただベッドの中ですり泣いた時がある。孤独だった。とつくに忘れていた苦々しい記憶が蘇ってくる。

水蓮……

今、思ってみれば、彼女だけが子供時代の俺を癒してくれた。だ

が、レインボーヘブンへの啓示と剣を委ねて、あの女はどこへ消えてしまったのか。

夢が薄れ出した時、ゴットフリーが寝ていたソファ上で、窓をたく音がした。不意に途切れた映像とともに、彼ははっと目を覚ました。

「ゴットフリー……」

「伐折羅」

窓越しに見えた漆黒の瞳。ゴットフリーは、ソファの上に身を乗り出すように窓を開けた。

「無事だったんだな。そんな所にいないで中に入って来い」

だが、伐折羅は首を横に振る。

「僕はもう黒馬亭には戻らない。でも、ここを出る前に、あなたと話がしたくて……ちょっとでいいから、外に来てくれる？ みんなに気付かれないように」

タルクは窓とは反対側の床で布団に包まって大いびきをたてている。天喜たちも自分の部屋で寝入っているのだろう。わかったと、ゴットフリーは立ちあがった。

29・別れ(2)

伐折羅とゴットフリーは、海岸へ向かう道を歩いていった。遠くの沖には、海に大きく飛び出した黒い岸壁が見えていた。下にはゴットフリーたちが乗ってきた船が泊めてある。その場所が彼らが黒馬島に関わった最初の場所だったのだ。

突然、船の前に現われた黒い大地。だが、今となつては、偶然らしく装われていた何もかもが、俺たちを迎えるためにお膳立てされていたのだ。

誰が、一体、何のために？

ゴットフリーは、苦々しい思いで、先に行く伐折羅の後を追った。海岸を半分ほど来た時、伐折羅は不意に後ろを振向き、こう言った。「僕は西の山に行こうと思う」

「西の山？父親の事はタルクから聞いたが、お前、その跡を継いで盗賊たちの長になるつもりか……」

「さすがに察しがいいね。大丈夫だよ。奴らは僕の命令には逆らえない。それに話してみると、まだ父の忠臣だった者が沢山いて、僕に肩入れしてくれているんだ。闇の戦士と共に僕は黒馬島を守ってゆく。それが父の遺志なのだから」

「天喜はどうする？お前の帰りを首を長くして待っているぞ」

「学校へ帰ったとでも行っておいて。今までだって、半年に一度ほどしか、家には戻らなかつたんだ。サムとザールをうまく言い包めて、そういう事にさせるつもりだ」

「……ならば、一度、きちんと会って、別れを言っておい」

伐折羅はゴットフリーを見据えて、透き通るような笑顔を見せた。

「知ってる？そういう時のあなたの灰色の瞳は、澄みきって心の底まで染み入ってくる。僕はそれが好きだった……」

突然、伐折羅はゴットフリーに抱きつくと、大粒の涙を流しだした。

「もう、行ってしまうんでしょう？僕はこの黒馬島から離れられない。どんなに一緒にいたいと言っても、あなたがレインボーヘブンを探している限り、それは叶わぬ夢なんだ」

ジャンにしても伐折羅にしても、こう明け透けに泣かれると、どう反応していいものか、わからなくなってくる。ゴットフリーは、伐折羅をささえたまま、しばらく、宙を見つめていた。

「天喜は言った。いつか、レインボーヘブンに行ってみたいと。伐折羅、お前は知っていたのか？母親がレインボーヘブンの欠片、空だった事を」

「……」

「知らなかったのか。お前と天喜はレインボーヘブンの空の血を二つに分けて受け継いでいる。夜叉王の伐折羅と蒼天の天喜。だから俺は約束する。いつかレインボーヘブンを見つけたら、必ず、二人を迎えに来ると」

「だめだ。僕は黒馬島の守り手なんだ……。一緒には行けないよ」

「ならば、黒馬島ごと、レインボーヘブンにすればいい」

ゴットフリーにしがみついて泣いていた伐折羅は、その言葉にえっと顔をあげた。

「この島の御神体の黒馬は、なぜ俺の元にやってきた？闇馬刀も然りだ。そして、海の鬼灯は、この島で俺を待っていた。俺を闇の王にして、黒馬島に君臨させる。そして、この島を根城に、海の鬼灯たちは領土を広げ、破壊と破滅の王国を作り上げようとしていたん

だ。なぜ、奴らは黒馬島にこだわった？レインボーヘブンの女神、アイアリスは言った。彼女に見捨てられ、恨みを残して海の鬼灯に変化した盗賊たち……俺は、その末裔、その長なのだと」

「それは、どういう事？……僕には意味がわからないよ」

「この黒馬島が俺の故郷。多分、かつてレインボーヘブンを襲撃した盗賊たちは、黒馬島からやってきたんだ。あの西の盗賊たちは、直系ではないにしても、その流れをくむ者たちだ。黒馬島は、自分で移動を繰り返す島なのだろう？断言はできないが、この島とレインボーヘブンはどこかで繋がっているぞ。レインボーヘブンの七つの欠片、きつと、その中にその秘密を知る者がいる。俺にはそんな気がしてならないんだ」

「だから、レインボーヘブンを見つけたら、黒馬島ごと、僕たちを迎えに来ると言うの？」

伐折羅は半信半疑でゴットフリーに問うた。

「必ず、迎えに来てやる。それを可能にしてみせる。俺は、どちらかというと、レインボーヘブンより黒馬島側の人間のようなしな」

「そんな話は信じられない……とても、信じられないよ」

一瞬、黙り込むと、伐折羅はゴットフリーの腕にまた、拗ねるように顔をうずめた。

「約束できる？僕にあなたは、何か約束の印を残してくれる？」

「約束の印……俺は天喜からあの鳥を託されている。そして、天喜には、俺の金のロケットを預けてきた」

「鳥……天喜はあの白い鳥をあなたに渡したんだね」

「あの鳥は、同時に伐折羅の黒い鳥でもあった。そして、あの鳥こそがレインボーヘブンの欠片、空。お前たちの母親の移し身だったんだ」

「そう。でもそんな事はもうどうでもよくなった。……約束の印、

天喜には金のロケットか……」

伐折羅の腕が、ゴットフリーの腕を引き寄せる。

「もう少し、かがんで。あなたに見せたいものがあるんだ」

多少、億劫な気分で姿勢を低くした瞬間、ゴットフリーは胸に焼きつくような衝撃を感じた。

そのまま、立っている事もできず、前のめりに倒れこむ。

「伐折羅……お前……」

痛みに耐えながら、見上げた先に、血に染まったナイフを手にした伐折羅が立っていた。

寂しそうな微笑みを浮かべて、伐折羅はゴットフリーを見据えている。

「その傷は消えないよ。それは約束の印だから。あなたは、きっと迎えに来ると言ったね。その傷が痛む度に、ゴットフリー、あなたは僕との約束を思い出すんだ」

鮮血が滲むように、地面に広がってゆく。

「大丈夫だよ。死にはしない。急所はずしてあるから……でも、血がいっぱい流れ過ぎたら……」

もしかしたら、死んでしまうかもね……。

伐折羅は、くるりと倒れているゴットフリーに背を向けると、そのまま、西の方向に歩き出した。

死んでしまっても、それでもいいんだ。ジャン……あんな奴にあなたを獲られるくらいなら、……ゴットフリー、あなたが死んでしまっても、僕は……かまわない。

とめどなく流れる涙を、ぬぐいもしないで、伐折羅は歩き続けた。

レインボーヘブン、万民が憧れる至福の島。その島を見つけて、あなたが僕を迎えに来てくれても、そこに僕の居場所があるのだろうか？

夜の風は言っていた。どんなに憧れても、闇の住民には叶えられない夢があると。

そんな夢を見て、後で悲しい思いをするよりは……

黒馬島、ここに永遠にゴットフリーの屍を埋めるなら、僕は喜んでその墓守になってやる。

30・別れ(3)

体が紅蓮の色に染まってゆく。強く感じていた痛みが、徐々に薄れ出す。朦朧とした意識の中で、ゴットフリーは、自分の胸元にできてゆく血だまりを、傍観者のように見つめていた。

“俺はここで死ぬわけにはゆかない。けれども、この血の海に少しの不快感も感じない……”

だが、

溢れ出る血の流れにあわすように、その表面が泡立ちだしたのだ。ゴットフリーは、口元にかすかな笑いを浮かべた。

“紅の花……俺の血の中にもその種を植えつけるか……”

ゴットフリーが流した血の上に、紅蓮の花が咲いていた。一つ、また一つと血の中に沸き上がった泡が弾けて消える毎、それは紅の花を生み出していった。

おぞましくも美しい紅蓮の花。光を放ちだし、その光はゴットフリーの頭の先で集結し、形を作り始めた。

“……また、会ったな……あきらめの悪い奴だ……”

炎馬……闇への使者。

燃え立つ鬣をなびかせた巨大な炎の馬。怒号のごとく響いてきた、海鳴りの音をかき消すように、それは大きく嘶いた。

俺が死ぬのを待っているのか？

伐折羅への恨みとレインボーヘブンへたどりつけぬ後悔が、俺の中に溢れた瞬間、その背に俺を乗せるために。

炎馬は勝ち誇ったように、ゴットフリーの前に立ちはだかつている。

「……おあいにく様だったな……。俺は伐折羅を恨んでないかいな……レインボーヘブンが見つからなくても、そう困ったわけでもないんだ」

皮肉っぽい笑いで、見上げられた事に腹をたてたのか、炎馬は突然、ゴットフリーの頭の上に高く前足を振り上げた。

「待て！俺の命令を聞け！」

出せる力を全部ふりしぼり、痛みを堪えて体を起こすと、ゴットフリーは炎馬の鬣に手をかけた。伐折羅に刺された傷から流れる血が、足元まで伝わってくる。すると、炎馬は急に成りを潜めたかのように大人しくなり、燃え立つ炎の強さを弱めて、ゴットフリーをその背に受け入れた。

「間違えるな、お前が俺を連れて行くのは、黒馬亭だ」

抵抗するように、炎馬は二・三度嘶いた。

「命令に背くのは許さない。俺はお前たちにとっての王なのだろう？お前たちが支配するんじゃない、俺が支配する側なんだ。闇の王に……お前たちは逆らえない！」

ゴットフリーは有無を言わず、炎馬の腹を思い切り蹴った。ふわりと体が持ち上がる感触があった。頬を風がかすめていった。遠くから聞こえてくる海鳴りの音が徐々に小さくなってゆく。かすかな胸の痛みさえも感じられなくなった時、ゴットフリーの意識は遠のいていった。

“黒馬亭へ”

その言葉だけを残しながら。

* * *

黒馬亭の掛け時計が正午を打ち鳴らした頃、タルクは重い瞼を開いた。

床でそのまま寝入ってしまったらしい。どの部屋もしんと静まりかえっているところを見ると、目覚めているのはタルクだけのことだった。

昨日の火事騒ぎでみんな、眠ったのは明け方過ぎだったもんな。もう少し寝かせてやろう。

そう思った瞬間、タルクは、はっと窓辺のソファに目をやった。

ゴットフリーがいない？！

確かに彼は、ソファで疲れきって眠り込んでいたのだ。一体、どこへ行ったんだ？不安が心に広がってゆく。この黒馬島はゴットフリーにとって鬼門の島だ。彼を一人にさせちゃいけない。

その時だった。タルクはぎくりと耳をすませた。

馬の嘶く声がある。そして、小さく扉をたたく音。

“誰だ……？この嫌な感じは何……”

自分の思考が終わらないうちに、タルクは扉に駆け寄っていた。扉を引きちぎらんかのように開け放つ。

紅蓮に燃える炎馬の瞳がすぐ目の前にあった。そして、鮮血に染

まった体が崩れ落ちてきた時、タルクは背筋が凍る思いがした。

「ゴットフリーー!!」

炎馬……お前、よくも……

形振りかまわず、ゴットフリーの体を抱き上げると、鬼のような形相で炎馬を睨めつける。

だが、炎馬には戦意の欠片もありはしない。ゴットフリーをタルクに渡すと、役目から開放されたと言わんばかりに、空へ飛び立っていった。

* * *

「おいっ、ゴットフリー、しっかりしろっ!!」

呼びかけても返事はない。ゴットフリーの右肩の下から胸にかけての深い刺し傷から、おびただしく血が流れ出ている。

誰にやられた？この傷は炎馬がつけた傷じゃない。

「……………!!」

その時、タルクは息を呑むように立ち尽くしている天喜に気がついた。

「天喜、できるだけ沢山、タオルやシーツをもってこい!それと救急箱。この出血だけでも、止めないと、まずい事になるっ」

「…………ど、どうしたの…………何でこんな怪我を…………」

「いいから、早くもってこいっ!ゴットフリーを死なせたいのかっ!!」

畜生、この島には医者がないって言ってたな……

あたふたと、2階へ駆けて行った天喜を尻目に、タルクはゴットフリーを窓辺のソファへ運んでいった。

幸い急所ははずしている。しかし、ここへ来までどのくらいの血を流した？それに何故、炎馬が黒馬亭に彼を運んできたんだ？

「タルク、これっ！」

天喜が手渡したシーツを裂き、傷口近くを強く縛る。戦いの場で応急処置には手馴れているが、傷の深さにタルクの額からは、とめどなく汗が流れ出た。

「ミツシエとサームは、どうした？」

「サームはいないわ。ミツシエはいくら呼んでも、目を覚ましてくれないの！」

サームの奴、逃げやがったな……ミツシエは……予想がつかん。

「ジャンは、まだ、あの山の上か？天喜、ジャンを呼んできてくれっ！奴なら、この傷でも何とかしてくれる」

その時だった。

「ゴットフリーはいるかつ！」

思い切り大きく開かれた黒馬亭の扉。

「ジャン！良かった。早くここへ来てくれ。ゴットフリーが大変なんだっ」

ぐったりと、ソファに横たえたゴットフリーの姿を見て、ジャンは顔を蒼くした。

「悪い予感がして急いで帰ってきたんだ」

さっき感じた胸元をえぐられるような痛みは……これだったのか

……

「タルク、どいてっ！傷口をふさぐから」

ジャンはそう言つと、ゴットフリーの血だらけの胸に手を当てた。だが、手のひらがほのかに蒼く輝き出したとき、

「や……める」

ゴットフリーの左手がジャンの手を止めた。

「何をいうんだ。このまま、血を流し続けたら、お前、死んでしま
うぞ」

「お前は……力を使いすぎる。そんな物を使わなくても……人には
治癒能力っていうものが備わっているんだ」

「何を流暢な事を言ってる！お前の傷はそんな擦り傷程度の物じゃ
ないって、わかってないのか！？」

「とにかく……手をだすな……俺の命令にお前は……逆らえないは
ずだ」

「ゴットフリー……！」

「大きな声を出さないでくれ……傷に響くんだ。もう、あっちへ行
け」

* * *

何故？何故、駄目なんだ？ジャンは、今にも心が張り裂けそうで、
逃げ出すようにゴットフリーのいる部屋から隣の萬屋の方へ出て行
った。

ゴットフリーが僕に気を使ってくれているのはわかってる。力を
使いすぎて、僕が弱りきっていたから。でも、あいつが力を使わせ
ないのは、それだけの理由じゃない……ゴットフリーは、あの傷を
かばっている。あの傷が消えるのが嫌みたいに。

ジャンは深くため息をつく、店の椅子に所載ない様子で腰をか
けた。

あの傷をつけたのは誰だ……？多分……

伐折羅。

二人の間に何があった？本当に僕は馬鹿だ。BWが警告をくれたのに、一番、ゴットフリーを守らなくちゃいけない僕が、何度も、奴を一人にした。

しょんぼりと首をうなだれているジャンの肩を、ぽんとたたく者がいた。

「タルク……ゴットフリーは？」

「とりあえず、血は止まったよ。今は眠ってるんで、天喜が見えてくれてる」

「……で、大丈夫なのか？」

ジャンの問いにタルクは微妙な表情をする。

「何ともいえない。血を流しすぎた。それに簡単な応急処置だけだから、激しく動いたりしたら、また、出血して今度は本当に命とりだ。お前な、ゴットフリーが眠ってる間に、あの傷、閉じてしまえないのか」

「……駄目だ。ゴットフリーの意思が強すぎて、その命令に僕は逆らえない。僕の力は奴の言葉で完全に封印されてしまった」

「ゴットフリーの意思って、そんなに力があるものなのか？」

ジャンは、タルクの目を見据え小さく笑う。

「それは、もう、絶大な力を持っている。奴はレインボーヘブンの王。欠片である僕たちは、その心には逆らえない」

タルクが、はあとため息をついた時、天喜が足早にやってきた。「大分、落ちついてきたんだけど、熱が出て来たの。冷やした方が

いいわよね」

店の冷蔵庫から、氷を取り出すときぱきとした手つきで、細かく砕く。それから、ジャンとタルクには目もくれないで、ゴットフリーのいる部屋へ大急ぎでもどつていった。

「なんだか、やけにはりきってるな」

ジャンの言葉にタルクは、いささか、不満げな表情をする。

「ゴットフリーの世話をするのが、嬉しいんだろ。……ガルフ島でも、館の女どもはみんな、奴に惚れてたからな」

「本当に？あんなに冷酷極まりない奴に？」

「近寄り難い雰囲気割には、知らず知らずのうちに、人の心をひきつけてしまう。身のほど知らずな娘がコクって、撃沈してゆく姿を、俺はけっこう見ているぞ」

「へえ……可哀相に」

「可哀相なもんか。傷心の娘たちは、全部、あの青二才が引き取っていったからな。考え様によっちゃ、あいつが一番、ワルかもしれない」

「BWか……。なるほどね。女の子の扱いは上手そうだ」

ジャンは、やっと笑顔を見せた。すると、心が少し軽くなった気がした。

あとで、もう一度、ゴットフリーと話をしてみよう。伐折羅と一体、何があったか。それを聞けば、僕にも何かができるかもしれない。

31・別れ(4)

ゴットフリーがいる部屋に入った時、天喜はあれ？と不思議な感覚に陥った。

窓からの日の光が隠れて、部屋が随分うす暗い。それに……

ゴットフリーの枕元に誰がいるわ……

目を凝らしていると、徐々に人の姿が見えてくる。

腰までとどいた艶やかな黒髪、そして黒衣。ソファに膝まづき、片手をゴットフリーの肩に添えながら、その顔を見つめている。

「あなた、誰……？」

振向いたその人は、儚げで陽炎のような美しさを持っていた。天喜は、その濡れた瞳と目が合った瞬間、胸がきゅっと締め付けられる思いがした。

泣いているの？……ゴットフリーを心配して……。

居たたまらなくなって、天喜は部屋を飛び出していった。

私、あの人を知っている。あれは、夜風だ。レインボーヘブンの欠片の……

“彼女はゴットフリーの命令ならば、この世の果てでも飛んできますよ”

BWが言った言葉が頭をよぎってゆく。

* *

「おい、天喜、どうしたんだ？ゴットフリーがどうかしたのか？！」

血相かえて、部屋を飛び出してきた天喜にタルクが言った。

「……何でもない」

「何、怒ってるんだ？ゴットフリーを見てくれるんじゃないかったのか」

「私がいなくても、大丈夫でしょ」

どう考えても様子がおかしい。ジャンは心配になって、ゴットフリーのいる部屋に行こうとした。黒馬亭の扉が開いたのはその時だった。

「クロちゃん……か？」

ジャンは呆氣にとられたように、扉の向こうを見つめていた。クロちゃん？誰だ？とタルクも突然現われた見知らぬ少年に目をやる。浅黒い肌。短い髪。そして、勢いのある黒い瞳は、勝気な少年の性格を物語っているようだった。

「よう」

「クロちゃん、何でここに来たんだ？」

「だって、ジャンが困ってるみたいだし、僕もあの人と話をしてみたかったから」

周りを気にする様子もなく、少年はそさくさとゴットフリーのいる部屋へ入って行った。

「ち、ちよっと、ジャン、いいの？入って行っちゃったわよ。それ

に、あの子、誰なのよ?!」

「……あれが、前に言っていた、古い馴染みの……黒馬島の僕の友達だよ」

「私、あんな子知らないわよ。黒馬島の住民なら、私が知らないわけがないのに!」

天喜の言葉にジャンはしばし沈黙した。……そして、苦い笑いを浮かべて言った。

「僕だって、人の姿をしているのは、初めて見たんだ。でも、天喜が知らないわけがない。だって、あいつは……黒馬島のクロちゃん。黒馬島……そのもの、なのだから」

何イ!? あいつが黒馬島! だって、今、俺たちはその黒馬島の上にいるんだぞ?

たいがいの事に驚かなくなってしまっていたタルクだが、今回はさすがに、自分の耳を疑ってしまった。天喜は、理解ができないらしく、ぽかんとジャンの顔を見つめている。

「多分、あれは実体ではないんだと思う。クロちゃんが自分の心に形を付けているんだよ。だから、あまり長くは人の姿をしてもらえない」

タルクは長いため息をつく。

そうしてまで、黒馬島はゴットフリーに会いたかったのか……。まったく、次から次から、いろんな奴が現われやがる。こんなんじゃない、本当にゴットフリーは身がもたない。

「なあ、ジャン。俺は何となくわかった気がするよ」

「え…？」

「ゴットフリーが、レインボーヘブンを探す理由がだよ。あいつが、求めているのは至福の島でも、無病息災の島でも何でもないんだ。普通の暮らしができる場所。ただ、穏やかに暮らせる、そんな居場所を探しているんだ。ただ奴は王だから、住民みんなに、それをあたえなきゃいけない。そのために、豊かなレインボーヘブンが必要なんだ。俺の言う事、何か変か？変でも矛盾しても反論は受けつけないぞ。いいんだ、これは、俺がそう思った事なんだから」

ジャンはにこと笑顔を見せた。

そう。だから、僕はゴットフリーについて行くんだ。僕自身が、その居場所になるために。

* * *

突然、部屋に現われた見知らぬ少年。ぼんやりと目を覚ましたが、侵入者の気配をかぎとると、ゴットフリーは素早く身を起こした。伐折羅に刺された傷の痛みが電流のように体を走る。それでも、彼の鋭い眼差しは少年を、一瞬、硬直させた。

「まるで、野生の生き物みたいだ……そんなにぴりぴりすると、傷にさわるよ」

「お前、誰だ？！」

「お会いできて光栄です。僕は黒馬島。ジャンの昔馴染みの」
そう言っ、少年は床に膝まづきながら、深々と頭を下げた。

“ 黒馬島には友達がいる ”

ジャンの言葉がゴットフリーの頭をよぎる。

「黒馬島？ふざけた話だな。黒馬島自体が奴の友達だったわけか……」

「だって、ジャンはレインボーヘブンなんだから、友達が黒馬島の僕だとしても、ちつとも不思議じゃないでしょ」

「常識じゃ通用しない言い分だ。けれども、俺たちがその黒馬島の上にいるという事は、お前は実体ではないな。一体、ここに何をしにきた？」

「警告」

「何？」

「僕は、もうすぐ、移動する。だから、早く黒馬島を出た方がいい。その話は前に聞いているよね」

風がびゅうと通り過ぎていった。少年は、その方向を見つめて笑う。

「あの風は飲みこみが早い。本当はもう少し長く留まっていたかったけど……。海の鬼灯に荒らされた分、ここにいられる時間が短くなってしまった。でも、あなたとジャンには本当に感謝してるんだ。僕に蔓延っていた海の鬼灯をあなたたちが退治してくれた。どうしようもなかった、僕一人では……。あの紅い灯に食い尽されて崩壊してゆくのを待つばかりで」

一瞬の沈黙。だが、

「ジャンに助けを求めて、お前が俺たちの船を黒馬島に引き寄せたのか？俺はてっきり、海の鬼灯の策略だとばかり思っていたが」

少年はゴットフリーの言葉に首を横に振る。

「……僕は自由な意思で移動できるわけではないんだ。黒馬島は、自分でも知らず知らずのうちに移動を繰り返している、いわば流浪

の島だ。でも、ゴットフリー、あなたの故郷がこの黒馬島という事にはもう気づいているよね？五百年前、女神アイアリスの怒りがかつて海の鬼灯となった盗賊たち……あなたの先祖……は確かに、黒馬島の出身だ。でもね、盗賊たちは、かつてはレインボーヘブンの守り手でもあった」

「何？」

「黒馬島の盗賊の宿命とっていいんだろうか。殺戮や強盗を生業にする反面、彼らには必要なんだ。“守る物が。伐折羅がそのいい例だ。あの子は”血“や”破壊すること“が大好きな反面、黒馬島の住民……特に天喜を守る事を自分の天命にしている。壊す事と、守る事……そのどちらが欠けてしまっても、伐折羅……夜叉王の心は満たされない。それは、ゴットフリー、あなたにも言えるんじゃない？伐折羅とあなたは一緒に殺戮を楽しんでいた。そして、”守りたい物“を持っている」

「……」

「レインボーヘブンが海に沈んで、その欠片となった後、ジャンは、黒馬島でずっと眠っていた。そして、目覚め、僕らは友達になった。ジャンの鮮明な記憶はその辺りからしか残っていないんだ。だから、黒馬島が、盗賊たちと同じように、かつてはレインボーヘブンを守りながら、海に浮かんでいた事を彼は知らない」

「黒馬島が、レインボーヘブンを守っていたって！？」

「ああ、申し遅れました。僕の名前は黒馬島のクロ。あなたは、この島の全景を見たことがないでしょ？まあ、ほとんど霧につつまれて、天喜の白い島に乗っても島の形はわからないと思うけど」

「黒馬島のクロ？安易な名前だな。回りくどい言い方をしないで、単刀直入に物を言え」

クロは、ゴットフリーの台詞に苦笑いをしながら、話を続けた。

「黒馬島は、そうだな……ちょうど、ドーナツのような形をしている。でも、昔は中央部分の空いた場所に、他の島をかかえていた」

「……」
「もう、お分かりでしょう？レインボーヘブンが至福の島と呼ばれた理由は、島の豊かな資源のせいばかりじゃない。もっと、重要なのは外敵の攻撃を受けなかったという事なんだ」

「レインボーヘブン！……黒馬島の中央にレインボーヘブンがあったというのか！？そして、黒馬島の盗賊たちが、レインボーヘブンへの敵の侵入を妨げていたと」
思わず叫んだ瞬間、ゴットフリーは鋭い痛みで顔をゆがめて、胸を押さえた。

まるで、同じだ。今の黒馬島で、西の山の盗賊たちが、町の住民を守っている事と！

だが、きりきりと痛む傷をかばいながらも、尚、クロから視線をはずそうとはしない。

「だめだよ！そんなに声をあげたら、また、傷が開く！」

「……西の盗賊は町の物には手を出さない。それが、黒馬島の掟。同じだったんだな。かつての黒馬島の盗賊とレインボーヘブンの関係も！」

32・別れ(5)

灰色の瞳に食い入るように見つめられて、クロは一瞬、たじろいだ。だが、

「そう、レインボーヘブンを守るかわりに黒馬島はその恩恵を受ける。それは、古より続いてきた慣習だった。でもね、レインボーヘブンは平和に慣れすぎてしまって、そして、悪いことに住民たちは高い技術を持っていた。彼らは考えてしまったんだ。“盗賊などに守ってもらわなくなつて、自分たちはやっていける”と。本当に馬鹿な話だ。外海のならず者たちと戦う苦勞も知らないくせに、彼らは黒馬島の盗賊を排除しにかかったんだから」

「排除？しかし、レインボーヘブンの住民は力じゃ、とうてい勝てないだろう？」

「薬を使つたんだ。守護の見返りに渡していた、果物や穀類の中に毒薬を仕込んで。それも、徐々に効果を現す陰湿な毒薬を。レインボーヘブンの作物は、豊穡の果実と言われるほどの絶品だ。でもね……それを食べて死んでしまったのは、罪のない、盗賊以外の黒馬島の住民たちだった……」

「……盗賊たちには、毒薬は効かなかった……という事か」

微量の毒を飲み続けていれば、確かに免疫ができるからな。ガルフ島警護隊にも、そういう奴が何人かいた。盗賊の長クラスなら、当然、幼いうちから、その備えはしているはずだ。

「錠を先に破つたのは、レインボーヘブン側だった。黒馬島の盗賊たちは、必要以上の見返りなんて要求しなかったのね。盗賊たちにとっては、“レインボーヘブンを守る事”が、生きが이었다と……僕は今でもそう思ってる」

ゴットフリーは、口元を微妙に吊り上げ皮肉っぽく笑った。

ひどい話だな。盗賊どもの魂が海の鬼灯になって、さ迷うのも無理がないような気がしてきたぜ。

二つの島の均衡が破れた時、盗賊は怒りのままに、レインボーヘブンを襲撃した……。そして、守護神アイアリスは、どうしようもなく荒れ果てたレインボーヘブンを七つの欠片に分け、海に沈めた。その住民は船で逃がし、盗賊どもには手を差し伸べなかった……

「やはり“レインボーヘブンの伝説”は、レインボーヘブン側に都合よく書かれた創作だったというわけか。しかし、ジャンは別にしても、アイアリスに七つに分けられた欠片たちは、その事実を知っているのか？」

BW、霧花、そして、伐折羅と天喜の母。どれをとってみても、彼らは至福の島の再興を純粹に願っているだけのように思われるが

……

ゴットフリーの思惑を認めるように、クロは言った。

「彼らには、その記憶はないと思う。そして、僕はそれを伝えたくはない。ゴットフリー、あなたが本当の至福の島を欠片たちと共に作るというなら、伝説の裏側はもう、ここで消してしまわないか？ 恨みの連鎖は新たな海の鬼灯を生み出すだけだ。欠片たち……特にBWにこれ以上の罪の意識を背負わすのは酷すぎる」

ゴットフリーは俯くと、無言でしばし何かを考えこんでいた。が

……

「クロ、お前も、レインボーヘブンの欠片の一つか……？」
いきなり、出された問いに、クロは微妙な笑いをみせた。

「さあ、どうかな？ 欠片のようでもあり、そうでもない……」とでも答えておこうか。それより、話が長くなりすぎた。あなたの傷は僕が閉じる。だから、早く準備して。僕の姿はもうすぐ消える。それとともに黒馬島は、移動を始める」

クロの手が胸の傷に伸びてきた時、ゴットフリーはそれをこばむように、左腕をあげた。

「止める！ 俺はそんな事は頼んじやいない」

「その傷じゃ、黒馬亭を出たところで命が尽きるよ！ ちょっと、手荒になるけど、我慢して」

右手をゴットフリーに向けて差し上げ、手のひらを大きく広げる。いつもジャンがやる、見慣れた仕草だ。ゴットフリーは、クロの力に抗うように叫んだ。

「止めるっ！ この傷を消すのは俺が許さん！！」

「あなたの命令は僕には届かない！ 僕は、ただの黒馬島。闇の王の配下でもなく、それに、レインボーヘブンの欠片だとも、僕は認めていない」

その瞬間、ゴットフリーとクロのいた部屋が鉄色に輝いた。銀よりも重くのしかかるような鈍い光。

光に押されるように、ゴットフリーはソファの上に突っ伏した。体をクロの光が覆っている。痛みと共に徐々に消えてゆく深い傷。だが、ゴットフリーの心は傷が癒えるほどに沈み込んでいった。

「心配しないで、その傷は完全には消えない。その傷は闇の烙印。僕ら、地上の者には手が出せない。それに、伐折羅……夜叉王の強い思いが込められていて、僕の力では癒す事もできない。やっかいな傷をつけられたもんだ。この先、それはあなたを相当、痛い目にあわすかも知れないよ」

胸の傷を確かめながら、ゴットフリーは笑った。

「この傷は契約だ。伐折羅の居場所を作るための。それに、俺はこの傷をやっかいだとは思わない。伐折羅が夜叉王ならば、この傷には何か意味がある。それは、俺に不利な物であるはずがないんだ」

かすかな笑みを浮かべながら、クロの体が陽炎いだした

「本当にお別れの時が近づいてきた。急いでこの島を出て！そうしなければ、あなた方を僕は海の果てへ連れていってしまうかもしれない」

クロの言葉にゴットフリーはソファから、飛び出すように身を起こした。ふらりと眩暈が体を襲う。だが、そのままドアに向かって歩を進める。

「お気をつけて。僕の力は流した血までは取り戻せない。この島を出たら、ちゃんと休養をとることです」

「世話になったと言っておこう。また、お前とは会う事になると思うが」

「ええ、いつか必ず！」

振り返りもせず、部屋から出て行ったゴットフリーの後姿を見送りながら、クロは寂しげにつぶやいた。

レインボーヘブンが消えた時から、僕の流浪は始まった。アイリスの意思は、僕を一カ所に留まる事を許してくれない。いつか、僕も帰れるだろうか……元のあの心地よい幸せな場所へ。

レインボーヘブンの欠片、“黒馬島”として。

* * *

押しても引いても、ゴットフリーのいる部屋の扉は開かない。額の汗をぬぐいもせずに、タルクは扉に体当たりをくらわしてみる。

「無駄だよ。クロちゃんの力で扉はロックされちまつてる」

「だって、ジャン、あんな得体の知れない子をゴットフリーに近づけていいの？」

悲愴な表情の天喜に、ジャンはくすりと笑った。

「クロちゃんの事を得体の知れない奴よばわりか？何だよ。天喜は黒馬島に住んでるくせに」

「だって、あの子が黒馬島なんて……到底、信じられないわ！」

その時だった。タルクが開けるのに四苦八苦していた扉が、突然、開いたのだ。

「ジャン、タルクっ！船へ戻れ。黒馬島が移動するぞ！」

「ゴットフリー！お前、傷は？！」

「そんな事を気にする暇があつたら、早く馬とミツシエを連れて、ついて来い！」

タルクは呆気にとられたように、ゴットフリーを見つめていたが、

「天喜、ミツシエを起こして来てくれ。俺は馬を引いてくる！」

半ば条件反射的にその言葉に従った。

32・別れ(5)(後書き)

* 次回、最終回です^^:(

ゴットフリー、ジャン、タルク、ミッシェ、そして、黒馬島の運命は?!

33・別れ(6) ー最終章ー

「ジャン、お前は俺と来い！」

黒馬亭の玄関にゴットフリーが出た瞬間、旋風が吹いた。激しく揺れ出した地面をもろともせず、それは、大地にどしりと四肢を据えている。

ゴットフリーが乗っていた黒馬……黒馬島の御神体の

ミツシエを伴い、急ぎ足で駆けていた天喜は真近に見る黒馬の姿に圧倒されたかのように立ち尽くした。だが、ゴットフリーとジャンは天喜を通り越し、黒馬の背に飛び乗った。

ジャンがゴットフリーの後で天喜に手を振る。

「また、会える。それまで、元気で」

「待つて、もう、少しだけ待つて！きちんとお別れを言わせて」

別れの時を悟った時、天喜の目にはとめどない涙が流れ出した。だが、ゴットフリーはそんな天喜に一瞥を送っただけで、馬を引いてきたタルクに、一言、こう言った。

「タルク、お前の役目だろ」

風のように走り出した黒馬を見送りながら、天喜はなおも泣き続けた。

「天喜……」

最後の最後まで、何で俺が天喜の世話をやかなきゃなんののだ？タルクは、大弱りで天喜の肩に手をおいた。

「もう、時間がないんだ。とにかく、待つていてくれ。俺は……俺

たちは必ず、レインボーヘブンを見つける。そして、お前と伐折羅を迎えにくるからな！」

振り向いた天喜の目に、人の良さそうなタルクの真剣な顔が飛び込んできた。いつも天喜はその顔にほっと、心が和らぐのだ。

「ありがとう。信じているから……私はあなたを信じてる」

突然、正面から天喜に抱きつかれて、タルクは目を白黒させた。けれども、揺れはますます、激しくなってくる。タルクは、天喜をそっと体から引き離すと、その頭をくしゃくしゃとなぜて言った。

「心配しなくても、大丈夫だ。それまで、体を壊すなよ」

そして、ミツシエを抱えるように馬の前に乗せると、タルクも馬に飛び乗った。急がなければ。ゴットフリーの黒馬はとうに先へ進んでいる。

「さようなら！あなたたちも、気をつけて！」

背後に小さくなつてゆく天喜の姿に、後ろ髪を引かれる思いがしてならない。黒馬亭から借りた馬は、今度はサラブレッド級に速く走ってくれている。

「有難い。今は、あの“夜風”とかが力を貸してしてくれるみたいだ」

すると、ぱつりとタルクの膝先でミツシエが言った。

「ねえ、タルク？」

激しい揺れの中を矢のように走る馬を操るのに、四苦八苦のタルクにミツシエは涼しげに言う。

「あのまま、天喜をさらって連れてくれば良かったのに」

「……お前な、この非常時に……」

くすくす笑う、ミツシエを無視して、タルクは馬を飛ばし続けた。

俺だって、そう、したかったよ！

だが、黒馬島が不気味なうなり声をあげ出した時、その事はタル

クの心の奥深くにしまい込まれてしまった。

急げ！黒馬島が消えてしまう前に、この島を早く出るんだ！

* * *

「ジャン、タルクは、まだか？！もたもたしていると、本当に海の果てに連れてゆかれてしまうぞ」

「無理だよ。この黒馬に追いつくのは、待つて……」

疾風のように駆けてゆく黒馬。ゴットフリーの背中にしがみつきながら、ジャンは後方を指差した。

「あれは……タルクたちだ！早くつ。船はもうすぐだ……！」

だが、今までになかった大きな揺れが黒馬島を襲ってきた。叫び声のような轟音が黒い大地を震わせる。すると、船の泊めてあった岸壁が二つに裂けたのだ。

「ああっ、船の上の岸壁が崩れるぞっ……！」

大音響とともに崩落する岸壁。

万事休すか！ゴットフリーは、崩落する岸壁を眺めながら、唇をかみしめた。

「俺たちの船が……」

やっと黒馬に追いついたタルクもただ、呆然とその様を見つめるだけだった。

黒馬島を覆っている靄が一層濃さを増してゆく。

その時だった。固唾を飲むように押し黙っていたジャンが叫んだ。
「船だ！僕たちの船がこちらへやって来る！」

「何？！」

崩落した岸壁の向こうから、一隻の帆船が近づいてくる。“信じられない”という言葉はもう、タルクの口からは飛び出してはこな

かった。

「BWか?! きっと、BWが波を起こして船を動かしてくれているんだ! 馬を降りて、海岸へ走れ! あの船は僕らの近くまで来てくれる!」

急げ! と言う誰かれなしの言葉と共に、ゴットフリー、ジャン、そしてミッシェをかかえたタルクは海岸へ全力で疾走した。

黒い大地が揺れている。叫ぶように軋みながら。

「クロちゃん、もう少し、堪えてくれ!! 僕らが船に乗り込むまで!」

ジャンの声に答えるかのように、黒馬島が唸りをあげた。

*
*

「黒馬島が声をあげるなんて……そんな事もあるんだね」

西の山の頂に立つて、伐折羅はつぶやくように言った。不思議な事に大地の揺れは伐折羅の足元には届いてこない。黒い靄に包まれた頂は、聖地のように静まり返っていた。

澄んだ湖底の眼差しは、ただ、一点を見据えていた。肩に止まった黒い鳥に手をやると、伐折羅はそつとそれに頬をよせた。

「ありがとう。一緒にいてくれて。でも……もう、行っていていいんだよ。あの人たちについてゆくんだろ」

振りほどくように、鳥の止まった手を高く空に上げる。その瞬間、黒い鳥は眩しい光を放ちながら純白に色を変えた。すると、黒馬島を覆っていた厚い靄が、伐折羅の見つめる一角だけ、溶けるように

なくなったのだ。

黒馬島の靄に隠され、生まれてこのかた見たこともない青い海の輝きに、伐折羅は目を細めた。その中を一隻の船が東に向けて奔ってゆく。

ゴットフリー。やはり、僕はあなたに求めてしまう。僕の居場所を探してくれと。……あなたを殺してしまっていたら、僕の希望は永遠に失われてしまうところだった。

僕は待っている……あなたが、僕を必要としてくれる、そんな日が来ることを。

伐折羅は、船をめざして飛んでゆく白い鳥を見送りながら、透き通るような笑顔をみせた。

さようなら。伐折羅の黒い鳥、そして天喜の白い鳥……寂しくはないだろう。お前たちは二つで一つなのだから。

* *

「な、なんとかセーフか……、みんな乗ってるか？」

間一髪で乗り込んだ船の甲板で、タルクは激しく息を切らして言った。もともと、早くない足で、ミッシェを抱えながら全速力で駆けたものだから、心臓が破裂しそうな気分だ。

そんなタルクに見向きもしないで、ゴットフリーは甲板の向こうを食い入るようにつめていた。

「黒馬島が消えてゆくぞ……」

島を覆っていた厚い靄が、徐々に薄れてゆく。

波がかかるほどに小さくなり、やがて、黒馬島は、靄の向こうに

見えてきた青い空に溶け込みながら完全に姿を消してしまった。

そこには何もなかったかのような、蒼天の空。
視界の先には、胸のすくような青い海。

ジャンはその光景をほろ苦い思いでみつめていた。

「虹の道標……」

黒馬島が消えた場所から七色の虹が東に向かって帯をかけている。
そして、虹の向こうから、こちらへ向かって一羽の白い鳥が飛んでくるのだ。

レインボーヘブンの欠片、空。

「なあ、ジャン。黒馬島って結局は何だったんだろうな」

ジャンは横で同じ景色を見つめていたタルクに目をやって、笑みをうかべた。

きっと、タルクにはレインボーヘブンの虹の道標は見えてはいないんだな。それなのに、タルクは僕らに着いてくる。いや、ゴットフリーにか……。

「今回の事で俺はつくづく、自分の無力さに気がついたよ。お前や伐折羅のように俺はゴットフリーを少しも支えてやれなかった。ただ、天喜と二人でバタバタと動いていただけだ」

「そんな事はないだろう？ 実際、町が燃えた時だってタルクはよく働いたし、白妖馬とだって戦ってくれた」

「あれは、お前の力だ……。お前の力が俺の剣に宿ったから、白妖馬を倒せたんだ」

おまけにジャンは、その力で白妖馬の魂まで浄化したんだ。それ

に比べて俺は……

ジャンは、泣き入りそうな顔の大男を見据えて、にこと笑った。
「お前は持っているよ、ゴットフリーを支える大きな腕を。だって、タルクはゴットフリーがレインボーヘブンの王であるうがなかるうが、奴についてくるじゃないか。それは、僕らにも海の鬼灯にも持ち合わせていない心だよ。無償の心でお前は、ゴットフリーについてくる。それは、何よりも強い支えになるんだよ」

「だが……」

「ほら、つべこべ言っていないで支えてやれよ。そうしないと、ゴットフリーが、甲板から転げおちてしまうぞ」

はっと、振り向いて、タルクは大急ぎで崩れるように倒れてゆくゴットフリーの体に手を伸ばした。

「タルク、ゴットフリーを下の部屋で休ませてやれよ。あれだけの目にあつて、血を流したんだ。普通に立っているだけでも大変だっただろうに」

「なあ、ジャン……」

疲れ切つて意識を失ったゴットフリーをかかえながら、タルクが言った。

「崩壊したといったって、大地には緑が芽吹いていた。ガルフ島には、何人も警護隊の精鋭たちが残っているんだ。レインボーヘブンの旅が少しばかり遅れたって、彼らが何とかしてくれる。どこかゆつくりできる島を見つけて、二・三日、滞在するっていうのはどうだ？俺は、ゴットフリーを少しでも休ませてやりたい」

その時、上空から白い鳥が舞い降りてきた。ジャンの後ろに立っていたミッシェは、手を伸ばし、白い鳥を船に招き入れる。その様子を見ながら、ジャンが言った。

「そつだな。黒馬島の場合も然り、僕等の旅が何かに導かれているのだとしたら、休息もその一部なのかもしれない」

「よし、決まった！次の島では、温泉を探すぞ！！」

「おい、あまり羽目はずしすぎると、後で、また、ゴットフリーの機嫌が悪くなるぞ」

力強く宣言するタルクにジャンは思わず苦笑した。

レインボーヘブンへの虹の道標は東に向けて光を伸ばしていた。船は風と波にのって、その後を追いかけて行く。

次の島は、グラン・パープル。

それは、六番目のレインボーヘブンの欠片が眠る島。

「アイアリス」第2部 〵黒馬島奇談〵 完

33・別れ（6）　　ゝ最終章ゝ（後書き）

完結しましたゝ！いかがでしたか？長いお話にお付き合いくださった方。ありがとうございました。

「アイアリス」シリーズは、一応、4部完結の予定で構想を立てているのですが、只今、第3部「虚無の王宮 水晶の棺」を連載中です。次の舞台は、地味？な黒馬島と違って、華やかに栄えた王国、グラン・パール。新しい登場人物も加わって、さらに深くお話を書き進めてゆきたいなあ、なんて、思っています。よろしければ、第1部「虹と闇の伝説」も合わせて、どうぞ。

b y m i c h e l

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246g/>

アイアリス～黒馬島奇談～

2010年10月11日18時06分発行